

ROAD

Annual Report
2023



2024年3月第12号

国立大学法人
国立大学法人

愛知教育大学
静岡大学

愛知教育大学大学院教育学研究科
静岡大学大学院教育学研究科
共同教科開発学専攻

2023 年度報告書

ROAD



令和5年度
教科開発学セミナーⅢ合同発表会

Annual Report 2023

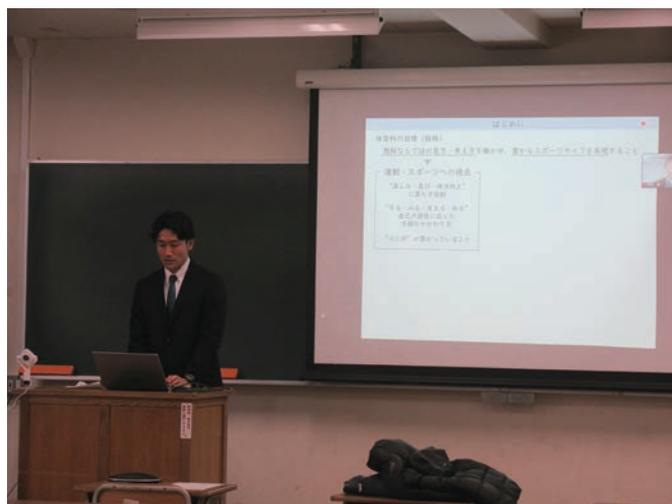
令和5年8月27日(日)
ハイフレックスで開催 (zoom、静岡大学教育学部 G 棟)



令和5年度
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ合同発表会

Annual Report 2023

令和5年2月17日(土)・18日(日)
ハイフレックスで開催 (zoom、静岡大学教育学部 G 棟)



令和5年度
最終試験（3月修了生）

Annual Report 2023

令和6年1月20日（日）
静岡大学 教育学部 G棟 202



令和5年度
修了式（3月修了生）

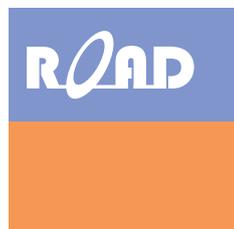
Annual Report 2023

令和6年3月23日（土）
於：静岡県静岡市



CONTENTS

目次



巻頭言	
I. 共同教科開発学専攻の概要	1
II. 共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告	23
III. 学生の研究課題と指導体制	35
IV. 学生の研究活動	41
V. 修了生の論文要旨及び執筆体験談	53
VI. 教員の教育・研究活動	77
VII. 諸資料	115

巻頭言



共同教科開発学専攻
副議長 中野真志

愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻は、2011年10月に設置認可を受け、2012年4月に開設された後期3年だけの博士課程です。教科開発学とは、教科専門と教科教育を併せた「教科学」と教職専門を発展させた「教育環境学」を融合した新たな学問領域です。今日の子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑化、多様化した諸課題に対応した研究を行っています。

本共同専攻では、教科開発学について高度で専門的な教育及び研究を行うことにより、「教育事象の因果関係を把握し、教科との関わりの中で学校教育の抱える諸問題に対応した研究を自立して遂行できる能力」、「学術的及び専門的知見を教科内容として構成し、教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発する能力」、および、「学校教育の実践を理論化し、その理論を実践に活かす能力」をもつ者の育成を目指しています。

本共同専攻は、大学院修士課程又は専門職学位課程や教育現場等で培った十分な学力、研究能力、実践力に加え、新たな学問分野に挑戦する意欲を有し、博士の学位取得後、教科開発学の諸分野において自立して研究と実践を行い、大学教員をはじめとした研究者として、広く教育界に貢献する意志のある者を求めてきました。

今年度で13年目を迎え、これまでの修了生は48名です。学位取得後の進路は教職大学院、4年生大学、および短期大学等で40%弱となっています。修了生たちは、現在、本共同専攻で学んだ知識や経験を活用し、教育者、研究者として幅広く活躍しています。なお、入学者の中には大学や短期大学の教員がいたり、博士課程の在学中に大学や短期大学に就職したりした院生もいますが、彼らはこの数値に入っていません。加えて、大学や短期大学の教員志望ではなく、これまで取り組むことのできなかつた研究を深めるために進学した院生も在籍しています。本共同専攻は、そのような動機の進学希望者も受け入れてきました。

以上、本共同専攻の趣旨と経緯等について述べてきましたが、そもそも学校における教育課程を構成する教科とは何でしょうか。一般に、教科とは学校で教えられる知識、技能等を各教科の内容の特質に応じて分類し、系統立てて組織化したものと定義されています。そして、教科指導は系統的に組織化された内容を教え、子どもの知性を育成することを主たる任務としています。一方、教科外活動の主たる任務は、子どもの自主性を育て、民主的態度と行動力等を形成するという役割を果たすことです。

しかし、学校教育における教育課程、教科自体は、国、文化、社会、および、時代によって、社会的な要請と子供のニーズ、支配的なイデオロギーの影響を受けながら変化します。従って、教科とは、教育課程を構成する組織形態の一つであり、また、同じ教科名であってもその特質は全く異なる可能性もあると考えた方がよいでしょう。

たとえば、アメリカでは、1913年に中等教育改造委員会が、ハイスクールの教科に関する14の小委員会の中に社会科委員会を指名し、1916年に「中等教育における社会科」という報告書を連邦教育局より刊行しました。そして、社会科は、当時のアメリカ市民の形成という課題を解決するために、既存の社会科関係教科、地理、歴史、政治、経済等を再編成し、全く新しい教科類型として誕生しました。その後、社会科という教科はアメリカで定着しましたが、安藤（1988）によれば、その定義は一つに限定されず、玉虫色で変幻自在な教科と見なされ、社会科を担当する教師の人数と同数の定義が成り立ちうると言われています。この錯綜した社会科観を解明したのが、R.バー（Barr）他です。彼らは19世紀から1970年代までの社会科の主要な潮流を「市民性の伝達としての社会科」、「社会科学としての社会科」、「反省的探究としての社会科」の三つに分類しました。

これらの社会科の類型は、それぞれ特有の目的、内容、方法等の中で統一性が保たれていますので、当然、異なる類型の社会科観に立つ教師の社会科教育、社会科のカリキュラム、社会科の単元、および、社会科の授業は異なります。あるいは、ある社会科教師の社会科観がこれらの三つのどれか一つに重点が置かれていたとしても、実際の社会科のカリキュラム、単元、授業では、これらの三つの類型が複合的に組み合わせられたり、混在したりしている可能性もあります。以上、教科とは何か、社会科を例に若干の歴史的な解説を試みました。

それでは、教科開発学とは何でしょうか。梅澤収（元静岡大学大学院教育学研究科長）は、ROAD第3号の巻頭言において、教科開発学は「Subject Development」よりも、むしろ、教科革新「Subject Innovation」、教科創成「Subject Creation」と捉えて欲しいと述べています。そして、教科開発学の意義と役割は、大学の専門知が教員養成教育を媒介として学校教育を接合していく回路を創ること、それを可能とする知の方法論（知の技法）を理論的・実践的に究明することだと主張しています。

どのような学問分野においても、知的文化遺産の継承と発展を軽視した「革新」と「創成」はあり得ないでしょう。大学院案内に書かれた形式的な説明ではなく、本共同専攻の教員と院生が、今後も継続して、それぞれの教科に関わる開発的な研究に積極的に取り組む中で、教科開発学とは何かについて活発な議論がなされ、教科開発学の実像が理論的、実践的に洗練され解明されることを期待しています。

【参考・引用文献】

- 愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期博士課程）共同教科開発学専攻（2015）『ROAD: Annual Report 2014』国立大学法人愛知教育大学・国立大学法人静岡大学。
- 安藤輝次（1988）「社会科内容構成の諸アプローチ」木下百合子・船尾日出志編『社会科教育論』pp.62-81, 東信堂。
- 歡喜隆司（1988）『アメリカ社会科教育の成立・展開過程の研究』風間書房。
- 中野真志（2002）「総合学習時代のカリキュラム論」木下百合子・手取義宏編著『総合学習時代の授業論－社会・メディア・コミュニケーション』pp.56-71, ミネルヴァ書房。

I. 共同教科開発学専攻の概要

1. 専攻の趣旨・目的

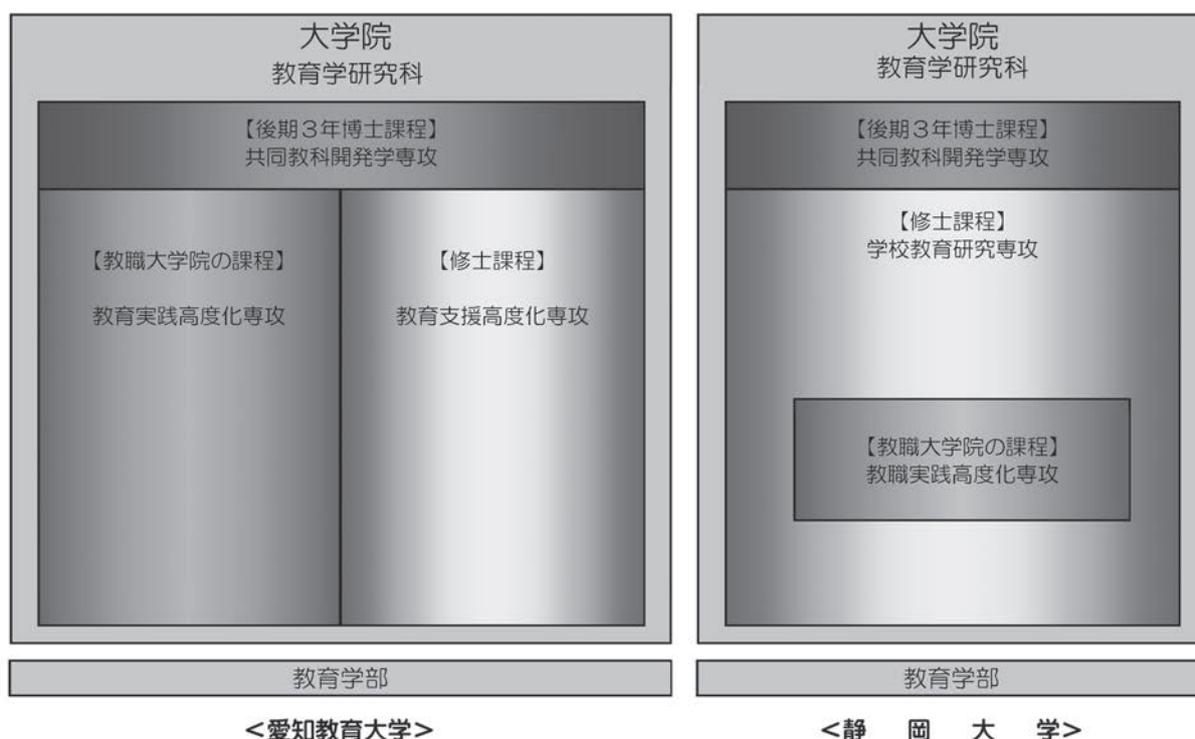
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は、共同教育課程制度を活用し、愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された、後期3年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は、教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し、学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で、教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系的な欠如等の課題が浮き彫りになってきていること、それに加え、中央教育審議会においても、教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり、これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化、また、それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること、などが背景となっています。これらの課題に応えるため、愛知教育大学及び静岡大学教育学部は、国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし、大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため、教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は、「教科開発学」の究明を通じて、教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと、また、「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し、その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部、あるいは修士課程等で指導を行うことによって、優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

共同教科開発学専攻が置かれる環境



2. 専攻の内容・特色

「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は、主に、教育環境に適した教育内容構成の研究（教科学）、教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究（教育環境学）から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして、本共同専攻は、「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ、もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

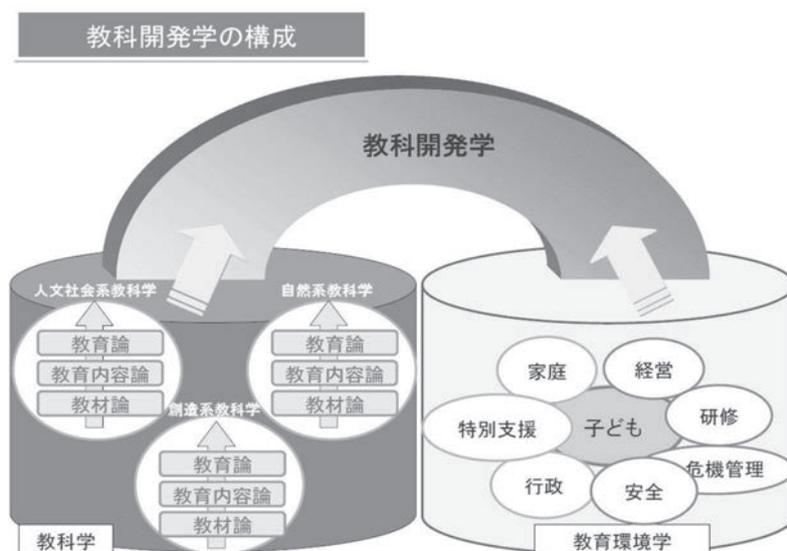
専攻の分野として「教育環境学」、「教科学」（人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学）という4つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして、教育論・教育内容論・教材論という3つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は、児童生徒の発達のために、どのような教育目標のもとに、どのような内容をどのように教え（教師）・どのように学ぶか（学習者）を論じるもので、従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論、指導論、学習過程論をも含みます。

「教育内容論」は、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤として持ちながら、その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し、個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は、教科が、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し、教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの3つのアプローチにより、3つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し、教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら、入学して修学することができるよう、講義は、原則的に土曜日、日曜日に実施し、夏期や冬期における集中講義も導入するなど、時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

（専攻名）	—	（分野）
共同教科開発学専攻		教育環境学 人文社会系教科学 自然系教科学 創造系教科学



教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ、働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の視座から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合、家庭、学校、地域、社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては、従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ、子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追究します。

教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは、「教科」の学問的内容を「教科専門」、「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが、両者の体系化はまだ進んでいません。そのため、教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は、従来の教科専門と教科教育を融合し、教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探求するものです。教科を「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という3つの分野に分類し、教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか、その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下、3つの分野について紹介します。

① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語、文学、歴史、文化、自然にかかわる人文社会的な課題に対して、自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め、地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では、誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく、史資料読解やフィールドワーク（参加、体験、観察、インタビュー、収集など）により自らが積極的に対象にかかわることで得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め、その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には、言語学、歴史学、地理学、民俗学の立場からアプローチして、それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論、教育内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。

② 自然系教科学分野

社会が複雑化し、自然環境が変化し、従来の価値観が変わる中で、科学的リテラシー、数学的リテラシー(科学的、数学的に思考するための基本となる能力)の育成が求められています。観察、仮説の立案(モデルの構築)、検証(論理的説明、実証)などの活動を通して自然系教科における教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には、(ア)地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築、(イ)最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い、情報教育・情報科学の知識を活用して、教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る、(ウ)電子黒板やPDA端末などのICT環境が整備された教室における教育内容・教育方法のあり方、あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

③ 創造系教科学分野

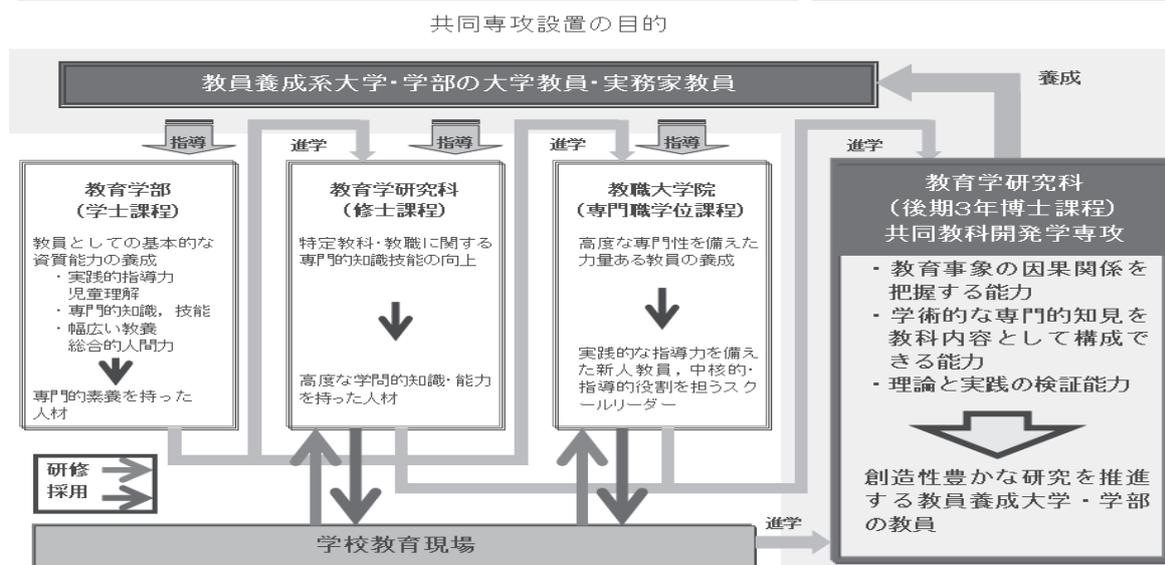
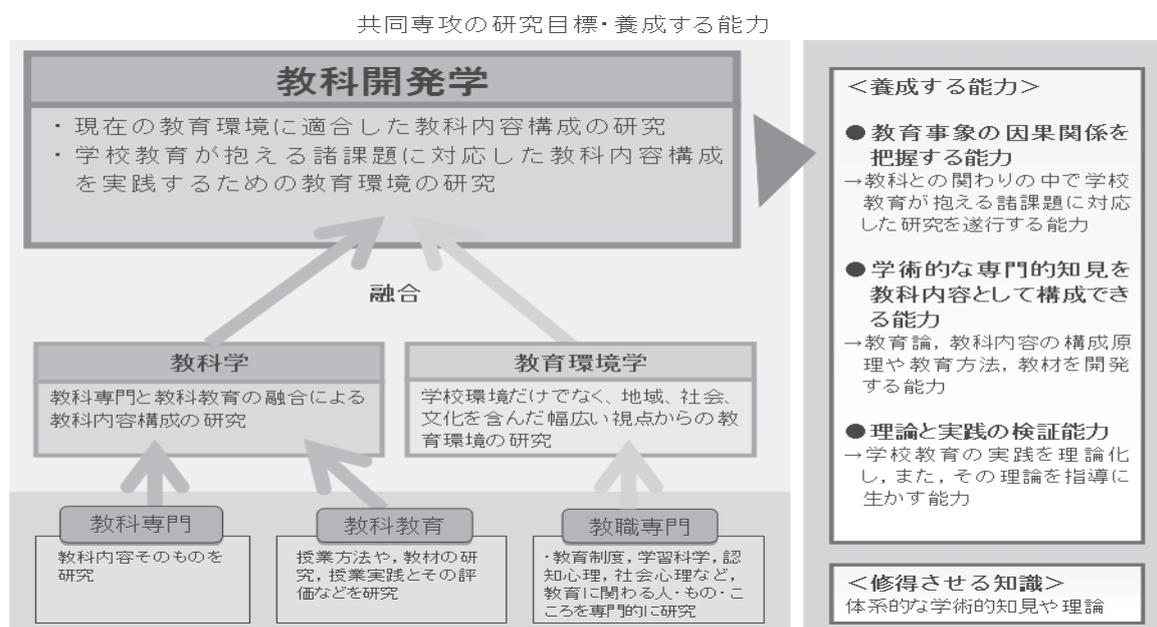
音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では、子どもたちの潜在的能力や感性を引き出し、これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や、健康あるいは体力を備え、豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し、「生活力」、「身体力」、「表現力」を中心とした教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として、異世代との共感力、自らの生活課題の発見、生活課題を解決する知識・技術、ものづくり教材開発、ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として、保健情報の収集と分析、体育教師教育論、運動学習、運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として、観賞とリテラシー、思考プロセスと表現技法、音楽と身体の動き、発想支援等があります。

3. 養成する人材像

本共同専攻は、「教科開発学」による教育研究を通して、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行する能力（「教育事象の因果関係を把握する能力」）や、教育論、教科内容の構成原理や教育方法の研究、教材を開発する能力（「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」）といった学術的な専門的知見を教科内容として構成できる力を養成します。

本共同専攻の入学者は、修士課程修了者、教職大学院修了者、教育現場を熟知した現職教員などを想定していますが、これらの多様な経験を持つ学生が交流することにより、学校教育の実践を理論化し、また、その理論を指導に生かす能力（「理論と実践の検証能力」）を身につけることもねらいとしています。

このような能力を身につけることによって、今日の学校教育が抱える諸課題に対応可能な現場教員を育てる教員養成系大学・学部の教員として、広く教育界に貢献する大学教員を養成します。



4. 修了要件・学位

<修了の要件>

標準修業年限は3年ですが、特に優れた研究業績をあげた者にあつては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は20単位以上とし、基礎科目は6単位以上、分野科目は10単位以上、応用科目は4単位以上です。なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要がありますが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

本共同専攻は、必要な研究指導を受けた上に、学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお、学位論文の提出要件は、本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

科目 専攻	基礎科目		分野科目				応用 科目	合計
			教育環境学 分野	人文社会系 教科学分野	自 然 系 教科学分野	創 造 系 教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科 開発学専攻	3	3	10				4	20
合計	6		10				4	20

<学位論文と学位の授与>

学位論文は、本共同専攻の目標とするところに従い、「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては、愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は、「博士（教育学）」とします。

なお、学位を授与された方が、学位の名称を用いるときは、両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学、愛知教育大学及び静岡大学）」

5. 研究指導体制

本共同専攻における教育は、授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし、主指導教員は学位論文の指導のみならず、履修指導も行います。本共同専攻では、主指導教員の他に、両方の大学から少なくとも1名以上の副指導教員を配置し、3名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え、様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は、主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は、履修登録に沿って履修します。入学時に合同オリエンテーション等を行い、主指導教員、副指導教員等と学生の信頼関係を作り、3年間共に学び、研究していく関係を構築するために両大学の教員と学生、あるいは学生同士が直接対面して密に交流する機会を設けます。

講義や研究指導に関して、遠隔教育システムを取り入れて、教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

セミナー方式で開催する演習等においては、両大学で毎年交互に行います。

6. カリキュラム

本共同専攻の教育課程は、博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」、各分野の専門的な「分野科目」、各分野の総合的な「応用科目」の3つの科目で構成されています。

基礎科目の「教科開発学原論（2単位）」では、「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法論を習得し、「教科開発学実践論（1単位）」では、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を探究します。これら2科目は、必修です。その他も含めて基礎科目群からは、必修科目の2科目3単位を含め選択科目のうちから3単位、計6単位以上を選定して履修します。

分野科目は、「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。教育環境学分野ではマネジメント領域、教育方法領域、環境領域から科目を構成し、学校を取り巻く諸環境や利点を把握し、これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。

学校教育を取り巻く諸環境の特性や利点を把握し、 それらを取り入れて教育に有効に活用する能力を育成する。		
マネジメント領域 学校危機管理論研究	方法領域 教育哲学・思想論研究 教育方法・内容論研究 教授学習論研究 教育工学論研究	環境領域 遊び文化環境論研究 学校適応論研究 保育・幼児教育学研究 養護実践教育学研究

教育環境学分野における分野科目

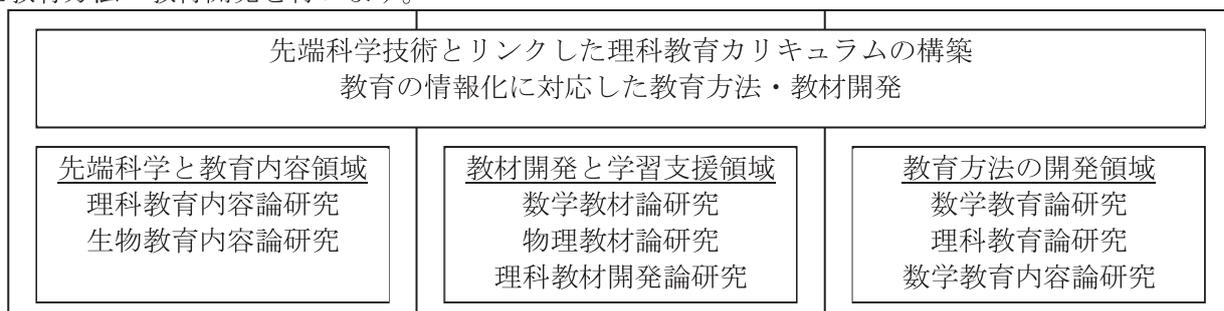
「教科学」は、「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という三つの分野に分類し、「教育論」、「教育内容論」、「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では、教科内容を構成する学問の構築をめざし、教科のあり方・枠組そのものを検討し、人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では、言語・多文化領域、歴史領域、風土領域から科目を構成し、教育方法・教材開発を行います。

言語に関する「教科学」の開発 地理学・民俗学・歴史学における教材の開発		
言語・多文化領域 言語教育内容論研究 外国語教育論研究 国語科教育教材論研究 生活科教育内容論研究 国語教育論研究	歴史領域 歴史教材論研究	風土領域 地理学教材論研究 民俗学教材論研究

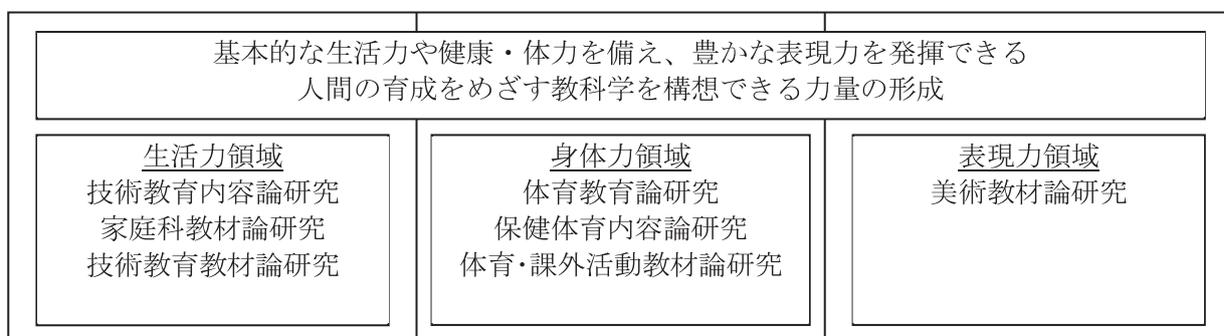
人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では、先端科学と教科内容領域、教材開発と学習支援領域、教育方法の開発領域から科目を構成し、先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し、教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。



自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では、生活力領域、身体力領域、表現力領域から科目を構成し、基礎的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。



創造系教科学分野における分野科目

なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要があるが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

応用科目では、全教員と全学生が一堂に会し、(1) 教員がそれぞれの研究課題を提示し、学生と討議する、(2) 学生自身が、「教科開発学とは何か」、「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し、その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ(2単位)」と「教科開発学セミナーⅡ(2単位)」は、必修です。応用科目群では、必修科目の2科目4単位以上を選定して履修します。

開設予定授業科目・担当教員及び講義開講場所等（2023年度）

科目区分		授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学 キャンパス (刈谷市)	静岡大学 キャンパス (静岡市)
専攻基礎科目	必修科目	教科開発学原論	2	野平 慎二 中野 真志 梅田 恭子 田口 達也 坂口 京子 香野 毅 丹沢 哲郎 村山 功	○	○
		教科開発学実践論	1	竹川 慎哉 寺本 圭輔 野崎 浩成 杉山 康司 紅林 秀治 鎌塚 優子 中村ともえ 渋江かさね 黒川みどり 村上 陽子 松永 泰弘	○	○
	選択科目	文化資源活用論	1	伊藤 貴啓 近藤 裕幸 宮村 悠介	○	
		科学技術活用論	1	飯島 康之 小谷 健司 大鹿 聖公	○	
		教育評価実証方法論	1	石田 靖彦 鈴木 裕子 鈴木 英樹 山田 浩平	○	
		教育プログラム開発論	1	塩田 真吾 中村 美智太郎		○
		表現・鑑賞論	1	伊藤 文彦 長谷川 真		○
		教育フィールド調査論	1	村越 真 郡司 賀透		○
		教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦 小南 陽亮		○

専攻分野科目	教育環境学分野	遊び文化環境論研究	2	石川 恭	○	
		学校適応論研究	2	石田 靖彦	○	
		教育哲学・思想論研究	2	野平 慎二	○	
		教育方法・内容論研究	2	竹川 慎哉	○	
		教授学習論研究	2	野崎 浩成	○	
		幼児教育・保育内容論研究	2	鈴木 裕子	○	
		I C T教育研究	2	梅田 恭子	○	
		学校危機管理論研究	2	村越 真		○
		教育工学論研究	2	村山 功		○
		養護実践教育学論研究	2	鎌塚 優子		○
		特別支援教育学研究	2	香野 毅		○
		情報教育学研究	2	塩田 真吾		○
	人文社会系教科学分野	第二言語教育論研究	2	田口 達也	○	
		社会科教育論研究	2	近藤 裕幸	○	
		倫理教材論研究	2	宮村 悠介	○	
		民俗学教材論研究	2	野地 恒有	開講なし	
		地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	○	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	○	
		生活科教育内容論研究	2	中野 真志	○	
		外国語教育論研究	2	白畑 知彦		○
		歴史教材論研究	2	黒川 みどり		○
		国語教育論研究	2	坂口 京子		○
	自然系教科学分野	数学教材論研究	2	飯島 康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山 勉	○	
		理科教材開発論研究	2	大鹿 聖公	○	
		数学教育内容論研究	2	小谷 健司	○	
		数学教育論研究	2	熊倉 啓之		○
		生物教育内容論研究	2	小南 陽亮		○
		理科教育論研究	2	郡司 賀透		○
	創造系教科学分野	保健科教育論研究	2	山田 浩平	○	
		保健体育内容論研究	2	寺本 圭輔	○	
		体育教材開発論研究	2	鈴木 英樹	○	
		美術教材論研究	2	伊藤 文彦		○
技術教育内容論研究		2	松永 泰弘		○	
技術教育教材論研究		2	紅林 秀治		○	
体育・課外活動教材論研究		2	杉山 康司		○	
家庭科教材論研究		2	村上 陽子		○	
専攻応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

7. 教員一覧

(愛知教育大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	石川 恭	教授 博士 (教育学)	遊び文化環境論 教育社会論 余暇教育論 遊戯文化論 生涯スポーツ論 子どもと遊び論
	野平 慎二	教授 博士 (教育学)	教育哲学 教育思想史 物語論的人間形成論 美的人間形成論 システム理論と教育 道德教育論
	石田 靖彦	教授 博士 (心理学)	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
	竹川 慎哉	准教授 博士 (教育学)	教育方法学 教育課程論 批判的リテラシー教育 授業研究
	鈴木 裕子	教授 博士 (学校教育学)	身体教育学 子ども学
	野崎 浩成	教授 博士 (工学)	情報教育 日本語教育 認知科学
	梅田 恭子	教授 博士 (学術)	教育工学
人文社会系 教科学	野地 恒有	教授 博士 (文学)	社会科教育内容論 日本民俗論 近現代庶民生活史論 歴史民俗博物館論 博物館教育論 フィールドワーク調査論 郷土研究方法論

人文社会系教科学	伊藤 貴啓	教授 博士（理学）	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ヨーロッパ 国境地帯の空間動態 ヨーロッパ におけるルーラルリズムと農村の持続的発展
	中野 真志	教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤 博文	教授 博士（教育学）	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
	田口 達也	教授 PhD in English	第二言語教育論研究 応用言語学 言語教育心理学
	近藤 裕幸	教授 博士（学術）	社会科教育論研究 社会科教育 地理教育
	宮村 悠介	准教授 博士（文学）	倫理教材論研究 倫理学 倫理思想史
自然系教科学	岩山 勉	教授 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン、レーザー）物性

	飯島 康之	教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
	小谷 健司	教授 博士（理学）	数学教育内容論研究 数学教材開発
	大鹿 聖公	教授 博士（学術）	理科教材開発論研究 理科教材開発 環境教育論 理科学習環境
創造系教科学	寺本 圭輔	教授 博士（人間環境学）	運動生理学 身体組成 発育発達 水泳
	山田 浩平	准教授 博士（スポーツ健康科学）	保健科教育論研究 身体科学 体育科内容学
	鈴木 英樹	教授 博士（スポーツ科学）	体育教材開発論研究 身体科学 体育科内容学

(静岡大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	村越 真	教授 博士 (心理学)	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネジメント リスク認知 安全教育
	村山 功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 I C T 校内研修 授業研究
	鎌塚 優子	教授 博士 (教育学)	養護教諭の実践に関わる教育 健康相談論 学校保健学 特別な教育的支援を要する子どもの健康教育 養護教諭養成教育
	香野 毅	教授 博士 (心理学)	特別支援教育からだを窓口とした援助 障害領域における心理支援動作法 子育て支援
	塩田 真吾	准教授 博士 (学術)	情報教育 I C T キャリア教育遠隔教育
	中村 美智太郎	准教授 博士 (学術)	教育哲学 教育思想 道徳教育 情報倫理 キャリア教育
	渋江 かさね	准教授 博士 (学術)	成人教育 社会教育 生涯学習 教師教育
人文社会系教科学	黒川 みどり	教授 博士 (文学)	日本近現代史 日本近現代思想史 歴史教育 近代日本のマイノリティ 近代日本のアジア認識
	坂口 京子	教授 博士 (教育学)	国語・国語科 (言語教育) カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史

人文社会系教科学	中村 ともえ	准教授 博士（文学）	日本近現代文学 小説と演劇・映画、美術の関係 古典文学の翻訳・翻案 文学教材の開発
自然系教科学	丹沢 哲郎	教授 博士（教育学）	理科教育課程論 アメリカ理科教育史 理科指導論 科学的リテラシー論 STS教育 理科目的論・目標論 高校生物教育論 理科教師教育
	小南 陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	熊倉 啓之	教授 理学修士	算数教育論 数学教育論 算数・数学教育課程論 算数・数学授業研究 算数・数学教材開発論 算数・数学教育の目的論 小・中・高接続カリキュラム論 数学教育の国際比較研究
	郡司 賀透	准教授 博士（教育学）	理科カリキュラム論 理科カリキュラム史研究 理科教材論 理科教育内容選択論 理科授業研究
創造系教科学	松永 泰弘	教授 博士（工学）	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準

創造系教科学	伊藤 文彦	教授 学術修士	美術教育論 デザイン教育論 デザインリテラシー教育論 デザインプロセス論 鑑賞方法 発想支援方法 コミュニケーションデザイン論
	紅林 秀治	教授 博士 (学校教育学)	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
	杉山 康司	教授 博士 (スポーツ健康科学)	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
	村上 陽子	教授 博士 (学術)	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携
	長谷川 慎	教授 修士 (音楽)	音楽教育学 日本音楽 地歌箏曲演奏

8. 教育方法

1 教育・研究指導

大学院の教育は、専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

(1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため、専攻に属する専任教員（大学院設置基準第9条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は、入学試験の出願に際して出された第1希望、または第2希望の教員であり、合格発表の際に通知された教員です。

(2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に、専攻に属する専任教員の中から、2名以上の副指導教員と、研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め、研究指導を受けます。副指導教員については、各大学から1名以上を選ぶものとします。学生は、原則として、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、主指導教員の助言を得て副指導教員および指導補佐教員を選び、所定の様式による「副指導教員等申請書」により、研究科長あてに提出しなければなりません。

(3) 副指導教員等の決定

研究科長は、学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき、共同専攻連絡協議会の議を経て、それぞれの副指導教員および指導補佐教員を決定します。

2 単 位

各授業科目の単位数は、授業内及び授業外を合わせて、45時間の学修をもって1単位とします。多くの授業が、1時限（1コマ）を2時間（実際は90分）として、16回（定期試験を含む）で2単位としているのは、1時限の教室内の授業に対して、2時限分の教室外での事前学習及び事後学習（以下「自習学習」という。）を行って2単位という意味です（8回では1単位となります）。

3 授 業

(1) 学 期（授業期間）

学期を前期（4月1日～9月30日）、後期（10月1日～翌年3月31日）の2学期に区分し、さらに、開講する授業の日程によって、前期をおおよそA週（4月から5月）、B週（6月から7月）、C週（7月から8月）、後期をD週（10月）、E週（11月から1月）、F週（1月から2月）に分けて授業を実施します。

●詳細については、「時間割および授業カレンダー」を参照してください。

(2) 授業方法

授業の方法は、講義、演習のいずれかにより行います。

(3) 授業時間

授業は、原則として土曜日と日曜日の各5時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日および日曜日）

時 限	授業開始 ・ 終了時刻
1 時 限	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2 時 限	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3 時 限	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4 時 限	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 1 0
5 時 限	1 6 : 2 0 ~ 1 7 : 5 0

(4) 履修方法

学生は、原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季の休業等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。また、これらの他に浜松等で開講される授業もあります。

4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は、主指導教員と相談の上、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際、前期の履修科目については4月中に開講される科目を除き、4月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については、9月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は、原則として認められません。なお、いずれの変更も主指導教員と相談の上、その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室（集合場所）

講義等の初回の集合場所は、原則として本籍を置く大学の共同大学院講義室とします。ただし、掲示や合同ガイダンス等により指示ある場合には、指定場所へ集合してください。

5 成績および単位について

(1) 成績の評価は、筆記試験、口答試問、報告書等（以下「筆記試験等」）により行います。

(2) 成績評価のための条件

成績の評価には、その授業時間の3分の2以上の出席を必要とします。

(3) 成績評価の基準

成績の評価は、その授業の構成単位をS秀・A優・B良・C可又はD不可の評語にて判定し、C以上を合格、D不可は不合格とし、合格した単位は取り消すことができません。ただし、下記の単位は認定しません。

成績評価の基準

評価		評価基準（100点満点の場合）	
S	秀	90点以上	合格
A	優	80点～89点	
B	良	70点～79点	
C	可	60点～69点	
D	不可	0～59点	不合格

- ① 合格した授業科目を再度受講して修得した単位
- ② その他、定められた履修方法以外の方法により修得した単位

(4) 単位の授与

本学は、履修登録した授業科目の授業を履修し、当該授業の筆記試験等に合格した学生に対し、所定の単位を授与します。

(5) 再・追試験

- 再試験は行いません。
- 追試験は、病気・災害等の特別の事情がある場合、愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。この願い出については、指導教員を通じて提出します。

(6) 不正行為

- 筆記試験等で不正と認められる行為があったときは、当該科目を不合格とします。
- 不正行為の内容によっては、その学期に修得したすべての単位を削除します。場合によっては、学則の規定により処分します。

6 学位論文の提出

学位論文及び学位授与は、指導教員の指導を受けて作成し、大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については、別途、お知らせします。

7 長期履修学生制度について

この制度は、原則として、職業を有している方や、育児・介護等の事由により通常期間での就学が困難であると認められる方の大学院での進学環境を改善するためのものです。現在のところ、両大学での取り扱いが異なるため、その詳細は、別途お知らせします。

8 修学上の注意事項

- 休学や退学の手続き等は、必要に応じて、各大学で指導を受けて下さい。
- 気象警報発令時・交通機関運休時・東海地震注意情報発令時等における休講の取扱いについては、両大学で異なるので、別途お知らせします。
- 両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については、大学ごとに、別途お知らせします。

愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

2011年12月14日
規程第142号

(目的)

第1条 この規程は、愛知教育大学学則（2004年学則第1号）第25条第3項及び静岡大学大学院規則（昭和39年4月27日）第5条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

(連絡協議会)

第2条 連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員
- (2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名
- 2 連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。
- 3 議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。
- 4 議長の任期は，1年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。
- 5 連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。
- 6 副議長の任期は，1年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

(協議事項)

第3条 連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

- (1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項
- (2) 研究指導教員の選定に関する事項
- (3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項
- (4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項
- (5) 成績評価の方針に関する事項
- (6) 学位審査委員会の設置に関する事項
- (7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項
- (8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項
- (9) 予算に関する事項
- (10) 広報に関する事項
- (11) 自己点検・評価に関する事項
- (12) FD推進に関する事項
- (13) 共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項
- (14) その他構成大学が必要と認めた事項

2 協議内容は、構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し、必要に応じて承認を得るものとする。

3 前項の承認を得るものについては、同項の会議等の議を経て、連絡協議会が別に定める。
（専門委員会）

第4条 連絡協議会の円滑な運営を図るため、連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。

- (1) 運営委員会
- (2) 学務委員会
- (3) 入試委員会
- (4) 学位審査委員会
- (5) 教員人事選考委員会
- (6) 紀要編集委員会
- (7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会

2 専門委員会に関する事項は、別に定める。
（議事及び運営）

第5条 連絡協議会は、構成委員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、次の各号に掲げる者は、構成委員の総数に算入しない。

- (1) 休職又は停職中の者
- (2) 育児休業中の者
- (3) 30日以上にわたる連続した休暇を取得中の者

2 連絡協議会の議事は、出席委員の過半数の賛成をもって決し、可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の3分の2以上の賛成により決する。

3 連絡協議会が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

4 この規程に定めるもののほか、連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は、連絡協議会が定める。

（事務局）

第6条 この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。

2 事務局は、愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附 則

この規程は、2012年4月1日から施行する。

附 則（2014年規程第39号）

この規程は、2014年12月17日から施行する。

附 則（2015年規程第58号）

この規程は、2015年6月3日から施行する。

Ⅱ. 共同教科開発学専攻連絡協議会 議長年次報告

教科開発学連絡協議会 議長年次報告

1. 入学試験及び入学者について

2024年度入学試験は、2023年10月28日（土）に静岡大学を会場に実施されました。合格発表は11月16日（金）に行い、9名（愛教大籍4名、静大籍5名）の合格者をだすことができました。

なお、2025年度入学試験は2024年11月2日（土）、合格発表は11月13日（水）を予定しています。

2. 2021年度合同ガイダンスについて

本年度は、2023年4月2日（日）愛教大籍の新生は愛知教育大学教育未来3階、静岡大学籍の新生は静岡大学教育学部G棟202に集合しテレビ会議システムを用いて13時からガイダンスを実施しました。また、14時から全学年を対象に、Zoomにて実施しました。

3. 2023年度教科開発学研究会および教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学研究会は、2023年8月26日（土）に、Zoomによるオンライン方式で開催されました。研究発表9件、講演会、修了生による発表を含む有意義な場となりました。

教科開発学セミナーⅠ、Ⅱは2024年2月17、18日（土・日）の2日間にわたって、愛教大籍はオンライン、静大籍は対面のハイフレックス型で開催されました。セミナーⅠは1年生が、セミナーⅡは2年生が対象で、それまでに自身が研究してきた成果を報告します。1、2年生や全教員が参加して、朝から夕方まで各報告に対して活発な議論が展開されました。

セミナーⅢは、2023年8月27日（日）にZ愛教大籍はオンライン、静大籍は対面のハイフレックス型で開催されました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の3年生が対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言を行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。他の学生や今後提出する予定の学生の聴講も多数ありました。

4. 共同教科開発学専攻連絡協議会等

基本的に、毎月1回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システムを使用して実施されています。この会議のために、各大学では専攻会議というものを開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

5. 共同教科開発学専攻指導体制

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員1名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも1名加わることになっています。様々に異なる研究領域を専門とする教員が指導に加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

6. その他

論文審査会（最終試験）が2024年1月20、21日（土・日）に愛知教育大学及び静岡大学とでZoomを用いて行われました。審査会は公開で実施され、計5名が臨み、博士論文に対して忌憚のない問に対し、明確な回答が行われました。その結果、今年度は10名の合格が連絡協議会で認められました。

令和4年度合同ガイダンス

日時 令和4年4月3日(日) 13時00分～17時00分
新入生受付開始12時30分～

場所 愛知教育大学に籍を置く新入生

愛知教育大学教育未来館3階 多目的ホール(愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1)

静岡大学に籍を置く新入生

静岡大学教育学部 G202(静岡県静岡市駿河区大谷836)

内容

新入生向け 13時00分～14時00分 多目的ホール・G202

出席者 正副議長、事務職員(所属大学に集合)

[プログラム]

- 1 挨拶(正副議長)
- 2 出席者自己紹介 ※所属・氏名のみ
- 3 専攻の概要(議長)
- 4 教育方法について(議長)
- 5 副指導教員の申請について(議長)
- 6 研究紀要について(議長)
- 7 履修登録、各大学での手続、学生生活及び図書館利用等について(事務職員)

全学年対象 14時00分～ Zoomでの開催

出席者 新入生は、新入生向けガイダンスを行った会場にて、Zoom画面をスクリーンに投影したものの視聴により参加します。

正副議長以外の共同教科開発学専攻教員全員 任意の場所にてZoom参加

2年生以上の在学者全員 任意の場所にてZoom参加

後日メーリングリストにて、ミーティングIDとパスコードを送信します。

[プログラム]

- 1 挨拶(議長)
- 2 出席者自己紹介
院生は、1～2分で自己紹介を行う
教員は、1～2分でご自分の授業内容について順番に説明いただく。
授業紹介は、必修科目を中心に、それ以外の科目は、なるべく簡単に紹介し、
個々の日程調整などは、直接授業担当者とメールなどで行うよう伝える。
- 3 年間スケジュールについて(学務委員会委員長)
- 4 研究計画と学位取得について(学位審査委員会委員長)
- 5 研究紀要について(紀要編集委員会委員長)
- 6 ハラスメント防止啓発の講話

プログラム

全体進行：静岡大学 准教授 郡司賀透

1. 8:50～ 開催挨拶 静岡大学 教授 紅林秀治

2. 発表

○座長（司会）

時間	題目・発表者氏名等	主指導教員	副指導教員
9:00- 9:50	技術教育における問題解決にむけた 見通しを形成させる指導の検討 室伏春樹（創造系教科学）	紅林秀治	○村越 真 飯島康之
10:00- 10:50	学校数学における標本データに基づく統計的推論の学習 上の困難点の特定とその解消に関する研究： データの変動性に着目して 塩澤友樹（自然系教科学）	熊倉啓之	村山 功 ○飯島康之
11:00- 11:50	科学を「学ぶために読むこと」の指導法 杉山元洋（教育環境学）	村山 功	村越 真 ○中野真志

発表時間：1人50分（発表30分、質疑20分）

3. 11:50～ 講評 愛知教育大学 教授 中野真志

当日のZoom URL（8:30～からアクセス可能です）

<https://us06web.zoom.us/j/82642391398?pwd=NIhFNHhyTXhucHpVbFhNVWIZenZWQT09>

会場 A

G201

9:00 からZoom入室可能

9:30 開会挨拶 連絡協議会副議長 (会場 A)

進行：郡司 賀透

1	9:35- 10:15	発表者： 諏訪園 純 人文社会系教科学 指導教員： 丹藤 博文 題目： 高等学校国語科における古典教育価値論 ——『源氏物語』を例として—— 司会： 坂口 京子
2	10:20-11:00	発表者： 鈴木智久 人文社会系教科学 指導教員： 紅林 秀治 題目： 高等学校における英語教育改革に向けての取組 -オンラインによるインタラクション授業の導入- 司会： 丹藤 博文
3	11:05-11:45	発表者： Thy Savrin 自然系教科学 指導教員： 岩山 勉 題目： Developing ICT-Based Teaching Material for Physics Education in Cambodia 司会： 大鹿 聖公
4	11:50-12:30	発表者： 樋口大輔 創造系教科学 指導教員： 紅林 秀治 題目： 技能学習における生徒が獲得する暗黙知とその表出による教育効果 司会： 飯島 康之

12:30 講評 連絡協議会議長

会場 B

G202

9:00 からZoom入室可能

9:30 開会挨拶 連絡協議会副議長（会場 A）

終了後会場 B へ移動

進行：野崎 浩成

1	9:35- 10:15	発表者： 片岡佑衣 教育環境学 題目： 幼児期における運動遊びの習慣化に向けた方略 ～運動遊びによる調整力の向上を目指して～ 司会： 杉山 康司	指導教員： 石川 恭
2	10:20-11:00	発表者： 木田千晶 教育環境学 題目： 子ども理解を基軸とした保育者の保護者理解促進と支援に関する研究 司会： 香野 毅	指導教員： 石川 恭
3	11:05-11:45	発表者： 美那川雄一 教育環境学 題目： 歴史的ナラティブの構成を目的とした教授・学習の開発と検証 司会： 中野 真志	指導教員： 村山 功

終了後は会場 A に移動

2024年2月18日（日） 教科開発学セミナーⅠ 進行要領

9:00 からZoom入室可能（静大発表会場はG202）

9:30 開会挨拶 連絡協議会議長

進行：郡司 賀透

1	9:35-10:05	発表者： 高宮佳祐 創造系教科学 指導教員： 杉山 康司 題目： ウォーキングとサッカーのよさを融合した授業に関する研究 司会： 石川 恭
2	10:10-10:40	発表者： 孔 令杰 人文社会系教科学 指導教員： 中野 真志 題目： 外国人日本語学習者を対象としたChatGPTを用いた日本語作文トレーニング 司会： 紅林 秀治
3	10:45-11:15	発表者： 中野弘幸 人文社会系教科学 指導教員： 丹藤 博文 題目： 子どもの走能力向上のためのスキップエクササイズの開発 司会： 杉山 康司
4	11:20-11:50	発表者： 山内慎也 自然系教科学 指導教員： 郡司 賀透 題目： 中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究 －相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学習活動を通して－ 司会： 大鹿 聖公
11:50-13:30 昼休憩（愛教大ネットワーク停止時間有）		
5	13:30-14:00	発表者： IM RANY 自然系教科学 指導教員： 岩山 勉 題目： Advancing Chemistry Education in Cambodia: Video-Based Experimentation with Agar Gel 司会： 大鹿 聖公
6	14:05-14:35	発表者： 可知穂高 教育環境学 指導教員： 村山 功 題目： 進路多様校の生徒を対象としたライフキャリア教育プログラムの開発と評価 －情報社会の変化をふまえた「よりよく生きる」ライフキャリア能力の育成に向けて－ 司会： 石川 恭
7	14:40-15:10	発表者： 後藤 由美 教育環境学 指導教員： 野平 慎二 題目： 保育施設における保育室の物的環境が1・2歳児に及ぼす影響に関する研究 司会： 香野 毅
8	15:15-15:45	発表者： 鈴木一成 教育環境学 指導教員： 石川 恭 題目： 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究 司会： 鎌塚 優子

15:45 講評 連絡協議会副議長

2023年度共同教科開発学専攻 連絡協議会等 開催日

	専攻会議(静大) 【教授会後～】 G202	専攻会議(愛教大)17:00～ 未来館3A講義室	合同連絡協議会 【16:45～】
4月	4/13(木)	4/24(月)	4/27(木)
5月	5/11(木)	5/22(月)	5/25(木)
6月	6/8(木)	6/19(月)	6/22(木)
7月	7/13(木)	7/24(月)	7/27(木)
8月	/	/	/
9月	9/14(木)	9/25(月)	9/28(木)
10月	10/12(木)	10/23(月)	10/26(木)
11月	11/9(木)	11/27(月)	11/30(木)
12月	12/14(木)	12/18(月)	12/21(木)
1月	1/11(水)	1/15(月)	1/18(木)
2月	2/8(水)	2/13(火)	2/15(木)
3月	3/1(水)	3/11(月)	3/13(水)

R5年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻 各委員会委員名簿

委員会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	R5	氏名	分野	R5	氏名
運営委員会	教育環境学		村越 真	教育環境学	○	野平 慎二
	教育環境学		村山 功	教育環境学		野崎 浩成
	教育環境学		香野 毅	教育環境学		鈴木 裕子
	人文社会系教科学		黒川 みどり	人文社会系教科学		野地 恒有
	自然系教科学	○	熊倉 啓之	人文社会系教科学	◎	中野 真志
	自然系教科学		小南 陽亮	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	自然系教科学		郡司 賀透	自然系教科学		岩山 勉
	自然系教科学		郡司 賀透	自然系教科学		飯島 康之
	創造系教科学		松永 泰弘	自然系教科学		小谷 健司
	創造系教科学	◎	紅林 秀治			
創造系教科学		村上 陽子				
学務委員会	教育環境学	○	村越 真	教育環境学		竹川 慎哉
	教育環境学		村山 功	教育環境学	◎	野崎 浩成
	教育環境学		香野 毅	人文社会系教科学	○	宮村 悠介
	人文社会系教科学		坂口 京子			
	自然系教科学		熊倉 啓之			
創造系教科学	◎	郡司 賀透				
入試委員会	教育環境学		鎌塚 優子	教育環境学	○	石田 靖彦
	教育環境学	◎	中村 美智太郎	人文社会系教科学		田口 達也
	教育環境学		塩田 真吾	自然系教科学	◎	小谷 健司
	自然系教科学			自然系教科学		鈴木 英樹
創造系教科学		松永 泰弘				
学位審査委員会	教育環境学	◎	村越 真	人文社会系教科学		近藤 裕幸
	人文社会系教科学		黒川 みどり	教育環境学	○	梅田 恭子
	自然系教科学	○	小南 陽亮	自然系教科学	◎	飯島 康之
			創造系教科学		寺本 圭輔	
紀要編集委員会	創造系教科学	◎	村上 陽子	教育環境学	◎	鈴木 裕子
	創造系教科学	○	杉山 康司	人文社会系教科学	○	田口 達也
				自然系教科学		小谷 健司
			創造系教科学		寺本 圭輔	
教員人事委員会	教育環境学		村越 真	人文社会系教科学	◎	伊藤 貴啓
	教育環境学	◎	村山 功			宮村 悠介
	教育環境学		鎌塚 優子	自然系教科学	○	大鹿 聖公
	教育環境学		香野 毅			
	教育環境学		中村 美智太郎			
	人文社会系教科学					
	人文社会系教科学					
	人文社会系教科学		黒川 みどり			
	自然系教科学		熊倉 啓之			
	自然系教科学		小南 陽亮			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学					
	創造系教科学		松永 泰弘			
創造系教科学		紅林 秀治				
創造系教科学		村上 陽子				

* ◎は委員長, ○は副委員長

* 将来構想, カリキュラム改革等の対応は, 運営委員会が行う。

Ⅲ. 学生の研究課題と指導体制

平成27年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30540004	杉山 元洋	すぎやま もとひろ	村山 功	村越 真	中野 真志			科学的概念の理解における学習者の問いの意義

平成28年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学系教科学	30640002	大西 洋	おおにし ひろし	黒川みどり	村山 功	野地 恒有	伊藤 貴啓		旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性—社会科学教材開発における単元の核の社会的事象設定についての考察—
創造系教科学	30640003	室 雅子	むろ まさこ	村山 功	村越 真	石川 恭			生活力育成のための家庭科のあり方
教育環境学	30640005	渡邊 千佳	わたなべ ちか	村山 功	村越 真				「楽しい授業、わかる授業」の実現をめざす校内研修フアシリテーターの育成

平成29年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30740001	磯崎 雄三	いそさき ゆうぞう	村越 真	村山 功	伊藤 貴啓			社会科地理的分野における読図を通しての思考力育成の手立て

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	217D005	田中 混至	たなか こうじ	飯島 康之	石川 恭	鎌塚 優子			単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究

平成30年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30840002	河合 紳和	かわい のぶかず	紅林 秀治	村上 陽子	伊藤 貴啓			音楽表現の補助装置としての身体運動 音楽的ニュアンスを伝達する指揮のメカニズムについて
人文社会科学	30840003	児玉 恵太	こだま けいた	村山 功	黒川みどり	野地 恒有			文学教材の読解を通しての語い指導
人文社会科学	30840005	中山 敬司	なかもやま けいじ	黒川みどり		野地 恒有	伊藤 貴啓		静岡県小笠地域における被差別部落の研究—井上良一を事例に—

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	218D002	加藤 智	かとう さとし	中野 真志	野平 慎二	小川 裕子	坂口 京子		米国におけるサービス・ラーニングの理論と実践に関する研究

平成31(令和元)年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30940002	黒須 雅弘	くろす まさひろ	杉山 康司	紅林 秀治	石川 恭			学校体育の短距離走における指導方法の開発に関する研究
自然系教科学	30940003	塩澤 友樹	しおざわ ゆうき	熊倉 啓之	村山 功	飯島 康之			学校数学における標本データに基づく統計的推論力の育成に関する研究: variationの認識に着目して
人文社会系教科学	30940004	島崎 治子	しまざき はるこ	村山 功		野地 恒有			大学英語リーディング授業において誤解力を高める指導方法の検証

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	219D001	片岡 佑衣	かたおか ゆい	石川 恭	杉山 康司	寺本 圭輔			幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発
人文社会系教科学	219D004	中村 仁志	なかむら ひとし	中野 真志	野地 恒有	丹沢 哲郎			デュローイ実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究
自然系教科学	219D005	大久保 博和	おおくぼ ひろかず	岩山 勉	大鹿 聖公	郡司 賀透			カンボジアの教科書との比較から探る科学的思考力を高める実験教材の開発—物理学分野を中心として—
教育環境学	219D007	武市 裕子	たけいち ゆうこ	野平 慎二	中野 真志	村越 真			子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

令和2年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30040002	三宅 昂子	みやけ たかこ	鎌塚 優子	野平 慎二	村越 真			養護教諭のキャリアアセスメント別の養護診断プロセスにおける思考の相違点およびプログラム開発
人文社会系教科学	30040004	岡村 明夢	おかむら ひろむ	村山 功	村越 真	石川 恭			日本語を母語とする英語学習者の動詞の下位範疇化の習得

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	220D001	西野 雄一郎	にしの ゆういちろう	中野 真志	野平 慎二	丹沢 哲郎			ユニウス・ラストロツプ・メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究
人文社会系教科学	220D002	行田 臣	ゆくた じん	中野 真志	野地 恒有	坂口 京子			戦後新教育期における愛知県三河地域の教育 —実験学校に着目して—
自然系教科学	220D003	胡 石帆	こ せきはん	飯島 康之	小谷 健司	紅林 秀治			小学校でのプログラミング教育におけるプログラミング的思考能力の測定と授業方法の影響
自然系教科学	220D004	露木 隆	つゆき たかし	岩山 勉	大鹿 聖公	郡司 賀透			自己調整学習を促す物理教材の開発と実践に関する研究

令和3年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30140001	小柳津 和博	おやいづ かずひろ	香野 毅	鎌塚 優子	石田 靖彦			重症心身障害児との関わり合いを促すインクルーシブ自己評価表」の開発
教育環境学	30140002	安永 太地	やすなが たいち	村越 真	中村 美智太郎	石川 恭	塩田 真吾		行動変容を目指したスポーツ・インテグリティ教育のキャリア開発と評価
創造系教科学	30140003	室伏 春樹	むろふし はるき	紅林 秀治	村越 真	飯島 康之			トランプアスリート指導者から運動部活動の外部指導者までプロジェクトマネジメントに基づいた技術教育の研究
創造系教科学	30140004	菊本 智之	きくもと ともゆき	杉山 康司	紅林 秀治	寺本 圭輔			中学校保健体育科における「武道」領域の授業者の資質向上を視野に入れた「かた」学習プログラムの開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	221D001	安藤 久美子	あんどう くみこ	野平 慎二	石田 靖彦	香野 毅			発達障害のある子どもを持つ保護者が小学校就学時に抱える不安とその支援について
教育環境学	221D002	河内 照治	かわち しょうじ	野平 慎二	丹藤 博文	坂口 京子	竹川 慎		石田和男における「わかる」の概念について
教育環境学	221D003	柴田 萌子	しばた もえこ	野平 慎二	飯島 康之	村山 功			高等教育における女子大学の機能と構造
人文社会科学	221D004	梅田 裕介	うめだ ゆうすけ	中野 真志	岩山 勉	郡司 賀透			自然遊び・科学遊びを通じた幼児の思考力育成プログラムの開発

令和4年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30240001	美那川 雄一	みながわゆういち	村山 功	村越 真	中野 真志			歴史を「書く」ための授業デザイン —歴史(学)するパフォーマンス評価の開発—
人文社会系教科学	30240002	井上 健人	いのうえけん	郡司 賀透	村山 功	中野 真志			日本人英語学習者によるC-system, T-system に関する英文法の習得明示的技法指導の効果検証について
人文社会系教科学	30240003	鈴木 智久	すずきともひさ	紅林 秀治	村山 功	丹藤 博文			日本人英語学習者の第二言語習得過程におけるオンライン英会話を介したインタラクティブの有用性について
創造系教科学	30240004	樋口 大輔	ひぐちだいすけ	紅林 秀治	杉山 康司	飯島 康之			中学校技術・家庭科技術分野における生徒の実践知獲得プロセスを適応した授業カリキュラムの提案

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	222D001	木田 千晶	きだ ちあき	石川 恭	鈴木 裕子	香野 毅			子育て支援における子ども理解を基軸とした保育者と保護者の「相互理解」の可視化
人文社会系教科学	222D002	諏訪園 純	すわぞの じゅん	丹藤 博文	坂口 京子	中野 真志			「高等学校国語教育における古典価値の創造に関する研究— —『源氏物語』を中心に—」
自然系教科学	222D003	THY SAVRIN	ていー さぶりん	岩山 勉	大鹿 聖公	郡司 賀透			Development of E-Lab for Teaching and Learning Science in Cambodia
自然系教科学	222D004	劉 宇超		飯島 康之	伊藤 貴啓	紅林 秀治	長谷川 慎		小中学校音楽科における「箏」を中心とした授業モデルの開発に関する研究

令和5年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30340001	可知 徳高	かち ほどか	村山 功	石川 恭	塩田 真吾			学力下位高の生徒を対象にしたライフキヤリア教育プログラムの開発と評価 —情報社会の変化をふまえた「よりよい生き方」に
人文社会科学	30340002	山内 慎也	やまうち しんや	郡司 賀透	大鹿 聖公	小南 陽亮			中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究 —相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学
人文社会科学	30340003	高宮 佳祐	たけみや けいすけ	杉山 康司	石川 恭	鎌塚 裕子			ウオーキングの価値を高めたサッカーの授業に関する研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	223D001	後藤 由美	ごとう ゆみ	野平 慎二	鈴木 裕子	香野 毅			初めての集団生活に乳児が適応していく過程における物的環境が与える影響
教育環境学	223D002	鈴木 一成	すずき かつなり	石川 恭	伊藤 貴啓	鎌塚 優子			「二人称アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究
人文社会科学	223D003	孔 令杰	こう れいじえ	中野 真志	丹藤 博文	紅林 秀治	野崎 浩成		電子辞書と機械翻訳の比較研究
人文社会科学	223D004	中野 弘幸	なかの ひろゆき	丹藤 博文	鈴木 裕子	杉山 康司	鈴木 英樹		子どもの走能力向上のためのためのスキップエクササイズの開発

IV. 学生の研究活動

武市裕子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

○研究ポイント

本研究では、子どもの変化を捉えるツールとして養護教諭が成長曲線を用いることの有効性を測る。さらに、子どもの変化を見取ることができるアセスメントシートを作成し、成長曲線と併用することで、学級担任が行う教育相談の支援となるのか、教員と子ども双方からの効果を測定する。

○キーワード

成長曲線、養護教諭のアセスメント、教育相談

1 博士論文の計画

いじめ自殺が社会問題化し、事故が起こるたびに「学校は気付いていたのか」という議論が持ち上がる。早期発見のためには、訴えだけでなく身体化・行動化される「子どものサイン」を見逃さないことが大切とされる。そこで、私は成長曲線に着目した。小児医療の臨床現場では成長曲線をもとにした心因性疾患や虐待の早期発見について報告されており、不登校などの心の健康問題や小児慢性疲労症候群と成長曲線の関連についても事例から検証され、その有用性が確立されている。折しも、学校保健安全法施行規則の改訂に伴い、定期健康診断において、成長曲線を積極的に活用することが重要となった。よって、学校現場においても子どもたちの心の問題の早期発見に成長曲線を活用できる可能性が高いと考えられる。成長曲線の変動から子どもの心身の変化を捉えることは、客観的な資料から子どもを注意深く観察するための手掛かりとなり得る。成長曲線と日常的な観察等による「養護教諭のアセスメント」を教育相談に活用する本研究によって、教員が子どもの変化に早期に気付くきっかけを得ることが可能となり、組織的な早期対応につながると考える。その結果、子どもの学校適応感が上がり、不登校傾向や頻回来室などの不適応行動に対する予防的介入となるかを検証したい。研究1では、養護教諭が子どもを観察する視点を検討する。先行文献及び経験豊富な養護教諭への聞き取りを分析し、日常的にどのような視点から子どもの状態を捉えているのかを明らかにする。その上で、児童生徒理解に必要なアセスメントの視点を挙げ、整理する。研究2では、成長曲線の変動が見られる要因について検討する。成長曲線の変動の分類と事例の分析を行うことによって、成長曲線の変動から子どもの変化が見取れるかを明らかにし、養護教諭が成長曲線の変動を抽出する基準を示す。それらを踏まえ、研究3として、アセスメントシートを開発し、介入研究を行う。子どもの変化を見取る視点を生かしたアセスメントシートを作成し、教育相談に活用することで教員と子ども双方に効果があるか検証する。

2 本年度の研究活動

2022 年後期から復学し、学校現場で日常的に成長曲線を活用して研究の方向性を模索している。また、研究テーマとは違うテーマではあるが、今年度は、9月に第66回東海学校保健学会学術大会で「A市における養護教諭の共同研究テーマの分析」を口頭発表した。

大久保博和

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

導電シートと液晶サーモグラフシートを用いた発熱教材の開発と指導方法の検討

○研究ポイント

「電流とそのエネルギー」単元における「電熱線と水を用いた発熱実験」で、新たな実験教材の開発と指導方法を提案し、その効果と課題を検討する。

○キーワード

電流による発熱、熱量、導電シート、液晶サーモグラフシート

1 博士論文の計画

中学校2年生の「電気とそのエネルギー」単元における「電熱線と水を用いた電流による発熱実験」は、電流による発熱量と電力・時間の関係を調べる実験として長く教科書に掲載されてきた。一方、この実験の測定値である水の上昇温度と水が得た熱量の関係は学習指導要領の改訂の過程で大きく変わってきた。その変化は、「比熱」が削除された昭和52年(1977年)の改訂、1993年(平成5年)に cal (カロリー) が熱量の単位から除外され、国際単位 (SI) の J (ジュール) が使われることになった後の改訂に顕著にみられる。

昭和52年の改訂以前では、熱量は $Q=mct$ (Q は cal 単位の熱量、 m は物質の質量、 c は比熱、 t は温度変化) で学習し、電熱線と水を用いた実験では、水が得た熱量は測定値として得た水の上昇温度を基に $Q=mct$ で求め、その熱量と電流、電圧、電力、電力量の関係が丁寧に説明されている。現行の教科書でも電熱線と水を用いる実験は取り上げられている。しかし、水の上昇温度は電熱線から発生する熱量に比例する量として取り扱われ、水の上昇温度から水が得た熱量を求めることは必要としていない。これらを基に、電流を流すことによって温度上昇が確認でき、電熱線と水を用いた実験では注意が必要であった火傷や感電に心配することのない新たな教材を開発した。

1, 2年次は、目的とした実験が実施できる教材の選出と実験に適切な規格の確定を実施し、写真用の印画紙に導電ペイントを一樣な厚さで印刷した導電シートを開発した。さらに、温度によって色が変わる液晶サーモシートを用いて可視化による効果を追加した。その後、開発した教材を用いた授業実践を実施する予定であったが、コロナによる学校閉鎖、また私個人の手術による休学によって十分な実施ができなかった。2024年度は復学し、これまでの研究結果を基に、開発した教材と指導方法についてその効果と課題を検討し、論文としてまとめる予定である。

2 本年度(2023)の研究活動

・学会発表

大久保博和, 新鶴田道也, 岩山勉: 導電シートと液晶サーモグラフシートを用いた発熱実験, 日本理科教育学会東海支部大会 第68号 24

諏訪園 純

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

高等学校国語科における古典教育価値論——『源氏物語』を例として——

○研究ポイント

学習者にとって古典を価値あるものとするために、通時的な視点から古典をとらえたり、その固有性に注目したりするのを可能にする教材と指導方法を開発する。通時的な視点とは、古典が受容され継承されてきた側面に注目する見方であり、固有性とは、現代と異質な要素を基軸として古典を読んでいくということである。これにより、学習者の認識に広がりや厚みを持たせることができる。

○キーワード

古典教育 読み 教材価値 学習者 源氏物語 授業実践 通時性 共時性

1 博士論文の計画

以下の構成・目次を見込んでいる。

- ・序章 古典教育の現状と、本研究の目的・方法
- ・第1章 古典の固有性・通時的なとらえ方に基づく戦後古典教育論
古典教育諸論を、古典の固有性・通時的なとらえ方の有無の視座から整理する。
- ・第2章 古典教育における『源氏物語』の受容・実践史——古典の固有性と通時性
これまでの授業実践における『源氏物語』受容を、主にその通時性・固有性の観点から分類する。各種の実践報告を分類する際の基準・項目、実践の解釈・見方としては、古典の通時性・固有性に着目したものかどうかを中心とする。例えば、次の諸点を基軸とする予定である。すなわち、享受の過程や古典として固有の特質にふれられているものか、物語内容の現代と異なる点を扱っているか、『源氏物語』に固有の語りの構造や表現の独自性が考慮されているか、通時性として他の先行・後発作品との関わりが意識されているか、といった点である。
- ・第3章 『源氏物語』に埋め込まれた物語享受を読む学習指導——古典の通時性
『源氏物語』絵合巻などを読むことで、物語や古典の享受・継承過程を学習する。
- ・第4章 『源氏物語』浮舟巻の教材価値と、それをもとにした学習指導——古典の固有性
『源氏物語』浮舟巻を用い、近現代小説と異なる語りの構造の固有性を学習する。
- ・第5章 『源氏物語』に見えるフレーズを用いた学習指導——古典の固有性と通時性
『源氏物語』のフレーズから気に入ったものを選んでその場面を読み、自分を取り巻く状況とその場面の文脈とを比べ、違いを意識化する学習。

昨年度は第5章、今年度は第3章と第4章について、教材や指導方法の開発を行った。来年度は第1章と第2章について主に文献調査を進めつつ、第4章と第5章についての実践化を行う予定である。

2 本年度の研究活動

(1) 口頭発表

『源氏物語』に埋め込まれた物語享受を読む学習指導

日本文学協会・第42回研究発表大会、2023年7月

『源氏物語』浮舟巻の教材価値——心内語の語りの批評性から——

第145回全国大学国語教育学会・自由研究発表、2023年11月

(2) 論文

『源氏物語』に埋め込まれた物語享受を読む古典学習

日本文学協会『日本文学』848、2024年2月

美 那 川 雄 一

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

歴史的ナラティブを構成する教授-学習の開発

○研究ポイント

歴史を理解するとは、ナラティブという文化的ツールを用いて成しえる媒介された行為である。ナラティブが歴史理解にアフォーダンスと制約を提供する。高校生が歴史のナラティブを構成する教授-学習について、認知的葛藤を引き起こす矛盾する資料と協調学習の側面から研究する。

○キーワード

歴史的思考、歴史的ナラティブ、概念変化、認知的葛藤、協調学習

1 博士論文の計画

2024年度は、以下の論文を執筆する予定である

- ・「歴史的ナラティブの構成を促す協調学習 —多形質なナラティブを産出するためのピアに関する検証—」

(教科開発学論集第13号投稿予定)(博士論文の「検証」部分に該当)

- ・「欧米における歴史的思考に関するアプローチの変遷—歴史教育における認知主義から社会文化的アプローチへの拡大—」(全国社会科教育学会投稿予定)

近年の欧米における歴史的思考に関するアプローチが、英国でのピアジェ派のアプローチや米国の熟達化研究を経て、社会文化的アプローチへと拡大していく過程について整理する。(博士論文の「先行研究」部分に該当)

- ・「歴史のナラティブと公民としての資質・能力」(仮題)

科学コミュニケーション論を歴史教育に適用し、歴史における欠如モデルから文脈モデル、市民参加モデルへの移行について、パブリック・ヒストリーやH. ホワイトの Practical Past 論からアプローチして、歴史教育におけるナラティブの重要性を検証する。(博士論文の「研究の目的」部分に該当)

2 2023年度の研究活動

(1) 論文

- ・ 「概念変化と歴史的ナラティブの構成を促す矛盾する資料および協調学習の開発・検証」

日本教育工学会論文誌投稿・採録

(2) その他

- ・ 桃木至朗, 杉本淑彦, 青木一真, 美那川雄一他『新詳世界史探究』(教科用図書) 帝国書院, 2023年(分担執筆)
- ・ 桃木至朗, 杉本淑彦, 青木一真, 美那川雄一他『新詳世界史探究 指導資料』(教師用指導書) 帝国書院, 2022年(分担執筆)
- ・ 美那川雄一, 「二つの「比較」で思考しよう」『社会科教育』No.770, 明治図書, 2023年
- ・ 美那川雄一, 「概念の構築を目指した歴史学習デザイン」高大連携歴史教育研究会第1部会発表(立教大学)

鈴木 一成

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究

○研究ポイント

小学校体育科第1学年及び第2学年の児童が対象となる体ほぐしの運動遊びの教材開発とその効果を「二人称的アプローチ」により明らかにすることを目的とする。

○キーワード

二人称的アプローチ, 小学校体育科, 体ほぐしの運動遊び, 教材開発, 教材効果

1 博士論文の計画

博士論文の計画は章立てに即して立案し、その計画に基づき研究を進めている。まず、2023年度は、本研究テーマの先行研究を踏まえ、研究の学術的位置と新規性を検討した(第1章・第2章)。次に、2024年度は、2023年度の大学授業とゼミ及びセミナー1でのご指導を踏まえ、先行研究の検討不足を補うとともに博士論文の柱となる論文投稿を継続する予定である(主に第3・4章)。そして、2025年度は、2024年度の成果と課題を整理して(主に第5・6章)、博士論文の執筆に取り組む予定である。

【章立て】

第1章 問題の所在と目的

第2章 体ほぐしの運動遊びの教材概念と教材効果に関する理論的枠組みの検討

第3章 「二人称的アプローチ」と体ほぐしの運動遊びの教材開発及び効果に関する方法論の検討

第4章 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する実践事例

第5章 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する理解を得るために

第6章 統合的考察と今後の展望

2 本年度の研究活動

【論文】

- (1) 鈴木一成 (2024) 小学校体育科の体ほぐしの運動における教材概念の一考察-小笠原の「ある」から「なる」への教材論を手掛かりとして-, 日本教材学会『教材学研究』第35巻, pp. 7-16.
- (2) 鈴木一成 (2024) 小学校体育科体ほぐしの運動遊びにおける「共感的かかわり」を目指す教材の効果に関する研究-「三項関係の発達」を手掛かりとした学びの様相に着目して-, 臨床教科教育学会『臨床教科教育学会誌』第23巻第2号, pp. 23-35.
- (3) 鈴木一成 (2024) 体づくり運動における指導実態に関する検討-愛知県内の公立小学校教員の意識調査より-, 愛知教育大学『愛知教育大学研究報告』第73輯, pp. 38-44.
- (4) 鈴木一成 (2024) 体ほぐしの運動遊びにおける教材の効果に関する試行的実践-小学校第1学年の児童を対象としたアンケート調査から-, 愛知淑徳大学『教志会研究年報』第10号 (印刷中).

【発表】

- (1) 鈴木一成 (2023) 愛知県内における体づくり運動の指導実態に関する調査, 第14回教科開発学研究会, Online.

孔 令杰

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

外国人日本語学習者を対象とした ChatGPT を用いた日本語作文トレーニング

○研究ポイント

ChatGPT を日本語に適応し、学習者の言語レベルとニーズに合わせたトピックを提供する実証実験を行う。学習者は ChatGPT と対話し、リアルなフィードバックを通じて日本語の表現力と論理展開を向上させることを目指す。トピック設定やフィードバックの質の影響を評価し、新しい学習手法の実用性を明らかにする。言語教育分野に新たな展望を提供する。

○キーワード

ChatGPT, 日本語学習, 日本語作文トレーニング, 日本語教育

1 博士論文の計画

2024 年度の予定は論文を 2 部を作成することである。テーマと研究方法は以下の通りになる。

1) 外国人日本語学習者を対象とした ChatGPT を用いた日本語作文トレーニング

1. 研究計画対象の選定

国籍と関わらず、名古屋にある日本語学校の初級、中級、上級クラスから各 4 名と、既に大学へ入学した外国人大学生 4 人を対象とする。

2. アンケート調査

調査対象に実験前と終わった後に二回アンケート調査を実施する。アンケート項目については、「ChatGPT の利用経験」などである。

3. トピック設定

トピックは全部日本語学校で使っている教科書から選定する。全部で 4 つを選定し、週 1 回、合計 1 が月で実行する。

4. 実証実験

上記の調査対象を ChatGPT を用いた日本語作文トレーニング組と ChatGPT 使わない組でグループに分ける。各グループに初級クラス 2 名、中級クラス 2 名、上級クラス 2 名と大学生以上レベルの学習者を 2 名で人員を配置する。ChatGPT を利用する組に ChatGPT プログラムを提供し、1 が月でトレーニングする。

5. 評価と分析

作文の質、トピックに対する適切な反応を各自 ChatGPT と教員から毎回評価する事と、学生にフィードバックの有効性などを評価してもらい、ChatGPT を活用したトレーニングの効果を定量的・定性的に分析する。

2) 外国人日本語学習者を対象とした ChatGPT を用いた翻訳能力トレーニング

上記の研究終了後に、その方法を参照しながら研究進んでいく予定

2 本年度の研究活動

学会発表：

孔令杰 (2024) 外国人日本語学習者を対象とした ChatGPT を用いた日本語作文トレーニング、一般社団法人 教育システム情報学会 2023 年度学生研究発表会

中野 弘幸

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

子どもの走能力向上のためのスキップエクササイズの開発

○研究ポイント

本研究は、運動前のウォーミングアップとして広く用いられているスキップを利用した、だれでも速く走れるようになるスキップエクササイズの開発を目的としている。そのために、スキップと走動作の関係を運動学的に明らかにした上で、より効果的に走能力を向上させられるスキップエクササイズを開発し、ドリル化したいと考えた。

○キーワード

子ども、スキップ、短距離走、走能力、走動作

1 博士論文の計画

既に中学3年生を対象に実施したスキップと50m走の動作分析を行っている。それらのデータをもとに、次のような順序で研究を進めていく計画である。一連の研究成果を博士論文としてまとめ、学校体育のかけっこ・短距離走の授業や地域のスポーツクラブ等に有効な指導内容を提供したいと考えている。

研究Ⅰ：スキップで走能力は向上するのか（実施済み）

スキップ動作と走動作との関係について検討した結果、スキップは全力走よりも大きな股関節伸展角加速度を発揮していることが明らかになった。また、走能力が高い被験者は、接地中のより早い時点で股関節伸展角速度を高めていた。これらのことから、スキップを行うことで股関節伸展筋力を高めて最大角加速度の出現時点を早めることは、走能力の向上に有効であると考えられた。

研究Ⅱ：走能力向上につながるスキップの指導法の検討（データ分析中）

股関節伸展角加速度のピーク値を高められる動作について検討する。小学生を対象とした先行研究では、スキップの腕の振り方（肩関節や肘関節の伸展角加速度が高く、力強い腕振り）がストライド長に影響を及ぼしていると考えられた。また、ストライド長は地面をキックするときの水平方向への移動速度に比例する。そのため、力強い腕振りは股関節伸展角加速度を高めるポイントになっている可能性が考えられる。そこで、研究②では腕振り動作と股関節伸展動作との関係について検討をする。

研究Ⅲ：スキップエクササイズの開発とその効果の検証

先行研究を参考に、スキップ以外の運動種目、何歩または何メートル実施するのか、実施する期間や時間を検討し、スキップエクササイズを開発する。また、走能力向上に有効なスキップの動作ポイント（≒指導ポイント）を用いてスキップエクササイズをドリル化し、指導現場で子どもたちに実施する。そして、指導前後の走能力を比較することで、指導の妥当性を検討する。

2 本年度の研究活動

論文（投稿中）

- (1) Kinematic characteristics of hip extension during skipping and sprinting in junior high school students. *Journal of Physical Education and Sport*.

IM RANY

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ (Research Theme)

Advancing Chemistry Education in Cambodia: Video-Based Experimentation with Agar Gel

○研究ポイント (Research Point)

Development of video-based experimentations with agar gel for teaching the topics in relation to acid-base and chemical kinetics.

○キーワード (Keywords)

Agar gel, Digital education, Natural pigments, Teaching and learning material, Video-based experiment,

1 博士論文の計画 (Doctoral Dissertation Plan)

The main objective of this study is to develop teaching material through technology integration to enhance the teaching and learning of chemistry in Cambodia. The resulting materials will be both cost-effective and user-friendly. Acquiring accurate quantitative measurement data, such as the concentration of unknown solutions, is one of the biggest challenges in chemistry education. The measurement devices are often too complicated to operate, some are not designed for educational settings or are unaffordable for schools. Therefore, developing learning materials that make science experiments more engaging is essential.

This research possesses the following three objectives:

- To determine pre-service teachers' competency in technology integration in teaching practice.
- To develop teaching material suitable for teaching and learning chemistry in Cambodia.
- To assess the effectiveness of using teaching material in teaching and learning chemistry.

In the academic year of 2023-2024, the experiment with agar gel and video-based analysis has been conducted.

2 本年度の研究活動 (Research Achievements AY2023)

Within the academic year 2023, two research papers have been published.

1. Rany Im, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. "Development of Acid-Base Indicators from Natural Pigments in Agar Gel." *Journal of Chemical Education*, volume 2023 (100). <https://doi.org/10.1021/acs.jchemed.3c00131>
2. Rany Im, Savrin Thy, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. "Cambodian STEM Pre-service teachers' competency in effective information communication technology integration teaching based on Technological Pedagogical Content Knowledge Framework." *Journal of Science and Education*, volume 4 (2), 2024. DOI: 10.56003/jse.v4i2.285

山内 慎也

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究

○研究ポイント

相互評価活動と考察記述の定型化指導（以下、「定型化指導」）を取り入れた授業デザインを構築し、実践することにより、学習者の考察に関する意識と科学的な表現の育成に与える効果を明らかにする。

○キーワード

科学的な表現、考察に関する意識、相互評価活動、考察記述の定型化指導

1 博士論文の計画

7つの章と序章、終章から構成する。

序章では、研究の目的と科学的な表現を育成する研究の必要性、相互評価活動と定型化指導を取り入れる授業をデザインする必要性を述べる。第1章では、相互評価活動を取り入れた中学校理科の授業を実践し、生徒の考察に関する意識の変化を明らかにする。第2章では、定型化指導を取り入れた中学校理科の授業を実践し、学習者の考察に関する意識の変化を明らかにする。第3章では、相互評価と定型化指導による学習活動を用いた中学校理科授業を実践し、学習者の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにする。第4章では、相互評価と定型化指導による学習活動を用いた中学校理科授業を実践し、学習者の考察に関する意識の変化を明らかにする。第5章では、相互評価活動を取り入れた授業を行う群、定型化指導を取り入れた授業を行う群、相互評価と定型化指導による学習活動を取り入れた授業を行う群を設定した上で中学校理科授業を実践し、学習者の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにする。第6章では、相互評価と定型化指導による学習活動を用いた中学校理科授業を実践し、定型化フレームの有無に着目し、学習者の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにする。第7章では、相互評価と定型化指導による学習活動を各教科に取り入れる可能性について明らかにする。終章では、相互評価活動と定型化指導を取り入れた授業を通して得られた、学習者の考察に関する意識と科学的な表現の育成について結論づけると共に、今後の研究に向けての課題を示す。

2 本年度の研究活動

●論文

Shinya Yamauchi, Hiroshi Iida, Kenichi Goto, Yorikazu Nouchi. (2023) 「The Influence of Learning to Incorporate Instruction on Formulation of Consideration Description Under Peer Evaluation Activity on Awareness of Consideration」『New Perspectives in Science Education, 12th Edition』, 119-122.

山内慎也・郡司賀透（2024）「理科における科学的な表現の育成を目指す考察指導の可能性—相互評価活動と考察記述の定型化指導の研究動向・授業実践に着目して—」『教科開発学論集』, 第12号, 11-21.

山内慎也・郡司賀透・飯田寛志・後藤頭一（2024）「相互評価活動と考察記述の定型化指導を組み込む考察指導に関する一考察—科学的な表現の育成に関する定型化フレームの効果の検討—」『理科教育学研究』, 第65号, 第1号 (in press)

●学会発表

山内慎也・郡司賀透・飯田寛志・後藤頭一（2023）「理科考察における科学的な表現の育成を目指す学習指導—相互評価活動と考察記述の定型化指導に着目して—」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第21号, 68.

山内慎也・郡司賀透（2023）「相互評価活動と考察記述の定型化指導を組み込む理科考察指導—科学的な表現の育成に関する定型化フレームの効果—」『日本理科教育学会東海支部大会研究発表要旨集』第68号, 50.

●その他

『板書&展開例でよくわかる 指導と評価が見える 365日の全授業 中学校理科 2年』（2023）明治図書, 第2章, 106-137. (分担執筆)

日本理科教育学会東海支部優秀実践賞

高宮佳祐

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

サッカーとウォーキングの良さを融合したサッカー授業に関する研究

○研究ポイント

技能や体力差の影響を考慮し、全ての児童生徒が各々の楽しさを見出せるサッカー授業教材を開発する。

○キーワード

サッカー、ウォーキング、ウォーキングフットボール、球技、体育

1 博士論文の計画

本研究は、サッカー授業において技能や体力差が授業参画へ及ぼす影響を踏まえ、誰もが自らの意思で授業へ参画できる教材開発を目指す。そのため、以下の流れを踏まえ研究を進めていく。

①サッカー教材、球技教材の成果と課題の整理

②体育授業における参画度の定義づけ

③サッカーおよびウォーキングの良さを明らかにした上で、それらを取り入れた授業を検証

なお、検証する際には心拍数やGPSといった客観的な測定データを基に運動を科学的に捉え、より多くの技能/体力ニーズに応じた体育教材の開発を目指していく。

2 本年度の主な研究活動

論文執筆

- 1) 「ウォーキングフットボールを保健体育科実技に導入するための基礎的研究」：ウォーキング研究, 27, pp.17～24, 高宮佳祐, 長津恒輝, 豊田聖理, 望月滉洋, 山口理生, 仲原風歩, 杉山康司

口頭発表

- 1) 「ウォーキングサッカーの教材化に向けた基礎的研究」：教科開発学研究会, 2023.10, 高宮佳祐, 杉山康司
- 2) 「ウォーキングフットボールの体育教材化に向けた基礎的研究-女子中学生の体力差に着目して-」：日本フットボール学会, 2024.3, 高宮佳祐, 長津恒輝, 平嶋裕輔, 杉山康司

V. 修了生の論文要旨及び 執筆体験談

博士論文執筆体験談

(THY Savrin 学籍：愛知教育大学)

1 Doctoral dissertation topic

In 2019, While working at an NGO School in Cambodia, I encountered a challenge during a physics lesson study. Unable to access expensive equipment for a free fall motion experiment, I proposed using video experiments as an alternative. Despite the idea's appeal, it wasn't pursued, possibly due to teachers' lack of confidence in integrating technology into teaching.

The COVID-19 pandemic in 2020 prompted school closures, leading to a shift towards distance learning and a reliance on ICT. Despite my encouragement, physics teachers remained hesitant to adopt video experiments. Reflecting on these experiences as I began my doctoral studies in Japan, I became intrigued by why ICT-based experiments weren't embraced. This curiosity and the global discourse on ICT in education and technological advancements inspired me to focus my dissertation on ICT-based teaching materials, particularly video-based experiments.

2 Writing papers and dissertation

Producing my first paper was challenging. It took time to find a topic, especially one with enough originality to be accepted for publication. I spent hours reading literature to identify gaps and find an appropriate journal. I also worried about the level of English proficiency required. I remember feeling nervous when I submitted my first manuscript to Physics Education. Fortunately, it only needed minor revisions and was eventually published.

This experience taught me a lot. I learned how to produce a quality paper, find the right journal, and deal with reviewers' comments. In short, I gained valuable insights into the research and publication process. These writing skills will help me in writing my dissertation.

3 Future prospective

In Cambodia, I have shared my dissertation with various individuals working at universities, and research institutions, and with the Education Specialist at the World Bank. The Royal University of Phnom Penh has proposed that I offer a Teaching Physics Using ICT course for their master's program for Physics teachers. Cambodia Development Resource Institute (CDRI) and the World Bank have encouraged me to prepare a project to train teachers using these teaching materials and methods, with budgetary support from them. I'm currently working on that. At my workplace, a teacher education university, I have had the opportunity to share my dissertation with pre-service high school teachers through my lectures. I am delighted by the positive and supportive responses toward my dissertation.

I sincerely thank the Cooperative Doctoral Course committees of Aichi University of Education and Shizuoka University for considering my dissertation. I express gratitude to the MEXT scholarship program for its support. Special appreciation goes to Professor IWAYAMA Tsutomu and my sub-supervisors for their guidance. Thanks to the International Office and all professors for their unwavering support. I have a deep appreciation for my family for their spiritual support. Lastly, thanks to my Aichi prefecture and International House friends for their companionship and support throughout my journey.

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻 氏名：露木 隆

Course : Cooperative Doctoral Course in Subject Development

Name : Takashi Tsuyuki

論文題目：電気抵抗の科学的概念の形成を促す教材と指導法の開発

Title of dissertation : Development of teaching materials and instructional methods to promote the formation of scientific concepts of electrical resistance

論文要旨：

本研究は、様々な抵抗率をもつ導電性粘土と、抵抗の熱散逸を可視化する導電性サーモ寒天を開発し、さらに、それらの教材を用いて高等学校物理基礎「電気」分野の指導において、抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念を合成抵抗や抵抗で発生するジュール熱の学習にも応用することで、オームの法則から電力までの一連の学習に関連性をもたせた指導を可能とする指導法を開発し、教材と指導法の効果の検証を行った。

第1章では、初等中等理科教育における「エネルギー」を柱とする内容構成の電気抵抗の学習の取扱いについて確認を行い、小学校3年生から始まる電気分野の体系的な学びが、最終的に高等学校におけるエネルギーや科学技術の発展に関する理解の基礎となっていることについて説明した。さらに、全国学力・学習状況調査や高等学校教育課程実施状況調査等の結果から、中等教育における電気抵抗の理解や好嫌度に課題があることについて述べ、高等学校学習指導要領（平成31年告示）の内容を基に課題解決に向けた授業設計に重要な視点として、①観察、実験、②生徒同士の議論の場、③素朴概念への留意、④電気抵抗の学習の一貫性（関連性）の4つの視点を定義した。また、電気抵抗の科学的概念の形成を目的とした先行研究の調査より、どの教材も対象生徒の電流、電圧、抵抗の概念形成に一定の効果は認められるが、通電できない、変形できない等の課題があることや、抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値の関係から、合成抵抗、ジュール熱の発生、電力までの電気抵抗の一連の学習において、関連性をもたせた指導を行った例も見られないことを確認した。

第2章では、本研究で開発した5種類の抵抗率の導電性粘土について、抵抗の形状と抵抗値の関係について分析を行い、抵抗の長さ、抵抗値及び抵抗の断面積の逆数と抵抗値はそれぞれ比例の関係にあることを明らかにするとともに、食塩配合率と電気伝導度の関係や導電性粘土の電荷キャリアについても明らかにした。また、寒天に食塩と導電性粘土に

サーモインク（株式会社ナリカ）を混合することで、導電性サーモ寒天を開発し、導電性粘土と同様に抵抗の長さや断面積の逆数と抵抗値が比例の関係にあることを明らかにするとともに、製作した抵抗を直列、並列接続し電流を流した際に抵抗の熱散逸を観察することができることを確認した。

第 3 章では、導電性粘土を用いて抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念の形成を促す指導プログラムを実践し、教材と指導プログラムの効果の検証を行った。実験群と統制群の概念調査の結果から、素朴概念が修正されるとともに、科学的概念が形成され、形成された概念は 2 週間後も維持されることが分かった。よって、本研究で開発した 2 種類の抵抗率の導電性粘土とそれを用いた指導プログラムが抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念形成に有効であることが明らかになった。

第 4 章では、導電性サーモ寒天を用いて抵抗で発生するジュール熱と電力に関する科学的概念の形成を促す指導プログラムを実践し、教材と指導プログラムの効果の検証を行った。実験群と統制群の概念調査の結果から、素朴概念が修正されるとともに、科学的概念が形成され、形成された概念は 1 ヶ月後も維持されることが分かった。よって、本研究で開発した導電性サーモ寒天とそれを用いた指導プログラムが抵抗で発生するジュール熱と電力に関する科学的概念の形成に有効であることが明らかになった。

第 5 章では、第 1 章で定義した授業設計に重要な 4 つの視点を基に、第 3 章で示した指導プログラムを通して獲得する抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念を合成抵抗に関する科学的概念の獲得に応用し、さらに、それらの概念を第 4 章で示した指導プログラムを通して抵抗で発生するジュール熱と電力に関する科学的概念の獲得につなげることで、オームの法則から電力までの一連の学習に関連性をもたせた指導を可能とする指導法を提案した。

第 6 章では、第 5 章で提案した指導法を実践し、効果の検証を行った。実験群と統制群の概念調査の結果から、抵抗の電力に関する科学的概念形成は導電性サーモ寒天の実践のみを単独で行った場合に比べ、抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念を用いた一連の指導を受けた場合の方がより概念形成や概念の維持が促されることが示唆された。また、電気分野に関する意識調査や電気分野の基礎的な計算問題に関する理解度調査において、実験群と統制群との間に有意差を確認することができた。さらに、各実践後のアンケート調査では、実践の有効性について肯定的な回答をする生徒が 9 割を超えていることや、自由記述による実践の感想の中で、「抵抗のイメージを持つことができた」といった記述が多数見られたことから、本研究で開発した抵抗の抵抗率と形状及び抵抗値に関する科学的概念を用いた新指導法は、生徒に抵抗のイメージを獲得させ、抵抗に関する科学的概念の形成に有効であることが明らかになった。

第 7 章では、研究成果から導かれる結論として本研究で開発した教材と指導法の有効性についてまとめるとともに、教材の限界と今後の課題について述べた。

博士論文執筆体験談

(露木 隆 学籍：愛知教育大学)

1 博士論文のテーマ

電気抵抗の科学的概念の形成を促す教材と新指導法の開発

2 テーマ設定に至った経緯

高等学校で理科（物理）の教員をしていたこともあり、実践的な研究が取り組みやすいと考えました。また、心理学統計の知識が全くなく、できるだけ定量的な分析結果を用いて論文を執筆できるテーマがよいと考え、教材開発に絞りました。その後、教科書や指導書を読み返しながら、普段の授業で生徒が躓きやすい単元と、その課題を解決する新教材のアイデアをできるだけたくさんノートにまとめ、主指導教員と相談の上、導電性粘土を用いた抵抗体の研究に決定しました。

3 論文執筆にあたって

修士までは工学研究科であったため、教育学の論文の書き方が分からずとても苦労しました。当初は色々な視点を詰め込んだ方がよい論文になるだろうと考えて、教材開発の中に自己調整学習の要素も取り入れて論文を書きましたが、生半可な知識で中途半端な議論をしたことで、査読者から論文と同じくらいのページ数のご指摘をいただく結果となりました。また、指摘された内容についても、経験の少ない私にとっては査読者の意図が理解できず、修正と削除を繰り返し、まったく先に進まない時期もありました。しかし、指導教員の先生方の的確なアドバイスや、査読者の教育的な対応に助けられ、1年半かけて5回修正し、6回目の投稿で掲載可となりました。その後は、査読対応も多少慣れたこともあり、教科開発学論集、大学の紀要、海外のジャーナルと、1年くらいの期間で3本掲載可となり、さらに博士論文も完成させることができました。査読者の指摘は厳しく感じることも多いですが、それらに対し、1つ1つ地道に粘り強く、誠実に回答していくことで、論文執筆のスキルが身につくことを実感しました。

4 今後の抱負、謝辞

現在は17年間務めた高校教員を退職し、佐賀大学アドミッションセンターの教員として高大接続に関する研究をしながら教養科目や教育学部の授業を担当しています。実務経験を活かし、新しい時代にあった高大接続の在り方について良い事例を発信していきたいと考えています。

最後に、博士論文を執筆するに当たり指導教員の先生方、審査に関わっていただいた先生方、授業で多くの示唆を頂戴した先生方に、心より御礼申し上げます。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：中村 仁志

Course :

Name :

論文題目：

Title of dissertation :

デューイ実験学校における歴史教育の理論と実践に関する研究

—デューイのメリオリズムと成長論の萌芽としての適応論に着目して—

論文要旨：

Summary :

本研究は、米国の哲学者・教育学者ジョン・デューイのメリオリズムと成長論の萌芽が見られるシカゴ大学時代のデューイの適応論に着目し、デューイが開設・運営に携わった「デューイ実験学校」における歴史教育の理論と実践について明らかにすることを目的とした。

第1章では、デューイ実験学校における歴史教育の基盤にあった所論について検討した。第1節では、シカゴ大学時代のデューイの適応論の含意とその教育目的論としての特質について明らかにした。デューイのいう適応は、人間の要求に適合するように諸条件を統制し改良することを志向するものであり、適応の質を高めることは、人間が現在の活動の中で自身の要求に適合するように諸条件を統制し改良する力を伸長させ、活動の確実性を増加させることを意味していた。このようなデューイの適応論は、教育目的論における「変容」モデルとしての特質をもっていた。第2節では、シカゴ大学時代のデューイの適応論との関連に着目し、シカゴ大学時代のデューイによるヘルバルト主義の文化史段階説と形式段階論の批判的解釈の内実を詳らかにした。第3節では、社会的等価物への翻訳、心理化、相関、オキュペーション、教科観、歴史科教育に関わるデューイの所論に分析を加え、シカゴ大学時代のデューイの教育論における適応の質を高める教育実践の論理を描出した。第4節では、フロンティア学説に関わるフレデリック・J・ターナーの所論を取り上げ、シカゴ大学時代のデューイの適応論との関連からみたフロンティア学説がもつ歴史科教育内容としての意義について考察した。

第2章では、ローラ・L・ラニヨンの修士論文と「実験学校ワークリポート」を主たる分析対象とし、シカゴ大学時代のデューイの適応論との関連をふまえ、デューイ実験学校における歴史科教育の理論と実践に検討を加えた。第1節では、20世紀への転換期米国における初等歴史科教育論に対するラニヨンによる批判の内実を詳らかにした。第2節では、デューイ実験学校の歴史科教育における目標、教授・学習過程、カリキュラムの関連性について明らかにした。歴史科では、子どもが社会の一員であることと社会生活における自分自身の役割を自覚し、社会について解釈できるようになること、その上で、諸条件を改良する能力や将来生じうる諸条件に適応する能力を育成することが目標とされた。歴史科教授・学習過程は、現在および過去の人物・民族・共同体が直面した諸条件とそれに対処する活動について検討する事例研究として構成されていた。歴史科教授・学習過程において、諸

条件をカリキュラムレベルで組織化した上で提示することが教師の重要な役割の一つとなっていた。歴史科カリキュラムにおける歴史科の教材は、現在および過去の人物・民族・共同体が直面した諸条件とそれに対処する活動について検討する事例研究の事例として構成されていた。また、歴史科カリキュラムは、典型的な現在および過去の人物・民族・共同体が直面した諸条件とそれに対処する活動が教材として選択され、子どもが成長段階に合わせて事例研究を進められるよう、オキュペーションと結び付いた現在の社会生活に関わる活動を基盤とし、単純な諸条件から複雑な諸条件へと徐々に移行するように教材が配列された。子どもはこのような歴史科カリキュラムにおいて事例研究を積み重ねることを通して、適応の質を高めていくことができるのである。しかし、以上のような歴史科カリキュラムは、自民族中心主義という限界性をもっていた。第3節では、デューイ実験学校の歴史科教育におけるフロンティア学説の心理化の特質について考察し、第一に、現在の子どもの活動にとっての身近さを考慮し、子どもが住む北西部の開拓者の社会生活を取り上げた点、第二に、子どもがフロンティア学説のもつ意義を実感できるように、典型的な現在および過去の人物・民族の社会生活に関わる活動およびその根源にあった人物・民族の要求を教材として選択し組織化していた点、第三に、自民族中心主義を内包していた点を挙げた。

第3章では、シカゴ大学時代のデューイの適応論との関連をふまえ、デューイ実験学校における歴史科と他教科等の相関の具体と教師の協働の特質について検討した。第1節では、「実験学校ワークリポート」で報告されている歴史教育実践の具体を明らかにし、歴史科と他教科等の相関が適応の質を高めることにつながるものとなっていたことを論じた。第2節では、デューイ実験学校における教師の協働の特質について、研究者としての各教師が異なる専門性を活かし合った「協働的探究 (collaborative inquiry)」であると再解釈した。

第4章では、デューイ実験学校における歴史教育の理論と実践がもつ今日的示唆に検討を加えた。第1節では、問題解決的な学習過程を通じた資質・能力の育成と教育目的論の関連性に関わる示唆について、第2節では、問題解決的な学習過程とカリキュラムの関連性に関わる示唆について、第3節では、教科等横断的な学習を保障する教師の協働に関わる示唆について論じた。

博士論文執筆体験談

(中村 仁志 学籍：愛知教育大学)

1 研究テーマの設定に至るまで

私は、博士課程に入学する前から、米国の哲学者・教育学者ジョン・デューイが開設・運営に携わった「デューイ実験学校」における歴史教育を研究テーマとして研究を進めてきました。もちろん、デューイ実験学校の歴史教育については先行研究の蓄積があります。そこで、デューイがデューイ実験学校に関与していた期間を含むシカゴ大学時代のデューイが論じていた「適応」論を分析視角として設定し、デューイ実験学校の歴史教育に分析を加えることで、自分の研究の独自性と意義を主張することにしました。シカゴ大学時代のデューイの適応論は、シカゴ大学時代以降に発展していくデューイの思想を論じる上で重要となる「メリオリズム」と「成長」論の萌芽が見られる点で注目すべき概念でしたが、管見の限り、この概念を中心に据えてデューイ実験学校を分析した先行研究はありませんでした。

2 研究で苦労した点

研究で最も苦労したのは、博士論文全体の分析の軸となる分析視角の設定です。デューイ実験学校の歴史教育に関する研究を進める中で、シカゴ大学時代のデューイの適応論が重要になりそうだと考え、シカゴ大学時代のデューイの適応論に関する研究も行うようになりました。しかし、博士論文をまとめる段階でこれまでの研究成果を博士論文という一つの論文になるように統合していく際に、最初はこれまで執筆してきた個々の論文の内容を上手くつなげることができず、博士論文全体に一貫性をもたせることができませんでした。そのとき、主指導教員である中野真志先生をはじめ、先生方からご助言をいただいたり、さまざまな文献を読んだりしたりする中で、適応論がデューイとデューイ実験学校を読み解く上で、また、今日の教育実践を発展させていく上で大きな意義をもっていることに気がきました。そして、この適応論を博士論文の分析視角として設定し、博士論文の各章の分析をし直すことで、何とか博士論文として形にすることができました。

3 謝辞

中野先生には、主指導教員として、研究の進め方から研究者としてのあり方に至るまで、一から温かく丁寧にご指導をいただきました。中野先生のご指導とご支援なくしては博士論文を完成することはできませんでした。野地恒有先生、倉本哲男先生、丹沢哲郎先生、竹川慎哉先生には、博士論文の審査の中で貴重なご意見をいただきました。また、博士課程で研究を進める過程で、多くの先生方からご助言やご示唆を賜りました。職員の皆様にはさまざまな面で院生生活をご支援いただきました。皆様のご指導とご支援があったからこそ、こうして博士論文を書き終えることができました。心より感謝申し上げます。

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：加藤 智

論文題目：

非認知的スキルの育成に資するサービス・ラーニング型総合的な学習の時間に関する研究

論文要旨：

本研究は、近年、教育学に限らず、心理学、経済学、社会学など多くの学問分野で注目されている非認知的スキル (non-cognitive skills) を育成に資する総合的な学習の時間の教授方略について、米国を中心に展開されているサービス・ラーニング (Service-Learning) の理論を踏まえて検討した。

第1章では、近年の総合的な学習の時間の動向とその中で採用された特有の教授方略を概観した。デューイの教育思想や大正新教育の流れを汲み、経験主義の教育思想に基づき重視されてきた「実践的教授のアプローチ」、学習者が自分の興味や関心に基づいて主体的に学習を進める側面を強調する「学習者中心のアプローチ」、カリキュラムとの有機的な関連を図る「学際的なアプローチ」、共通の目的の達成に向けて学習者が多様な他者と相互に影響を与え合いながら取り組むことを促す「協働的学習のアプローチ」、そして問題解決を通じて不確定な状況から確定した状況へと変容する永続的な過程を重視する「探究的な学習のアプローチ」の五つの教授方略が導かれた。しかし、これらのアプローチに対する学校現場の理解は不十分であり、特に非認知的スキルの育成に関する効果的な教授方略の確立が課題となっていることが明らかとなった。

第2章では、非認知的スキルの育成手段としてのSELと、その具体的なプログラムを提供するCASELの有用性、そして体系的で継続的なSELプログラムの実践の場としてのサービス・ラーニングの可能性について検討した。その結果、総合的な学習の時間のような比較的長期的で継続的、かつ横断的で総合的なカリキュラムを対象とする研究はごく限られていること、そして、サービス・ラーニングが非認知的スキルを幅広く育成する可能性があることが明らかとなった。

第3章では、サービス・ラーニングの特質とその非認知的スキルの育成への寄与を検討した。サービス・ラーニングと総合的な学習の時間の共通性に着目し、質の高いサービス・ラーニングの特質を踏まえた総合的な学習の時間である「サービス・ラーニング型総合的な学習の時間」が、非認知的スキルの育成に寄与する可能性を見いだした。また、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間の固有の教授方略として、「コミュニティベースの学

習のアプローチ」および「リフレクション重視のアプローチ」を導出した。

第4章では、初等教育におけるサービス・ラーニングが育成する非認知的スキルについて、小学校のサービス・ラーニング型総合的な学習の時間の実施状況を基に検討した。その結果、本研究が対象としたいずれの非認知的スキルについても、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間に自覚的に取り組んだ児童とそうでない児童との間に、その発達状況に有意な差が確認された。その一方で、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間においては、単にリフレクションの機会が提供されるということ以上に、経験の意味付けや努力の想定において児童の主体性が不可欠であることや、他者との相互作用を働かせながら自己の取組を批判的に評価することが極めて重要であることが明らかとなった。また、学力低群（主観的学力評価において、自分の学力に対して自信がないと回答した群）の児童にとっては、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間が非認知的スキルを育成する貴重な機会となっていること、このような学習者に対する教授方略上の支援や配慮が必要となることも示唆された。

第5章では、総合的な学習の時間の授業における非認知的スキルの育成に寄与するリフレクションを促す教授方略について検討した。継続的で喚起的、関連的、状況適応的なリフレクションが非認知的スキルの育成に寄与すること、学習者自身が自己の情動をメタ認知できるように促すリフレクションの在り方を明らかにした。また、学力低群の属する学習者に対しては、安全な学習環境の提供、明確なリフレクションのガイダンスとフィードバック、定期的なフィードバックの提供が重要であり、これらの教授方略があらゆる学習者の非認知的スキルの基盤を形成する可能性が示唆された。

本研究は意義と独自性は以下の3点である。第一に、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間が非認知的スキルの育成に効果的であることを実証した。これまでの総合的な学習の時間に関する研究では、非認知的な側面の重要性は強調されてきたが、実証性には課題があった。本研究は具体的なエビデンスを提供しており、総合的な学習の時間の意義や価値を正当に評価することにつながるものである。

第二に、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間が全人的な教育を促進し、特に「コミュニティベースの学習のアプローチ」と「リフレクション重視のアプローチ」が効果的であることを明らかにした。これらのアプローチはカリキュラム作成や授業改善、さらにはインクルーシブ教育の発展にも寄与する可能性がある。

第三に、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間が社会全体の発展とコミュニティの強化に貢献する可能性を示した。サービス・ラーニング型総合的な学習で育成される非認知的スキルは、学校という限定された文脈を越えて求められる汎用的で社会の持続的な発展に寄与する資質・能力である。つまり、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間は、学校教育の枠を超え、社会全体の発展とコミュニティの強化につながると考えられる。

博士論文執筆体験談

(加藤 智 学籍：愛知教育大学)

1 研究テーマの設定

博士論文のテーマは、「非認知的スキルの育成に資するサービス・ラーニング型総合的な学習の時間に関する研究」としました。修士課程を修了した後、総合的な学習の時間に焦点を当てた研究を続けていましたが、特に米国のサービス・ラーニング (Service-Learning) に強い関心をもちました。特に、この分野で非認知的スキルの育成が注目され始めていることから、日本の総合的な学習の時間にサービス・ラーニングの知見を活かし、これらのスキルを育成する可能性を探りました。日本では、総合的な学習の時間の導入から年月が経過しているにも関わらず、依然として多くの課題が存在しています。これらの課題を解決する手段として、サービス・ラーニングの導入が有効であると考え、研究に着手しました。

2 入学後の研究活動と課題への対応

博士論文の執筆では多くの困難に直面しましたが、特に世界的なパンデミックの影響が甚大でした。サービス・ラーニングを通じた非認知的スキルの効果を検証するため、2019年6月から7月にかけて事前調査を行い、2020年2月から3月に事後調査を計画していました。事前調査は無事に完了しましたが、2020年2月末から全国の学校が一斉休校となり、予定していた事後調査の実施が困難になりました。幸いにも2月中に調査を完了した学校からのデータは入手できましたが、対象とした非認知的スキルは予想外に低下していました。初期の仮説に沿わない結果に直面し、また、その後予定していたアクション・リサーチの実施が困難となったことから、研究のストーリーを再構築する必要性がありました。広範な分析を行った結果、当初は見過ごされていたサービス・ラーニングのポジティブな効果が浮かび上がりました。そのデータを基に、新たな研究のストーリーを検討したことが、研究のブレイクスルーになったと考えています。

3 今後の抱負と謝辞

博士論文の執筆に当たり、大変多くの方々からご指導を頂きました。特に主指導教員の中野真志先生からは、修士課程から継続して、丁寧で的確なご指導を頂きました。中野先生からの助言がなければ、サービス・ラーニングや非認知的スキルという重要な着眼点に気付くことはなかったと思います。副指導教員、審査委員の先生方、授業で示唆を与えてくださった多くの教員にも心から感謝申し上げます。

博士論文執筆中には、計画していたアクション・リサーチがパンデミックの影響で実施できませんでしたが、今後は実践協力者と共にアクション・リサーチを行い、研究の実証性をさらに高めることを目指しています。今後は、このような取り組みを通じて、総合的な学習の時間に関する理論的・実証的な研究を積み重ねていきたいと思っています。

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻 氏名：塩澤 友樹

論文題目：

学校数学における標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点の特定とその解消に関する研究 —データの変動性に着目して—

論文要旨：

本研究の目的は、学校数学の立場からデータの変動性に着目し、中高生及び大学生の標本データに基づく統計的推論の学年横断的な実態について明らかにすることで、標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点を特定するとともに、その困難点の解消に向けた算数・数学カリキュラム及び学習指導の改善に関する指針を得ることである。この目的に対して、本研究では、(1) 諸外国の算数・数学カリキュラムと日本の算数・数学カリキュラムを比較することで、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査と標本分布の位置づけの特徴について明らかにすること、(2) 標本データに基づく統計的推論とは何かを概念規定し、変動性に着目して標本データに基づく統計的推論を捉える理論的枠組みを構築すること、(3) データの変動性に着目して、中高生及び大学生の標本データに基づく統計的推論の学年横断的な実態について明らかにすることで、標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点を特定するとともに、その困難点の解消に向けた算数・数学カリキュラム及び学習指導の改善に関する指針を得ることの3つの研究課題を設定した。そして、これらの研究課題に答える形で研究を遂行した。

第1章では、昭和33年告示学習指導要領以降の指導内容に着目して日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査と標本分布の位置づけの歴史の変遷について整理した。さらに、統計教育先進国として取り上げられてきたニュージーランド、オーストラリア、アメリカの算数・数学カリキュラムにおける標本調査と標本分布の位置づけについて整理した。そして、これらの特徴を踏まえ、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査と標本分布の位置づけの特徴について明らかにした。

第2章では、統計的リテラシー、統計的推論力、統計的思考力の用語の背景と捉えについて整理し、統計的推論力の特徴を明確にした。そして、本研究における標本データに基づく統計的推論を概念規定した。

第3章では、「変動性」と「変動」の捉えを明確にし、標本データに基づく統計的推論に関わる変動性のコンセプトを特定した。また、先行研究における成果と課題について

整理し、標本データに基づく統計的推論を捉える理論的枠組みとして、「変動性のタイプ」,
「先行研究からの知見」,「具体的な統計内容」,「標本分布に関わる典型的なミスコンセプ
ション」の4つの観点別の調査枠組みを構築した。

第4章では、生徒・学生の記述を質的に評価する枠組みを開発する上で、SOLO Taxonomy
に着目し、SOLO Taxonomy が提案された背景とその枠組みの特徴、近年の統計教育研究に
おける SOLO Taxonomy の捉えについて明確にした。そして、分析枠組みを構築する視点を
導出し、標本データに基づく統計的推論を捉える理論的枠組みとして、これらの視点に基
づく分析枠組みを構築した。

第5章では中高生調査、第6章では大学生調査における調査の結果と分析について示し
た。そして、調査から明らかになった実態を踏まえ、中高生調査からは4つ、大学生調査
からは5つの学習上の困難点を特定した。

第7章では、特定した学習上の困難点を明確にし、総合的な考察を行った。その結果、
算数・数学カリキュラムの改善の視点から、(1) 全数調査と標本調査の違いや標本調査の工
夫など、標本調査の素地内容を小学校段階で扱うこと、(2) 標本調査の単元で、無作為抽出
だけでなく層別抽出についても扱うこと、(3) 標本調査と統計的な推測の両方の単元で、標
本の大きさを変えて標本抽出を繰り返す実験やシミュレーションを行い、標本平均や標本
比率の分布（標本分布）を観察することを通して、標本データに伴う変動性と標本の大き
さを関連付けることを扱うこと、(4) 標本調査の単元で、標本抽出の方法、標本の大きさ、
それら以外に起因する調査におけるバイアスの影響の特徴が明確になるように扱うととも
に、それらを関連付けて標本調査のプロセスや結果の信頼性を評価することを扱うこと、(5)
統計的な推測の単元で、母集団分布と標本の分布、標本分布と理論分布（確率分布）をそ
れぞれ関連付けて扱い、実際の分布における変動（散らばり）と関連付けながら、標本の
大きさの影響に関わる標本の分布の性質や標本分布の性質を扱うことの5つの指針を得た。
さらに、これらの指針と関連付けながら、算数・数学の授業における学習指導の改善の視
点から (1) 標本調査の必要性和意味を授業で扱う際には、標本抽出の方法、標本の大きさ、
調査におけるバイアスがどのように調査結果に影響するかを変動性と関連付けて理解させ
るとともに、標本調査のプロセスや結果の信頼性を評価する場面でも、これらの影響を検
討する活動を授業に位置付けること、(2) 標本調査の結果への標本の大きさの影響を授業で
扱う際には、実験結果を度数分布と標本分布に表すとともに、実験を通して意図的にそれ
らの分布の形状や散らばりの変化について考察する活動を授業に位置付けること、(3) 標本
分布の性質を授業で扱う際には、シミュレーションを通して意図的に標本の大きさと関連
付けて標本分布の形状や散らばりの変化について検討するとともに、標本分布の平均や分
散の式と関連付けて考察する活動を授業に位置付けることの3つの指針を得た。

博士論文執筆体験談

(塩澤 友樹 学籍：静岡大学)

1 博士論文のテーマ

学校数学における標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点の特定とその解消に関する研究：データの変動性に着目して

2 研究の目的

本研究では、学校数学の立場からデータの変動性に着目し、中高生及び大学生の標本データに基づく統計的推論の学年横断的な実態について明らかにすることで、標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点を特定するとともに、その困難点の解消に向けた算数・数学カリキュラム及び学習指導の改善に関する指針を得ることを目的としました。

3 博士論文の執筆について

所属校での業務がある中で、講義を受講しながら研究を進めることに苦戦することもありましたが、長期履修を認めて頂き、5年間をかけて博士論文の執筆に取り組みました。

1年次に諸外国の算数・数学カリキュラムにおける標本調査の位置付けに関する先行研究をレビューし、それらをまとめる形で、教科開発学論集に投稿しました。2年次に調査の実施に向けた準備に取り組みながら、標本データに基づく統計的推論に関する先行研究をレビューしました。3年次に理論的枠組みについて整理し、後半に調査を実施し、その結果の分析作業に取り組みました。4年次に調査結果をまとめ、学会誌に投稿しました。4年次の後半から5年次にかけては、研究成果をまとめる作業に入り、教科開発学セミナーⅢでの先生方のご指導を踏まえ、ブラッシュアップする形で、本博士論文を完成することができました。本研究では、調査結果の分析作業に時間をかけて取り組みましたが、その分、私自身が本研究の独自性を認識し、研究成果を俯瞰的にまとめることができました。

4 謝辞

本博士論文を完成させるにあたって、多くの方々からご指導とご支援を賜りました。教育学研究科の先生方からは多くの授業を通して、多面的な知識についてご教授頂きました。特に主指導教官の熊倉啓之先生には、暖かくそして根気強く、論文全般にわたって数多くのご指導を賜りました。また、副指導教官の飯島康之先生には、数学教育研究者としての心構えや本研究の構成、副指導教官の村山功先生には、学習科学の立場から基礎理論についてご指導を賜りました。調査研究を実施するにあたっては、多くの先生方、生徒・学生の皆様にご協力を頂きました。さらに本研究を進める過程では、多くの数学教育及び統計教育、統計学の先生方、学生の皆様に支えて頂きました。心より御礼申し上げますとともに、日本の算数・数学教育の発展に資する形で恩返しさせて頂ければと思います。

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：教育学研究科(博士課程)共同教科開発学専攻 氏名：下田 実

論文題目：「個」を「場」に導く指導に関する研究

論文要旨：

序章 研究の目的と方法

本研究の目的は、国語科教育の授業実践力向上に資するために、「個」(学習者)を学習の「場」に導く指導のありようを明らかにし、その実現に必要な学習者研究の方法及び指導方略を提案することである。課題として以下の3点を設定した。

1 「場」との関わりに目を向けた学習者研究の構築に向けて、実践主体である当事者が「物語る」研究手法の必要性と、研究のフィールドを国語科とインクルーシブな立場(対話的な立場)の接点に求めることの意義を明らかにする。

2 1の立場から「個」を「場」に導く指導のありようを明らかにする。

3 1・2の結果をふまえて、「個」を「場」に導くための学習者研究の方法と指導方略を検証する。研究方法は、実践当事者が「物語る」当事者参加型アクションリサーチを中心とし、分析資料として、学習者の作品・学習の記録(学習者によるもの)・インタビュー・授業後のメモ(研究主体によるもの)の他、研究主体が捉えた「個」を取り巻く状況や経緯・過去の事象を取り上げた。

第1部 研究の概要と意義

第1部に該当するのは第1章から第3章である。第1部では「個」を「場」に導く指導に関する研究の概要と意義を明らかにした。

第1章 本研究における「場」の概念：大村はま国語教室の「実の場」における関係の構築

本研究における「場」の概念について、大村はま国語教室の「実の場」の検討を通して明らかにした。注目したのは大村(1983)の「単元 知ろう 世界の子どもたちを」におけるグループ編成の過程である。検討にあたって、実践当事者である大村がどのように単元やグループ編成を「物語る」しているかを検証しつつ、教室内の人間関係の構築及び、関係の質的転換を図っていく過程と関係のありようを取りあげた。研究の結果、「実の場」には教師と個々の学習者との対話的關係を基盤にしつつ、学習者相互の同行者的関係が構築されていることが確認された。以上の考察をふまえて、大村の「実の場」についての畠山(2019)の考察を援用し、かつ Gilbert Ryle(1987)の提唱する「高次の傾向性」に注目して、本研究における「場」の概念を「傾向性としての『必然性(なりゆき)』が生じている状況」と定義した。

第2章 研究方法の検討と研究の枠組み

特別な支援を要する「個」が、「場」に関わる糸口をつかむまでの指導事例を取り上げ、実践主体である当事者が「物語る」研究手法と研究の枠組みについて検討した。検討の結果、実践当事者が「物語る」手法の必要性を確認し、「場」との関わりに目を向けた学習者研究の方法と枠組みとして「疎外・受容」を提案した。

第3章 本研究の意義

第1・2章を小括することを通して、「個」を「場」に導く指導の意義について考察した。考察に

あたっては、本研究が捉えている問題の所在として学習における内面的主体性の確立を挙げ、解決すべき課題として以下の3点を設定した。

- 1 教師と学習者の相互行為を通してことばの学びが生成する過程を捉える。
- 2 学習者の内面的主体性に応じた指導方略を提案する。
- 3 教師研究と学習者研究の構造化を図る。

これらの課題の解決に向けて第1・2章の内容がどのように位置づけられるかを、諸科学の知見を踏まえつつ検討し、実践主体である当事者が「物語る」研究手法の必要性和、研究のフィールドを国語科とインクルーシブな立場の接点に求めることの意義を明らかにすることを通して本研究の意義を確認した。

第2部 『個』を『場』に導く指導の実際

第2部に該当するのは第4章から第7章である。第2部では「個」を「場」に導く指導の実現を目指した事例を取り上げ、「個」を「場」に導くための学習者研究の方法と指導を検証し、第1部で示した課題がどのように解決されたかについて考察した。

第4章 「場」への参加を阻害する要因と指導の方略

「走れメロス」の劇化の学習における協働的な学習活動の際に、中心的な研究対象である「個」に突然生じた停滞に目を向けて考察を進めた。研究の枠組みから人間関係の「疎外」が生じた過程として検討を進めたところ、教師との1対1の関係から他の学習者との1対多の関係に移行するにあたっての指導の不足が関係の不調和を生んだことが明らかになった。この問題の解決には、教師と学習者の対話的な関係による指導を通じた対応が必要であると考え、方略を提案した。

第5章 内面的主体性の確立を促す指導と関係のありよう

批評文を書く3つの事例を取り上げ、学習者の内面的主体性の確立を促す関係の構造について考察した。まず、1・2番目の事例によって、人間関係のありようが学習者の内面的主体性の確立に及ぼす影響を検討し、教師による「個」の承認が学習者に与える安定と危機を指摘した。その上で、危機を解消するための3番目の学習指導を試み、教師自身の指導を省察しながら、学習記録や周囲へのインタビューによって教室内の関係の変容について考察した。内面的主体性を確立する指導とは、学習者個々の実態と状況を捉えて周囲との関わり方を提案し、人間関係の調整を図っていく営みであることが確認された。

第6章 「個」を「場」に導く指導の構造と構想の視点

2人の教師が行った短歌の鑑賞文を書く単元を取り上げ、「個」を「場」に導く指導の構造と構想の視点について考察した。考察にあたって、まず、同様の手引きを用いて行った2つの実践の到達度を確認した後、授業展開の詳細を比較し、到達度の違いに最も影響を与えた場面を特定した。次いで、その過程を通して学習者相互にどのような関係が生じていたかを明らかにし、その構築過程及び、効果について検討した。検討の結果、『個』を『場』に導く指導は、教師と学習者の対話的な関係において行われる精神面も含めた多面的な指導を周囲に承認させていくという構造を有していることが確認された。また、その具体は「個」の学習成果に関する相互承認の実現という視点から構想されており、その根底には対話的な指導による個々の学習者への存在承認が形成されていると考えられた。

第7章 第2部の総括

第4・5・6章の考察をもとに、諸科学の知見を踏まえつつ、第1部で捉えた課題がどのように解決されたかについて考察した。

結章 研究の成果と課題

序章で設定した課題がどのように解決されたかを確認し、今後の研究課題と展望を述べた。

博士論文執筆体験談

(下田 実 所属：比治山大学)

1 博士論文のテーマと設定の理由

(1)研究テーマ：「個」を「場」に導く指導に関する研究

(2)設定の理由

長年、国語科の教諭として中学校に勤めながら、以下のような疑問を抱いていました。

- ・同じ方法で授業をしているはずなのに教員によって到達度に違いが生じるのはなぜか。
- ・到達度に個別の能力差を超えた差が生じるのはなぜか。
- ・学校の学びにおける「主体性」とは何か。何をもち「主体的な学び」と捉えるのか。等々

これらは教師にとって向き合わざるを得ない課題でもあります。とらえどころがありません。そこで、「場」という概念を用いて、課題解決のための視点を設定し研究を進めることにしました。

2 研究の目的

研究の目的は教育現場にあって実践即研究を続けるための手がかりと方略を示すことです。先に示した課題には様々な要因が絡まりあっており、解決の糸口を探すことすら容易ではありません。とはいえ、現場の教師達は日常的にこれらの課題の解決に取り組み、不十分ではあるものの解決策を案出し、授業実践を通してその妥当性の検討を続けているはず。つまり、研究と実践は不可分であり、授業実践を課題解決のための試行錯誤の過程ととらえるならば、そこには実践と研究が自然な形で結びついた姿が現れ、授業者自身も意識していなかった方略が見出されると考えました。

3 研究の経過

博士課程に入学する直前にテーマの元となる論文が『国語科教育』に掲載され、論文の方向性を掘り下げるようになりました。しかし、この時は論文の位置づけが漠然としていて、どう進んだらよいのかわかっていませんでした。本課程に入学後は学会発表を節目に、とにかく自身の実践の分析・考察を進めました。学年主任を務めながら研究が続けられたのは研究のテーマも対象も自身の実践に基づいていたからです。研究データを集めるのは比較的容易であったと思いますが、実践の相対化と客観性の担保には苦しみました。迷うことも多く、博士課程の2年目には『教科開発学論集』に投稿して2本目の査読論文を通したものの、博士論文がまとめられるとは思えませんでした。その後、中学校教員を退職して現在の職を得、「場」に関する論文を大学の紀要に投稿することで、これまで考えてきたことに整理がついたのは幸いでした。完成が意識されるようになったのは『読書科学』に3つ目の査読論文が採択されてからです。査読者とのやりとりを通して自分がどんな論文を書くべきなのかがわかってきました。

論文の完成に至るまでには研究発表や査読コメントでかなり厳しいご指摘をいただきました。当然、そこには悩みや苦しみもあったのですが、自身の研究の限界や修正点を知る上で大変有益でした。「もともと普通の中学校教員なのだから、教えてもらうことがたくさんあって当たり前。」という開き直りもありました。こうした、いわば、素人感覚は現在の職にあっても役立っています。

4 謝辞

先生方のご指導なしには論文をまとめることは不可能であったと思います。とりわけ、国語科教育担当の坂口先生には博士課程へのお誘いを含め、ひとかたならぬお世話になりました。感謝の言葉は様々な心に浮かぶのですが、この場で言い尽くすことは到底できるものではありません。加えて、論文の草稿提出から最終試験に至るまでに、審査委員の先生方にはたくさんの示唆をいただいたことも大変ありがたく存じております。

今後の研究にいそしむことがご恩返しと考え、精進を続けて参る所存です。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名：二見 隆亮

論文題目：体験現象と教材とした自己探究型ランニング学習の可能性

論文要旨：

本研究の目的は、ランニング体験を通じて浮上した現象(以下体験現象)を教材とした自己探究型ランニング学習の可能性について検討することである。

一般社会的にランニングは健康づくり・体力づくりのために行われている。学校期におけるランニング教育も総じて同様に扱われている。しかし社会人ランナーたちと言葉を交わしてみると、健康づくり・体力づくりを越えたそれぞれの思いや拘りとともに固有な実践が繰り広げられていることがわかる。中には深刻な人生上の課題(以下人生課題)を抱えながらもそれも1つの大きな理由や糧にランニングに取り組むランナーもおり、走る理由はその実践とともに人の数だけ存在するといえる。「走ることは生きること」といった表現はいつのころからか目耳にするようになった。それはひとえに特定の学問領域における検証のみからでは語りつくせない人間学的な何かを捉えた人たちによって継承されてきたことを示している。

本研究では上記のようなランニングの外からでは見えにくい人それぞれの内面世界に注目した。教員が提示した学習内容を教材とするのではなく、多様な体験現象またそれに対する解釈の方を教材とすることで、自分(もしくは学習集団における自分たち)にとってのランニング(あるいは身体を介した学習)の意味を深く考えることができるのではないかと考えた。そういった学習により、ランニングに留まらない自分の在り方・生き方・学び方についても深く考える機会にできるのではないかと考えた。

第1章(序章)では研究の目的と背景から関連する先行研究の検討と研究方法を示した。近年国内では梶田叡一を中心に再構築が進められている人間教育の視点からランニングという運動・スポーツを子どもたちの人生に生かしていくことができるのではないかと考えた。また、一貫して人間科学の研究態度をとることを示した。

第2章ではこれまでのランニング研究についてウォーキング研究を併せて一覧することで、どのような視点・立ち位置から移動運動が研究されてきたのかを概観した。ウォーキングは健康を志向したもののランニングは走力向上を志向したものが多かった。主観を対象とするものは少なかったが、補論として取り上げた自分学的研究に開拓の余地が示唆された。

第 3 章では深刻な人生課題を持つ中高年ランナーに生起する内省について調査した。対象者 3 名にナラティブ・インタビューを行い、テーマ分析を行った結果、自ら行動を起こすことで体験的にランニングと人生の共通点を見出していくことが明らかとなった。

第 4 章では大学生を対象とし、自分なりに歩くこと・走ることでどのようなことに気づくのかを調査した。解釈学的現象学的分析を援用して事後インタビュー逐語録を分析し、アンケート、学習記録と照合した結果、段階を踏むこと、自己裁量を促すことにより、自由な取り組み方を模索しながら運動導入意思を高めている様子が伺えた。

第 5 章では人間教育学において扱われている自己教育という観点から、新たなランニング教育について展望を行った。自己教育の先駆的实践を手掛かりとして個人固有の意味・価値を見出していくためのランニング機会について検討した結果、①教材を体験現象に据える、②探究学習の対象を自分に据える、③自己評価と共有を行うことの重要性が見出された。

第 6 章では中学 3 年生を対象に総合的な学習の時間の中で自己探究型ランニング学習の実践を行った。ここでは一人称研究の態度から、授業名「自分をひもとくランニング」のもと半期全 10 回・通年全 21 回の実践の中で多様な体験と自己評価に重点をおいた。1 つの学習に対して全生徒共通の成果を求めさせるのではなく、各体験を通じて何を考えたか・何を感じたか、自分にとって何が重要なのかを考えさせる授業を展開した。各授業後にはそれぞれの体験現象が自分にとって何を意味するのかを過程が一覧できるかたちで授業ごと記述させた。現象学的還元を援用した分析の結果、個々におけるランニング観の変容、各授業の位置づけに関しては大きな特徴は得られなかったが、授業全体の位置づけを分析すると、生徒たちには確かに「学びに向かう力」を確かめることができ、体験を“生かす力”に関しては特に通年の実践において醸成された。よって年間を通じた総合学習において、ランニングにおける体験現象を教材とし、中学 3 年生が自己の探究に臨むことは、身体活動を通じた自分のこれまでとこれからについて深く考える意義深い学習となることが明らかとなった。

第 7 章は第 1 章から第 6 章の総括である。確かに体験現象を教材とした自己探究ランニング学習に意義や可能性が見出された。また人間教育・自己教育との接点も多く、具体案以前の「観点」を提出することはできた。しかし、中学 3 年生以外での実践、地域における実践、指導者養成、教育環境の整備に関しては課題に残った。さらには本実践そのものよりも「体験現象の扱いに関する汎用化」という点が最大の課題となった。

博士論文執筆体験談

(二見 隆亮 学籍：静岡大学)

1. 博士論文研究の背景(体育講師と塾講師)

修士課程修了以降、体育講師及び塾講師として教育に携わっていました。いずれにおいても子どもたちの人間性というものに意識が引かれながら、ひたすら“一緒に走る”ということをしていました。その中で「生き方としての走り方」というものについて思考をめぐらせる機会が増え、博士課程への挑戦を決めました。

2. 学術論文は学術論文(テーマは小さく?)

当初掲げていた「生き方」というフレーズは大海原でしかなく、どれだけあがいても着地点を定められずにいました。「生き方」と関連しないものは教育現場にはなく、進めては破綻をくり返していました。身の回りには文献が積みあがっていくばかりで、方向性がクリアにならないばかりか投稿論文も通らない。おままごのような似非研究生活が続きました。

3. 投稿論文との闘い(一艘の助け舟)

その間、杉山康司先生から助言を頂きます。それは「歩くことも見てみれば」というもの。早速動いてしてみると、僅かに頭の中が解きほぐされ、浮かんだアイデアを基に5年目にして初めて論文掲載が叶いました。では2本目を、と走り出したものと同じように悶々とした徘徊の繰り返しです。結局、提出要件が揃ったのは入学から8年を超えてからでした。

4. 諦めるという攻守(初学者の目は節穴)

実践の案には小学生を考えていたものの、村越真先生からは「厳しいでしょう」と頂きます。その後、大学生、中学生を対象とした実践機会を頂き、架橋を目指しながら実践に勤めました。同じようにそれらの論文化の際も、のた打ち回りながらの闘いとなりましたが、集まったデータを手の届く手法を用いてなんとかまとめあげ、ずいぶん強引な形で事前審査提出、不足を補いながら本審査提出、苦し紛れの最終試験を終え、「可」を頂きました。

5. 「人格の完成」という北極星(教育者として何が出来るか)

安堵はあったものの、初心には遠く及ばず、不甲斐ない思いのまま学位記を頂き、完成稿を提出し、消化不良の投稿論文との奮闘継続という取得後1か月の現在です。研究の体質上、「人格の完成」という教育の目的が常々に気になっています。本当に全ての(学校)教育活動がこの目的につながっているのだろうか、何を持って達成といえるのだろうか、ただのスローガンなのだろうか等々、気になって気になって気になりながら自身の「生き方」について思いを巡らせています。もう一度「生き方」というフレーズからこれからの教育研究・教育学研究について見つめ直し、博士論文以上の“何か”を後世に遺せるよう教育活動に尽力したいと思います。

受験から数えたおよそ10年間、有意義な期間を本当にありがとうございました。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学

氏名： 中山敬司

論文題目：静岡県における融和運動史研究と部落史を活用した部落問題学習の教材開発
—井上良一の事例—

論文要旨：

本研究の第一の目的は、静岡県小笠地域を中心に融和運動家として活動した独自性を持った井上良一（以下、井上）の部落解放運動の視点から、部落差別問題および部落解放運動の変遷を紐解くことである。また、第二の目的は、井上の活動をもとに、静岡県の部落史に関する教材開発を行うことである。

静岡県では、被差別部落問題に関しては、他県と同様に「寝た子を起こすな」意識がみられる。しかし、部落差別は、表面化することはあまりないが、未だに根強く存在し、根本的な解決には至っていない。現在のこのような状況を看過せず、向き合う方法を探るべきと考えたのが本研究の動機となっている。

井上が推進した融和運動とは、大正期から昭和前期にかけて、部落の改善とともに社会との融和の実現を掲げて官民合同で進められた運動である。その特徴は、部落差別の原因を被差別部落側ではなく、社会一般の側に求めたことである。井上は融和運動家ではあるが、敵対関係にある水平運動家との関係も持ちながら解放運動を展開した。井上は両運動の長所を活かしながら、県下で融和運動を牽引した。

本研究では、井上が生まれ育った被差別部落（以下、A区）が位置していた小笠郡南山村（現菊川市）に保管されている自治体文書等を紐解きつつ、井上家の所蔵文書をもとに井上の行動や思想を調査した。教材開発としては、井上の生い立ちや融和運動、満州移民をテーマとした授業を実践した。

第1部では、井上の部落解放に向けた活動を中心に、以下の3点について論じた。

1つめは、1910年代から井上に取り組んだ部落改善運動である。特にA区の改善事業として実施された隧道工事建設は、周囲の反対がある中、A区の被差別部落民が主体的に取り組んだこともあり、完遂させることができた。この改善事業は、井上の後の融和運動へとつながっていった。

2つめは、A区で始まった改善運動を発端として、静岡県全体に融和運動が広がる動きについて述べた。井上はA区をはじめ小笠郡内で繋がりを持った仲間とともに改善運動を拡大させた。また静岡県社会課とも連携を図り、官民あがての融和運動を推進した。融和運

動と敵対関係にある水平社が静岡県にも設立されたが、井上は、「地域」の特性を踏まえ、融和運動に軸足を置きつつも、状況に応じて水平運動の考え方も取り入れながら独自の運動を展開した。

3つめは、融和政策の一つ「資源調整事業」について述べた。資源調整事業とは、戦争に必要な産業への転業を促し、満州移民を推進する事業である。特に静岡県民の満州移民の推進に関しては、井上が移民推進役という大きな役割を担うこととなった。公表された井上の文書には、井上が移民を推奨していたことが示されている。しかし、井上家所蔵文書からは、表向きは推奨していたものの、実は井上自身、移民には懐疑的な面をもち、移民をさせてよいものかと悩んでいた。

第2部では、井上の研究に基づく授業を実践し、その指導内容や実践後の効果等について述べた。

教材開発については、まず、現在における部落問題の実態及び部落に対する静岡県民の意識を確認した。また、授業は以下の2つの方法で実践した。

① 井上のライフ・ヒストリーの中で重要な局面及び、被差別部落のありようを提示し、井上の行動を通して部落問題を思考させた。

② 筆者が事前に被差別部落出身者から聞き取りおよび事前打ち合わせを行ったうえで、授業において「オーラル・ヒストリー」学習を実施した。

①については、部落改善運動の中でも特に困難であった隧道工事事業に関して、井上が直接的及び間接的に差別を受けていた状況を生徒に提示し、井上の心情を思考させた。また、満州移民についても、井上の史料から、当時の井上の心情を読み取らせた。

②については、「オーラル・ヒストリー」の手法を用いた授業を実施した。二人の被差別部落出身者（笠原正男・本間肥土美）の話を高校生と大学生に聞かせ、それぞれ文章化をさせることで、個人史から全体史へとつないでいった。流れとしては、生徒たちに授業において聞き取った話を整理する「聞き書き」の作業を通して歴史叙述をさせた。その結果、生徒の被差別部落への認識が変容していったことが確認された。

静岡県においては、被差別部落は「ないもの」として扱い、「寝た子を起こすな」という意識を持っている県民も一定数みられる。しかし一方で、差別事象は依然として水面下で続いており、被差別部落に生きる人びとは今も我慢を強いられている。筆者は、教員という立場から、未来を担う生徒たちには、そのような状況も含めて正しい知識、良識を身につけさせる必要があると考える。その意味で、静岡県の被差別部落に生まれ育ち、部落解放運動を牽引した井上良一の活動を題材とした授業を実践することは、生徒が身近に感じることができるという意味でも、有益な教材になりうると考える。

博士論文執筆体験談

(中山敬司 学籍：静岡大学)

1 研究の狙いについて

入学前、高等学校に勤務し、歴史教育実践を重ねていた時に「教科開発学」という聞きなれない学問に接した。現場にいて生徒の生活や、地域の実態及び多くの教育的諸課題に向き合っていく時に自身の専門性を「教科開発学」を通して生かしていけるのではと、共鳴した点を覚えている。入学後に教科学として歴史学そして近代部落史と「教科開発学」をどう関連付けるかが難しい課題となり、「教科開発学」とは何かを最後まで自問自答せねばならなくなった。

私の博士論文は、「静岡県における融和運動史研究と被差別部落史を活用した部落問題学習の教材開発—井上良一の事例—」である。静岡県においても今なお被差別部落が存在し、差別が執拗に繰り返される現実を解消するためには地域の被差別部落史を解明すること、そしてその成果を生徒に向けて発信することであると考えてきた。自身の研究の中心は、地域に生きた井上良一という融和運動家の活動を明らかにすることであり、井上家の協力の下、井上家の所蔵文書、地域に残る融和運動関係の史料などを掘り起こしてきた。井上の研究を深化することの意味を教科開発学セミナーのⅠ～Ⅲを通していただいた意見から思考したこと、そして指導教員の黒川先生を交えてのゼミから学んだことの意義は大きく、今後の方向性を決めていけたことと感じている。

2 論文執筆の過程

私自身、現職の高等学校の教員であるため、そうした点も考慮してどう論文に向けて取り組んだかを述べてみたい。入学時での勤務校では私自身の年齢の高さもあり、かつ大規模校であるため、土日の部活指導がないに等しかったため、土日は有効に活用できたことが大きかった。まずは博論の核になる歴史学の査読論文を書くことが大きな壁となった。先行研究、史料集め、そして文章の執筆と最初の3年間は時間を費やした。先生の指導、査読審査でのやり直しでは「もうだめだ」と思うことしきりであったが、やはり時間をかけて考えなおすことが良かった。内容のみならず、文章の下手さはいかんともしがたく、周囲の同僚の教員にみてもらったことも多々あった。博論をまとめていこうと考えたのは5年目の初頭であり、査読論文をもとに仕上げていく作業の大変さは筆舌に尽くしがたい。仕事を抱えながら、時に土日仕事が多い時期もあったため、年間を通していつ時間がとれるかを考えて研究及びまとめ作業を行うこととした。集中して時間がとれるのは夏休みなどの長期休暇であり、いかに無駄をなくしていくことを第一とした。新型コロナウイルス感染症にも注意して、いかに健康を保つかを考えて時間を確保したのである。

今後は、本研究をもとに井上の研究を深めつつ、地域を意識した被差別部落史を深めていく所存である。今、出発点になったと改めて感じている。

最後に、黒川先生をはじめとする静岡大学及び愛知教育大学の多くの先生方に感謝申し上げると同時に大学の職員の皆様にもお礼を述べたいと思います。

VI. 教員の教育・研究活動

石川 恭



所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 遊び文化論、遊びと学び、ホイジンガの思想研究

1. これまでの教育研究について

ヨハン・ホイジンガの遊び文化論を現代社会との関りから、人生 100 年時代をよりよく生きるために、遊びと学びの関係について研究してきました。特に、今日の遊びが、子どもに及ぼす影響について焦点を当てて取り組んできました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの重要性です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの形態や内容はどのように変化したのか、それが人々にどのような影響を与えているのかといった観点です。そして、遊びこそが学びであることを主張してきました。

教育面では、授業を通して、人生 100 年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、自由時間と生きがいといった点から講義・演習を行ってきました。自由時間が増えている中で、どのような遊びが人々の生きがいと学びにつながるかを説いています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問としての背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発・創造への可能性について検討します。

【遊び文化環境論研究】

現代社会における子どもの遊びは、過去と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

4. 主要研究業績

- 1) 教科学を創る, 第 1 集, 愛知教育大学出版会, 2014, 分担執筆。
- 2) 教科学を創る, 第 2 集, 愛知教育大学出版会, 2016, 分担執筆。
- 3) 子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動, 教科開発学論集第 1 号, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科, 2013. 3。
- 4) 教科開発学を創る, 第 2 集, 愛知教育大学出版会, 2018, 分担執筆。
- 5) 教科開発学を創る, 第 3 集, 愛知教育大学出版会, 2021, 分担執筆。

5. 主な社会的活動

- 1) 安城市スポーツ指導者養成講習会講師 (2021)
- 2) 安城市スポーツ推進審議会委員 (2021)
- 3) 豊明市スポーツ推進審議会会長 (2021)

野平 慎二

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、教育哲学・思想論研究、
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ ドイツ教育哲学・教育思想史の研究、物語論の人間形成論、
美の人間形成論



1. これまでの教育研究について

ドイツ教育哲学・教育思想史を主たるフィールドとしつつ、異質な他者といかに共存できるのか／共存できる主体を形成できるのか、をテーマとして研究を進めてきました。具体的には、人間形成における「美的なもの／崇高なもの」の意義に関する教育思想史の研究、コミュニケーション倫理学（J.ハーバーマース）に依拠した教育の公共性論や道徳教育論などの研究を行ってきました。

2. 博士課程における教育研究について

物語論の知見に依拠しながら、伝統的な人間形成論（Bildungstheorie）と現代の経験的な人間形成研究（Bildungsforschung）をどのように媒介できるのかについて探究しています。特に、アイデンティティ形成や能力形成に還元されない人間形成の様相をいかに描き出せるか、主体と環境との相互作用としての人間形成の過程において、他者や共同体、構想力はどのような機能を果たすのかについて理論的、経験的に検討しています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育哲学・教育思想史の観点から、教科指導と教科開発の考え方、ならびに人間形成にとって環境がもつ意義について検討します。教科を介した指導や、主体と環境との相互作用としての人間形成という考え方が成立した思想史的背景について考察し、同時に学校教育を取り巻く現代的な諸条件も勘案しながら、現代における人間形成のあり方をどのように描き出すことができるのかを探ります。

【教育哲学・思想論研究】

主としてドイツ教育哲学・教育思想史に依拠しながら、教育に対する現代的な考え方の歴史的、社会的な制約を問い直し、教育をめぐる倫理的に公正で公共的な語り方を探究することを目指します。特に近代の二元論的な世界観とそこから導かれる子どもに対する対象操作としての教育観を批判的に捉え直した上で、他者論や物語論の知見を踏まえながら、対象操作的でも弁証法的でもない人間形成の描き方を探ります。

4. 主要な研究業績

- 1) 野平慎二（2007）『ハーバーマースと教育』世織書房。
- 2) 野平慎二（2021）「経験的な語りと人間形成論をつなぐービオグラフィ・インタビューの意味形象の再構成を通じた反省的ー規範的人間形成論の探究」、『愛知教育大学研究報告 教育科学編』70、59-67頁。
- 3) Shinji Nobira/Kayo Fujii（2022）: Familienkonflikt, religiöse Beratung und Transformation: Bildung als Bekehrung. In: Thorsten Fuchs/Christine Demmer/Christine Wiezorek (Hrsg.): Aufbrüche, Umbrüche, Abbrüche: Wegmarken qualitativer Bildungs- und Biographieforschung. Opladen/ Berlin/Toronto (Verlag Barbara Budrich), S.317-333.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 教育哲学会 理事（2016.9.～現在）機関誌編集委員会委員長（2021.9.～2023.10.）
- 2) 教育思想史学会 理事（2009.10.～現在）
- 3) 一般社団法人 NGO インドネシア教育振興会 理事（2002.4.～現在）
- 4) 愛知県教育委員会あいちの学び推進課 家庭教育企画委員会 委員長（2016.4.～現在）

石田 靖彦



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 教授 博士（心理学）
博士課程分野 教育環境学分野
担当科目 教育評価実証方法論，学校適応論研究，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 児童生徒の学校への適応過程，学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響

1. これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生の友人関係の親密化や学校への適応過程について研究してきました。児童生徒間関係，学校適応，社会性の育成などに興味があります。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論，学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は，教育・社会心理学ですので，特定の教科に直接があるわけではありませんが，皆さんの研究を聞かせていただきながら，教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論（分担）】

この授業のわたしの担当部分では，受講生の研究を紹介してもらい，それに基づいてデータの収集法，相関的研究と実験的研究法，尺度の信頼性と妥当性などについて考えます。

【学校適応論研究】

学校への適応について，専門書や研究論文を購読し，受講生の研究や教育への応用などについて考えます。

4. 主要な研究業績（2020.4 ～）

- 1) 友人の学習意欲と授業での取り組みが生徒の学習意欲と授業での取り組みに及ぼす影響—友人に対する感情と学習コンピテンスの調整効果の検討— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），73，1-19. 2024年
- 2) 教師の学級指導行動と児童の自己成長感との関連—基本的心理欲求の充足と変化に着目した検討— 教科開発学を創る—第5集— pp. 30-45.
- 3) 自己肯定感と失敗観，失敗に対する対処行動との関連 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，13，.1-8.
- 4) 知的障害特別支援学校の養護教諭が職務上抱える困難の原因に関する研究 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，13，34-41.（共著）
- 5) 中学1年生の定期テストが学業コンピテンスと学業動機づけに及ぼす影響—目標点との比較と平均点との比較— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），72，26-33.
- 6) 養護教諭が職務上抱える困難に関する文献検討 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，7，183-190.（共著）
- 7) 家族機能の認知が内在化・外在化問題に及ぼす影響—許し傾向性を媒介変数として 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，7，199.205.（共著）
- 8) 親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属・グループの特徴に及ぼす影響 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，10，10-19. 2020年（共著）
- 9) 小学校教師が重視する児童の特徴—教師の性格特性との関連と教員養成大学生との比較 愛知教育大学研報告（教育科学編），69，93-98. 2020年（共著）

5. 主要な社会活動業績（2020 ～）

- 1) 日本学校心理士会愛知支部支部長（2011-現在），中部甲信越地区幹事（2011-2023）
- 2) 愛知県教育職員免許法認定講習講師（2023）
- 4) 愛知教育大学公開講座講師（2023）

竹川 慎哉

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 准教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学実践論 教育方法・内容論研究
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ 教育方法学、教育課程論（特に、カリキュラムの政治学的研究、批判的リテラシー教育、授業づくり）



1. これまでの教育研究について

国内外の授業実践、理論を対象にしながら、学習者が自己と他者、社会との関係を（再）構築していく学びを保障するための授業づくりについて研究しています。特にアメリカ、オーストラリア、カナダで実践されている批判的リテラシー教育に注目しています。批判的＝異なる見方、別の見方を探り出す教授＝学習をどう創り出すかに関心があります。

2. 博士課程における教育研究について

教科内容研究、および教材・発問づくりへのポリティカルな視点の可能性と課題を検討しています。対話論、身体論、政治哲学と教科内容論、教材論、指導論との接点を探りつつ、公正、平等、多様性、ポリティクスなどをキーワードに、授業づくりの現状と課題を考えていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

本科目では、各受講者のこれまでの研究を教科開発学の視点から再構成した発表と受講者・教員によるディスカッションを通して、教育事象を理論的検討課題として構想する方法論等を学ぶ。私の専門である教育方法学、教育課程論の観点から、教育実践の理論的研究と教育学理論の実践的研究の往還を提示していきます。

【教育方法・内容論研究】

教育実践におけるマクロとミクロのポリティクスを捉える理論枠組みを理解していきます。いわゆる「カリキュラム政治学」と呼ばれる研究群およびそれらの思想的基盤を形成している哲学、言語学、社会学の諸理論を取り上げ、検討します。その上で、授業における政治性の編み直し＝公正・平等な授業構造について、実践記録などをもとに検討を進めていきます。

4. 主要な研究業績

- 1) 竹川慎哉 (2023) 『教科横断』のポリティクス」愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第4集』愛知教育大学出版会、pp. 8-26。
- 2) Yuya Takeda & Shinya Takekawa (2021). Critical Literacy in Japan: Reclaiming Subjectivity in the Critical. In Pandya, J. Z., Mora, R. A., Alford, J., Golden, N. A. & de Roock, R. S. (Eds.). *The Critical Literacies Handbook*. Routledge.
- 3) 竹川慎哉・木村裕 (2020) 「カリキュラムと教育評価」青木麻衣子・佐藤博志編著『オーストラリア・ニュージーランドの教育〔第三版〕-グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて-』東信堂。
- 4) 木村裕・竹川慎哉編著 (2019) 『子どもの幸せを実現する学力と学校』学事出版。
- 4) 竹川慎哉 (2019) 「教育課程とカリキュラム」、吉田武男監修・根津朋実編著『MINERVA はじめて学ぶ教職 10 教育課程』、ミネルヴァ書房。
- 5) 竹川慎哉 (2019) 「授業研究と教師の力量形成」、子安潤編『教科と総合の教育方法・技術』、学文社。
- 6) 竹川慎哉 (2010) 『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題—』明石書店。

5. 主要な社会活動業績

- 1) 2015-2018 The Curriculum Journal, Editorial Board member
- 2) 2018- 名古屋市立向陽高校 スーパー・サイエンス・スクール 運営指導委員
- 3) 2020- 愛知県総合教育センター「新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究」研究顧問など

鈴木裕子

所属 愛知教育大学 幼児教育講座
職位・学位 教授 博士(学校教育学)
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育評価実証方法論 幼児教育・保育内容論研究 教科開発学セミナー
研究テーマ 保育内容論 身体教育学 身体表現論



1. これまでの教育研究について

保育内容論、特に幼児期の身体表現・身体活動を主たるフィールドとして、子どものこころとからだの相互作用をテーマとした研究を続けてきました。具体的には、幼児間のコミュニケーションとしての模倣、幼児の感性、乳幼児の身体活動性増強の方略、運動による心理社会的効果としての「遊び込む」概念の追求や環境構築、そして現在は、幼少期のからだを動かす遊びにおける非認知能力の可視化を目指した研究に取り組んでいます。

2. 博士課程における教育研究について

幼児教育・保育の世界には「教科」はありません。「教科」に相当するのは「領域」ですが、子どもたちの一つの活動、特に「遊び」の中では、様々な領域が重なり合い「保育内容」として存在しています。ですから「教科開発学」に相当するのは「幼児教育・保育内容実践開発学」といえるかもしれません。「幼児教育・保育内容実践開発学」では、幼児教育・保育に関わる多様な実践や諸課題の改善・改革に貢献することのできる高度な研究指導能力を有する実践者及び実践に根ざした研究者を育成し、その成果として博士論文を発信することを目指したいと考えます。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論】

実践的研究者と研究的実践者の立場から、対象を理解し分析評価する方法、それを研究として昇華させるための研究方法を扱います。受講者の研究背景や状況に応じて、研究構想に寄与できるような高度研究手法としての定量的（量的）な研究方法、定性的（質的）な研究方法、混合研究方法などの中からいくつかの具体的な方法を取り上げます。

【幼児教育・保育内容論研究】

本授業では、幼児教育、保育の実践、またその類縁の学校教育や子育て支援、家庭の養育等をめぐる最近の研究知見を学び、研究動向を把握します。また保育内容・保育実践における様々な事象の中から問いを立てて検討し、諸現象を実証的に分析する方法、結果を説得的に提示していくための論理等、論文作成に関わる研究営為を扱います。幼児教育・保育分野を直接に扱う受講者に対しては、各人の研究主題に関連する研究のレビューをしながら、今後の研究への示唆等が得られるようにしたいと考えます。

4. 主要な研究業績

- 1) 鈴木裕子 (2021) 幼少期におけるからだを動かす遊び経験と非認知能力の関連性, 幼児教育研究, 第21号, 27-36
- 2) Yuko Suzuki (2020) The Effect of Physical Play Experiences on Early Childhood Non-cognitive Skills Development, Journal of Education and Development, Volume 4, No 3, 54-72
- 3) Yuko Suzuki (2019) Characteristics of Physical Expression Activities Among Young Children – How Physical Contact Influences the Body and Expression –, Journal of Modern Education Review, Volume 9, No2, 109-123
- 4) Yuko Suzuki・Hideki Suzuki (2017) Psychosocial Effects of Physical Play in Early Childhood, Journal of Modern Education Review, Volume 7, No12, 894-906
- 5) 鈴木裕子 (2017) 幼児の「遊び込める」姿に含まれる要素の検討, こども環境学研究, 第12巻, 第2号, 54-62
- 6) 鈴木裕子 (2016) 保育における幼児間の身体による模倣, 風間書房

5. 主要な社会的活動業績 (2023.3)

- 1) 日本保育学会 評議員
- 2) 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 専門委員
- 3) 日本教育大学協会幼児教育部門代表
- 4) 愛知県豊明市子ども・子育て会議委員長
- 5) 愛知県蒲郡市子ども・子育て会議委員

野崎 浩成



所属 愛知教育大学
職位・学位 博士（工学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教授学習論研究
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ コンピュータと教育、教育工学、認知科学

1. これまでの教育研究について

これまでに取り組んできた教育研究のメインテーマは、「コンピュータを活用した学習支援」です。具体的なキーワードは、「eラーニング」、「学習環境の構築」、「学術論文執筆支援」、「第二言語習得」、「日本語コーパスを活用した言語学習支援」、「文章理解」、「教育におけるメディアの利活用」などです。特に、研究面では、科学研究費補助金の助成を受けて研究を進めています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程では、学習環境の構築や教材開発の実践を理論的に分析し、その理論を学校教育に活かすことを目的として教育研究に取り組んでいます。すなわち、実践と理論の往還を通じて、学習環境の諸課題を解決し、教授・学習を改善する方法を探究します。

3. 担当講義について

担当する講義「教授学習論研究」では、認知科学的な観点に立って、「教授・学習」に関わる理論について学習します。すなわち、「学び」を科学的に分析するための研究手法の習得を目指します。さらに、教授・学習に関連する研究論文や学術書などを輪読することを通じて、ICT等を活用した教育環境の改善について考察します。

4. 主要な研究業績

- [1] 野崎浩成，横山詔一，磯本征雄，米田純子（1996）文字使用に関する計量的研究：日本語教育支援の観点から，日本教育工学雑誌，Vol. 20, No. 3, 141-149（日本教育工学会 1997 年学会論文賞受賞）
- [2] 野崎浩成，市川伸一（1997）漢字学習支援システムの開発：漢字の構造理解と筋運動感覚の獲得，日本教育工学雑誌，Vol. 21, No. 1, 25-35
- [3] 野崎浩成，清水康敬（2000）新聞における漢字頻度特性の分析と NIE のための漢字学習表の開発，日本教育工学雑誌，Vol. 24, No. 2, 121-132

5. 主要な社会活動業績

教育システム情報学会 東海支部役員/研究会委員会
日本リメディアル教育学会 学会誌編集委員

梅田 恭子

所属 愛知教育大学 教育学部 情報教育講座
職位・学位 教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学分野
担当科目 教科開発学原論、ICT 教育研究
研究テーマ 教育工学、情報教育



1. これまでの教育研究について

教育工学の視点にたち、人の学びに関する理論的な知見を基に教育実践研究を行っています。具体的な内容としては主体的・対話的で深い学びを支援するために ICT を活用し、効果的・効率的な授業設計に関する研究や、問題解決・探求における情報活用、情報モラル、小学校プログラミングなど、子どもたちの情報活用能力の育成に関する研究、高等学校教科「情報」に関する研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育実践の結果を人の学びに関する科学的な知見から捉えることと、それらの理論から授業を設計し実践するということを往還し、経験豊かな教員の主に授業における暗黙知を形式知化する研究を試みたいと思っています。

3. 担当講義について

「教科開発学原論」では、教育の情報化の背景を概観し、なぜ ICT 活用が必要なのか、主体的・対話的で深い学びとの関連性などを検討したうえで、2020 年代を通じて実現すべき令和の日本型学校教育の姿について探ります。また、情報活用能力とは何かについて、教育の情報化における位置づけ、構成要素、資質・能力との対応の観点から捉えます。「ICT 教育研究」では、学習観や指導観の転換に基づいた ICT を活用した授業デザインについてインストラクショナル・デザイン理論から捉えます。また優れた実践研究や教育実践例を基にどのような授業設計の方法があるのかを検討します。

4. 主要な研究業績

- 林一真・梅田恭子(2021) 1人1台のタブレット端末を活用した情報活用能力を育成する授業設計の留意点の提案, 日本教育工学会論文誌 44(4), 497-511
- 梅田恭子・齋藤ひとみ編著(2019) ICT 活用指導力アップ 教育の情報化 教員になるための情報教育入門, 実教出版
- Hitomi SAITO and Kyoko UMEDA (2019) The Development of Teaching Skills Using ICT in Teacher Training: Practices in First-Year Introduction for ICT, Proceedings of the 2019 3rd International Conference on Education and Multimedia Technology, 120-125

5. 主な社会活動業績

- 文部科学省 学校戦略 DX アドバイザー (2023 年度)
- 愛知県教育委員会 愛知県義務教育問題研究協議会 委員 (2020-2022 年度)
- 愛知県総合教育センター 情報教育の充実に関する研究(ICT 授業活用に関する研究) 顧問 (2021 年度～)

野 地 恒 有



所属 愛知教育大学
職位・学位 理事（教育・学生担当）・副学長・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 セミナーⅠ～Ⅲ
研究テーマ 日本民俗文化論、歴史民俗博物館論

1. これまでの教育・研究について

日本の文化や歴史を民俗学という分野から研究しています。主なテーマは日本の海洋文化論・都市文化論です。具体的には、近代以降に開拓・形成された集落（移住開拓島）の生活体系に関する研究や、金魚、菊、朝顔など都市で形成された観賞用動植物の飼育栽培文化に関する研究を進めています。

2. 博士課程における教育・研究について

教科開発学とは、基礎科学の成果を基軸としてその成果を社会的に還元させるための開発を図る応用科学の一つであり、基礎研究の成果を学校教育へ応用化するための開発を研究対象としてその体系化や理論化をめざすものである、と私は考えています。そして、基礎研究として民俗学の成果をふまえた教育・研究では、民俗学を学校教育（とくに社会科歴史的分野）の場面に応用した教材あるいは教材論の領域を「同時代生活誌」という形で提示することをめざしています。同時代生活誌は、現在の地域社会に内在する歴史や伝統を描き出すことにより地域の生活や生活に根ざした文化をとらえ、地域社会の未来を構想する内容構成になるとともに、基礎科学の民俗学研究にもインパクトを与えうるものと考えています（「教科開発学と大学教育の一貫性—民俗学＝同時代生活誌を基軸として—」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会[2018]参照）。

また、セミナーⅠ～Ⅲの授業では、博士論文に向けて、教科開発学の構築について考えるとともに、実践をふまえたオリジナリティのある研究について、自立的な研究の進め方や博士論文の書き方について、受講者が理解を深め、身につけられることを目標としています。

3. 担当講義について

4. 最近の研究業績

1) 「海洋性とゆるやかな定住社会～紀州文化への視座～」『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流』和歌山県立紀伊風土記の丘（2021）

2) 「バック・トゥ・ザ・現在～同時代生活史としての民俗学～」『未来の社会を共に創る社会科授業 叢書「教職の魅力共創」（教科領域編）②』愛知教育大学出版会（2022）

5. 主要な社会活動業績

1) 愛知教育大学地域連携公開講座や市町村の市民大学講座などの講師：「暮らしの中の民俗学」・「松本清張から見た民俗学—「或る『小倉日記』伝」を題材として—」など

2) 岡崎市美術博物館博物資料収集委員会委員（2006～2020）、名古屋市博物館資料委員会委員（2013～）、鳥取県立博物館協議会委員（2014～2022）

伊藤 貴 啓



所属 愛知教育大学教育学部地域社会システム講座
職位・学位 教授 博士(理学)
博士課程分野 人文社会科学系教科学
担当科目 地理学教材研究論, 文化資源活用論, 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 農業地域の自立的発展とその条件, ヨーロッパ国境地域の空間変動,
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発(社会科地域学習および
防災教育)
社会科の教科内容と教科専門と教科教育の架橋に関する研究

1. これまでの教育研究について

教科専門では、地理学担当教員の任にあります。専門の農業地理学では、野菜産地から日本農業の変化を追うとともに、農業地理学の学史的的分析に関心があります。EUの国境地域や農村地域の研究では、オランダへの関心を持ち続けています。このような教科専門としての地理学をベースに、教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探り、とりわけ、本博士課程の教科開発学に関わって、教科専門と教科教育の架橋における教科専門の意味と両者の連携による社会科教員の力量形成に関心があります。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では、地理学教材研究論ほかを担当しています。研究面では、自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科専門と教科教育の架橋に関わる方途を探りながら教科専門のおもしろさを伝えつつ、いかに教員としての実践的指導力を高められるのかを先達に学びながら考えるとともに、社会科教育研究者とやりとりしながら社会科の教科専門の意味や教科内容について研究しています。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】文化資源としての地域資源について、そのとらえ方と地域形成・振興との関わりをルーマニア山村と日本におけるフードツーリズム、ルーラルツーリズムに事例を求めてみるとともに、そこから教科内容としての社会科との関わりを考えています。

【地理学教材研究論】本講義では地理学における野外調査の技法を座学とフィールドでの観察などから理解することで①「地域」を覗く目を養い、②社会科の内容である地域社会の事象をフィールドで理解し、その仕組みを解き明かしうる能力とともに、③それらを構造的に把握して教材を開発する資質能力の育成を目的としています。

4. 研究業績(2022・23年度)

- 1) 「地域」と「地域」の見方・とらえ方(pp.71~81)。「自然災害から人々を守る活動」の教材化(三河地震)(pp.124~133), コラム7「発問はまず Why よりも How で」(p.81), コラム8「地域の構造図を描くには」(p.82), コラム9「地理院地図と国土地理院をもっと利用しよう」(p.97). 伊藤裕康 編『社会科教育のリバイバルへの途—社会への扉を拓く「地域」教材開発—』学術図書出版社, 2022年4月
- 2) 高知県芸西村における総合的病害虫管理(IPM)の普及と野菜産地の自立的発展. 地理学報告 124, pp.81~106, 2022年12月
- 3) 教師教育(教員養成)における教科教育と教科専門との対話(1)—社会科地理の観点から教科専門の意味を問う, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第4集』愛知教育大学出版会, pp. 71~98, 2023年1月
- 4) 教師教育(教員養成)における教科教育と教科専門との対話(2)—教科専門地理学の観点からみた社会科教員の養成—, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第5集』愛知教育大学出版会, pp. 85~116, 2024年3月

5. 主要な社会活動業績(2023年度)

- 1) 経済地理学会中部支部長
- 2) 社会科副読本監修 知立市・安城市・岡崎市・高浜市・幸田町
- 3) 豊田市史編さん執筆協力委員

中野 真志

所属 愛知教育大学生生活科教育講座
職位・学位 教授・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科
担当科目 教科開発学原論、生活科教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ ジョン・デューイの教育理論、生活科及び総合的な学習の理論と実践



1. これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育を研究していましたが、日本において生活科が新設されて以降、その研究対象を生活科、後に総合的な学習に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法学及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習及び社会科の理論と実践について研究してきました。これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育理論、特にデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践を研究しています。また、近年、生活科及び総合的な学習における社会情動的コンピテンシーの研究にも関心をもっています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもとになる親学問が存在しない生活科及び総合的な学習を教えるのに必要な資質・能力とは何か、生活科と総合的な学習における体験と活動をどのように単元構想に位置づけ、それらを知識、技能の習得と活用及び態度の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習における素材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学および授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とは何かについてともに考えたいと思います。

3. 担当講義について

【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と諸要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の特質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、単元構想、年間指導計画の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

4. 主要な研究業績 (2019.4 ～)

- 1) 「L. G. カッツ(Katz)と S. C. チャード(Chard)のプロジェクト・アプローチコンピテンシー・ベースのカリキュラムにおける生活科への示唆」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第9号、2024年、pp. 165-1174
- 2) 『資質・能力時代の生活科—知性と社会性と情動のパースペクティブ—』三恵社（西野雄一郎との共編著）、2023年3月
- 3) 『資質・能力時代の総合的な学習の時間—知性と社会性と情動のパースペクティブ—』三恵社（加藤智との共編著）、2023年3月
- 4) 「アメリカにおける社会性と情動の学習(SEL)—「学術的、社会的、情動的な学習の協働」(CASEL)を中心に—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第7号、2022年、pp. 159-166
- 5) 「ジョン・デューイの『子どもとカリキュラム』」『教科開発学を創る』第3集（愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編、2021年3月、pp. 111-131）
- 6) 「『民主主義と教育』における経験とリフレクション—探究・体験型学習の理論的基底—」（日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造—デューイ研究の未来へ—』、勁草書房、2020年、pp. 188-196）
- 7) 「幼小の接続と生活科」（朝倉淳・永田忠道共編著『新しい生活科教育の創造—体験を通じた資質・能力の育成—』、学術図書出版社、2019年、pp. 53-64）

5. 主要な社会活動業績 (2024年4月)

- 1) 日本生活科・総合的な学習教育学会 常任理事（2002年度～現在）、副会長（2020年度～現在）
- 2) 日本デューイ学会 理事（2022年9月～現在）
- 3) 愛知県教育センター中堅教諭等資質向上研修（小学校生活科）講師（2004年度～現在）

丹 藤 博 文

所属 愛知教育大学教育学部国語教育講座
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 文化資源活用論, 国語科教育教材論研究, 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 文学教育・物語研究（語り分析）



1. これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論, 記号論や構造主義による文学理論をベースとして, あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえつつ, 国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は, 物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで, 語りを日本の文学教育に導入すべく指導課程を提案し実践的な有効性を検討しています。

2. 博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ, 子どもたちにもスマホが普及する中で, 子どものリテラシーをどう育てていくか, 文学的なテキストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。すでに学校においては, デジタル教科書が導入されていますが, メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

言語論・物語論について概説し, 物語分析の手法を紹介します。そのうえで, 小・中学校国語教科書に掲載される文学教材を分析し読みを問題としていきます。受講者にも, 自分で物語分析を演習してもらいます。

【国語科教育教材論研究】

戦後の文学教育の展開をたどることで, その成果と課題を明らかにします。戦後の文学教育を概観し, 20 世紀の言語論・文学理論を参照しつつ, 文学教育の在り方について考察します。そのうえで, 小・中・高校の国語教科書における文学教材・説明文教材の読み直しを図り, 教材価値について検討します。

4. 主要な研究業績（2021 年～、単著は 1995 年～）

1) 著書

〈単著〉『教室の中の読者たち』（学芸図書 1995）, 『他者の言葉』（学芸図書 2001）, 『文学教育の転回』（教育出版 2014）, 『ナラティブ・リテラシー—読書行為としての語り—』（溪水社 2018）, 『文学教育における読書行為の研究』（ひつじ書房 2024）
〈共著〉全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望 Ⅲ』（溪水社 2022）, 『これからの国語教育はどうあるべきか』（東洋館出版 2024）, 『教科開発学を創る 第 5 集』（愛知教育大学出版会 2024）

2) 論文

「文学教育再考のための覚書—読書行為の視座から—」『国語国文学報』（第 79 集 2021. 3）, 「国語教育 VS 国語教育」『日本文学』（No. 820 2021. 10）, 「語りの行方—「一つの花」（今西祐行）の場合—」『国語国文学報』（第 80 集 2022. 3）, 「巻頭言 深く読むために方法を教える」『月刊国語教育研究』（No. 606 2022. 10）, 「物語に耳をすませば—読みにおけるオノマトペの扱い—」『月刊国語教育研究』（No. 608 2022. 12）, 「語りと行為—『モチモチの木』（斎藤隆介）の場合—」『ランガージュ』（創刊号 2023. 3）, 「国語教育におけるファンタジーの受容について—「白いぼうし」を例として—」『あまんきみこ研究会 会報』（第 3 号 2023. 3）, 「文学教育行為論のために—生成 AI と語り—」『国語国文学報』（第 82 集 2024. 3）

5. 主要な社会活動業績（2023 年）

- 1) 全国大学国語教育学会理事, 日本読書学会理事, ナラティブ・メソッド研究会代表
- 2) 国語教科書編集委員（『ひろがる言葉 小学国語 1 年～6 年』教育出版, 『伝え合う言葉 中学国語 1 年～3 年』教育出版）
- 3) 日本教職員組合教育研究全国集会（日本語教育）共同研究者, 岡崎市教育研究大会共同研究者, 西尾市市教研指導助言者
- 4) 愛知教育大学附属名古屋小学校, 岡崎中学校（国語）共同研究者
- 5) 第 64 回愛知国語教育研究会大会講演, 北名古屋市立五条小学校現職研修講師

田口達也

所属 愛知教育大学教育学部外国語教育講座
職位・学位 教授 PhD in English
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 第二言語教育論研究
研究テーマ 心理学的視点からの第二言語習得、研究方法論、英語教育



1. これまでの研究・教育について

これまで、第二言語習得（特に英語教育）における個人差を中心に研究を行ってきました。中でも、学習方略と学習動機づけ・態度を主たるテーマとしてきました。近年は、非認知能力の視点から、第二言語習得を捉える研究を行っています。また、データの収集や分析の方法の検討も、重要な研究テーマとなっています。以前は量的手法を用いた研究を中心としていましたが、最近では質的手法や混合手法も研究対象としています。教育については、学部では音声教育を含む英語教育全般、教職大学院では異文化理解を担当しています。

2. 博士課程における研究・教育について

どのような教授法を用いても、学習者の学習に対する意欲・動機が言語習得の成否を左右します。この背後には、学習者のアイデンティティやその形成も関わります。そのため、学習意欲・動機づけの研究・教育に、アイデンティティの研究視点を加味することの意義を検討しています。また、研究を行うために研究手法を身に付ける必要もありますので、研究手法（特に言語習得研究に関わる手法）についても扱うことを考えています。

3. 担当講義について

【第二言語教育論研究】

授業での学習時間には限りがあるため、学習者が授業に集中することと授業外で勉強をすることが英語習得には必要不可欠になり、これらの要因に関わる動機づけや学習意欲の研究は重要な意味を持ちます。本授業では、動機づけ・学習意欲に関する理論を概観しますが、それらの理論の実践的方法の検討も行いたいと思います。また、動機づけというと学習者の立場からの研究が容易に思いつきますが、語学教師の側にも勤労意欲等の動機づけが必要であると言えます。そのため、学習者を対象者にした研究だけではなく、教師にとっての動機づけも併せて検討していきます。

4. 主要な研究業績（2017.4～）

- 1) 田口達也 (2018) 「TOEIC、学習時間、そしてやり抜く力—愛知教育大学の事例から—」『教養と教育』第18号、1-9頁.
- 2) Taguchi, T. (2020). Investigating self-control strategies of university students learning English in Japan. In T. Pattison (Ed.), *IATEFL 2019 Liverpool conference selections* (pp. 45-48). IATEFL.
- 3) 建内高昭・田口達也 (2021) 「小学校外国語活動における児童の学習意欲と教室内動機づけ要因の動的関係—2年間の調査から—」『愛知教育大学研究年報. 人文・社会科学編』第70輯、78-82頁.
- 4) Taguchi, T. (2021). Validating a self-control measurement for L2 learning: A factor analysis study. *Studies in Foreign Languages & Literature*, 54, 75-95.

5. 主な社会活動業績

- 1) 教員免許状更新講習「言語教育における非認知的能力の研究動向」(2018.8)
- 2) JALT Journal, System, Routledge Handbook 論文査読委員
- 3) 愛知県立国府高等学校公開授業指導助言 (2021.11)

近藤 裕幸

所属 愛知教育大学教育学部社会科教育講座
職位・学位 教授 博士(学術)
博士課程分野 人文社会科学系教科学
担当科目 文化資源活用論・社会科教育論研究
研究テーマ 明治から第二次世界大戦における地理教育史研究



1. これまでの教育研究について

これまで、第二次世界大戦前の中等教育段階における地理教授を研究してきました。戦前は中等教育段階が複線型でとても複雑であるため、旧制中学校・高等女学校・実業学校などすべてにわたっての地理教授の実態は依然として解明されていません。師範学校も含めて、これらを比較考察することで、その全容を明らかにしたいと思っています。

最近、戦前の地理科や歴史科において、中学校と高等女学校でどのような差が見られるのかを明らかにして、とくに女性について求められていたものが何であったのかを教科書の内容に限定して研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程では、社会科教育論研究を担当しています。専門知識はいうまでもないのですが、その専門性が現場の経験や知識に結びついていることが重要だと思っています。現職の方は専門知識の重要性を、教員経験のない方には現場の知識をお伝えして、理論と実践が往還するような授業を行いたいと思っています。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

社会科(地歴科・公民科)は、おもに地理・歴史・公民的な内容によって構成されています。これらを連携・融合することでどのような授業が生み出されるのかを考え、作りたいと思います。また、社会科だけにとどまらず、他教科との連携・融合によって、教科の枠にとらわれない自由で豊かな授業作りに挑戦します。専門にこだわる博士課程だからこそ、視野を広げる授業にしたいと思います。

【社会科教育論研究】

社会科教育(地歴・公民科)でしばしばとりあげられる本(著作物)を輪読することによって、その本が社会科教育史において、どのような位置づけにあり、どのような教育的価値をもっているのかについて考えていくことを目的とします。また、しっかりとした教材研究の力量を育成するために、その本をもとにして教材開発を行ってまいります。

4. 主要な研究業績(2022年～)

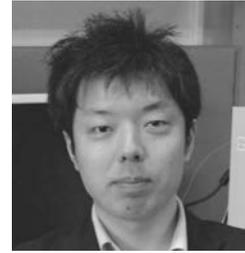
- 1) 近藤裕幸(2022). 明治期から第二次世界大戦期まで(1872-1945年)の日本の中等教育における地理教育制度の変遷-実業学校を中心として-, 人文地理, 74-2.
- 2) 近藤裕幸(2022). 明治期から第二次世界大戦期における高等女学校の東洋史教科書にみられる良妻賢母思想, 探究, 32.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 令和3年度中堅教諭資質向上研修, 講師, 2021.8.19
- 2) 天白高等学校出張授業, 講師, 2021.9.30
- 3) 江南高等学校出張授業, 講師, 2021.11.8

宮村 悠介

所属 愛知教育大学社会科教育講座
職位・学位 准教授 博士（文学）
博士課程分野 人文社会系研究科倫理学専攻
担当科目 倫理教材論研究、文化資源活用論
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 近現代ドイツ倫理学、日本近現代倫理思想史、カント倫理学



1. これまでの教育研究について

倫理学の担当教員として、近現代のドイツおよび日本の倫理学・倫理思想史を研究してきました。人名で言うと、ドイツについてはイマヌエル・カント、マックス・シェーラー、ハンス・ヨナスなどについて主に研究しており、日本については和辻哲郎の倫理学などを取りあげています。こうした思想家を中心とした倫理思想史や倫理学の授業を担当するほか、生命倫理学や環境倫理学といった応用倫理学の卒論指導も担当しています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程では、とくに高等学校公民科「倫理」の教材について考察してきたいと考えていきたいと考えております。何気なく授業で使われている「倫理」の教科書記述にも、それを裏付ける先哲たちの書いた古典的な文章があり、そうした古典と教科書を往復することで、「倫理」の教育にも奥行きをもたらすことができるはずです。講義ではそうした古典と教科書の往復の過程を、ともに体験していただきたいと考えています。

3. 担当講義について

博士課程では倫理教材研究論と文化資源活用論の授業を担当します。倫理教材研究論では、高等学校公民科「倫理」の教科書を手がかりとして、その教科書記述を支えている倫理学の古典的な文章に遡り、そうした原典資料を「倫理」の授業等で教材として活用する方法を考えたいと思っています。取り上げられる範囲はプラトンやアリストテレスといった古代ギリシアから、動物倫理や環境倫理といった現代の応用倫理学にまでわたりますが、どの分野をどれだけ時間をかけて掘り下げるかは、受講者と話し合いながら決めたいと思います。文化資源活用論では、文化資源としての倫理学の古典を、教材として活用する方法について考えたいと思いますが、これも具体的な内容は受講者と相談して決めます。

4. 主要な研究業績

- 1) (共著) 菅野覚明、熊野純彦、山田忠彰編『高等学校 新倫理』清水書院、2023年
- 2) (共著) 菅野覚明、山田忠彰編『用語集 倫理 新版』清水書院、2023年
- 3) (共著) 木村純二、吉田真樹編『和辻哲郎の人文学』ナカニシヤ出版、2021年
- 4) 宮村悠介「カント倫理学における徳の理念の問題」(日本カント協会編『日本カント研究 20』)に所収) 2019年
- 5) 宮村悠介「教育と倫理——「人格の完成」をめぐる——」(日本金属学会編『まてりあ (Materia Japan) 56-4』)に所収) 2017年
- 6) 宮村悠介「個体であることの孤独について——人格の倫理学のために——」(実存思想協会編『実存思想論集 XXXI』)に所収) 2016年

5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本カント協会編集委員 (2020年12月～2022年11月)
- 2) 日本倫理学会監事 (2021年4月～2023年3月)
- 3) 日本比較思想学会評議員 (2022年4月～現在)

岩 山 勉

所属 愛知教育大学 理事・副学長（理科教育講座）
職位・学位 教授・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 物理教材開発、科学・ものづくり教育、半導体物理学、ビーム物性



1. これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）を用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。イオンビーム、レーザービーム、エキシマUVランプ、近赤外線ランプ、電子線等を組み合わせ用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性の探索を行っている。

2. 博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており対応が急がれる。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。科学技術の発展とともに原理がブラックボックス化され、専門家以外は単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。博士課程では、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組み、関連する教材開発と教育効果の検証も行っている。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

最新の科学技術研究の成果をふまえ、初等・中等教育の教科内容における広範な専門的知識の重要性の認識とその理解を深める授業を行う。博士課程における、共通的な科目であり、非専門の方々も多く履修することを考慮して基礎から学び、その知識を活かす方法や、その面白さについて学ぶ。

【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発やその授業での活用法を検討する。特に、学習の動機付けや日常との関わりから、理科を学ぶ意義、楽しさを伝える工夫として、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

4. 主要な研究業績

- 1) "Optical properties of Si nanocrystals in SiO₂ matrix synthesized by reactive pulsed laser deposition", *Journal of Physics: Conference Series*, (IOP Publishing), **1527**, 12027 (2020).
- 2) 「教科開発学を創る 第3集（第7章 生徒が実験を通して主体的・創造的に電気抵抗の概念を獲得することを目指した新規教材の開発）」愛知教育大学出版会 (2021).
- 3) 「中学校理科における電気抵抗の形状依存性の導入に向けての検討 ―抵抗体の形状を2次元的に変化させた電気抵抗値の測定実験の評価から―」*科学教育研究*, **46**(2), 117-124 (2022).
- 4) "Investigation of pendulum damping using an angle sensor and video analysis: Combination of viscous and dry friction", *Physics Education* (IOP Publishing), **57**, 65026 (2022).
- 5) "Investigating the properties of conductive clay and examining its potential as a teaching material, *Physics Education* (IOP Publishing), **58**, 55011 (2023).
- 6) "Development of Acid-Base Indicators from Natural Pigments in Agar Gel", *Journal of Chemical Education* (American Chemical Society), **100**(12), 4707-4713 (2023).

5. 主要な社会活動業績

- 1) 刈谷市理数大好き推進協議会理事
- 2) 刈谷市立住吉小学校刈谷市立住吉小学校運営協議会委員
- 3) 愛知県立刈谷高等学校 SSH 運営指導委員・評価委員
- 4) 愛知県立豊田北高等学校学校評議員、あいちラーニング推進事業研究アドバイザー

飯 島 康 之

所属 愛知教育大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 数学教材論研究
研究テーマ 動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ
開発・授業研究, 数学教育



1. これまでの教育研究について

数学教育学に関する研究を行っています。中核は、Geometric Constructor(GC)という動的幾何ソフト(作図ツール)です。DOS版(1989-),Windows版(1996-),Java版(2000-),html5版(2010-)を開発しました。附属学校の他さまざまな学校と連携して授業研究を行い,動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を,教材研究,カリキュラム研究,授業研究など幅広く,理論的かつ実践的に研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

2010年から開発に着手したGC/html5は,いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScriptで開発することによって,次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど,操作性と数学的活動との対応づけもできます。4人1組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し,理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。そのような環境の構築や教材開発と実践研究が,数学的探究の教授可能性を広げていくことを目指しています。

3. 担当講義について

【数学教材論研究】

数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで,その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発,コンテンツ・教材開発,授業研究,認識論的研究などのさまざまな領域において,それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに,GCに関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究をサンプルに,参加される院生の周辺での開発研究の可能性について検討します。数年前からはSTEM教育の中での数学のあり方も模索しています。

4. 主要な研究業績(2015.4 -)

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437 - 1553, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5の開発—HTML5+JavaScriptによる教育用ソフト開発の可能性—, 科学教育研究 vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5を用いた数学的探究における精度・誤差について - インターラクティブな探究に向けて -, 教科開発学論集 4, 111-121, 2016

飯島康之, ICTで変わる数学的探究, 明治図書, 2021

飯島康之, 数学的探究のサイクルと「データ」の役割について- 統計と図形に関するケーススタディを基にして-, イプシロン, 63, 1-20, 2022

飯島康之, 算数・数学教育でのICT活用の『今日・あす・10年後』について, イプシロン, 64, 1-18, 2023

飯島康之, STEAM教育時代の数学教育研究のあり方について—共同教科開発学専攻の諸研究から実感したこと—, 教科開発学をつくる第5集, 愛知教育大学共同教科開発学専攻, 157-173, 2024

小 谷 健 司



所属 愛知教育大学 教育学部 数学教育講座
職位・学位 教授・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論，数学教育内容論研究，教科開発学セミナーI, II, III
研究テーマ 数学教材開発，常微分方程式論

1. これまでの教育研究について

私の研究分野は常微分方程式論です。常微分方程式とは微分を含む方程式で，自然科学の研究に大いに役立っています。私は常微分方程式を幾何学的に考える問題に興味を持ち，長年研究を行ってきました。同時に，教育学部の学生たちと身近な事象に現れる数学的な問題についても研究してきました。このことについても，いくつかの結果を残しています。

2. 博士課程における教育研究について

私は長年，身近な事象に現れる私は数学について研究してきました。このことを生かし，学生のみならずと新たな数学教材を作り出したいと思っています。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

数学的な考え方・数学的な問題解決の仕方について，身近な事象に現れる数学を題材として授業したいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

【数学教育内容論研究】

授業内容の1つめは，数学を教えるうえで知っておくべきことです。例えば，人類は実数を2千年以上のむかしから使ってきました。しかし，その正体について詳しく理解している人は少ないと思います。授業内容の2つめは，身近な事象に現れる数学についてです。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

4. 主要な研究業績

- 1) New Methods for Constructing Odd-Order Magic Squares, 愛知教育大学研究報告, 自然科学編 70 (2021), 1-4.
- 2) ハノイの塔必勝法, イブシロン 64 (2023), 65-70.
- 3) 5次の魔方陣を作ろう, 数学教育, 2022年9月号, 20-23.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 新城市教育委員会「数楽チャレンジ大会」実行委員会 顧問 (2001年～現在)
- 2) 愛知県立刈谷高等学校 SSH 運営指導委員会委員 (2014年～現在)
- 3) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (2001年7月31日～9月8日)
- 4) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (1999年3月28日～4月9日)

大 鹿 聖 公

所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座
職位・学位 教授・博士（学術）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論・理科教材開発論研究
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ 理科教材開発、環境教育・ESD・SDGs カリキュラム



1. これまでの教育研究について

小・中・高等学校の理科教育に関わる教材開発に取り組んでいる。実験観察活動を基盤とした教材から、モデルやシミュレーションなどを取り入れた児童・生徒の主体的な活動を育む教材など幅広く取り上げて開発している。また、理科教育における理解促進のため、科学館や博物館などの社会教育施設との教育連携に関する研究にも取り組んでいる。現在では、理科教育にとどまらず、環境教育、ESD、SDGs といった持続可能な社会における科学教育に関するカリキュラム開発や教育実践に関する研究にも取り組んでいる。

2. 博士課程における教育研究について

21 世紀の現代は、科学技術の発展と地球環境問題の複雑化によって持続可能な社会に貢献する科学技術人材が求められている。そのため、主体的に自然科学や科学技術に取り組み、科学的な探究を实践する児童・生徒の育成が急務である。そのために、科学教育として、どのような教材や指導法を提供することが適切であるのか、また、未知の課題を探究するために必要な資質・能力とは何か、それらについて、歴史的な研究背景を省察しながら、研究を進め、実践的な教育研究に取り組んでいる。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

現代は、Society5.0 を目指し、さまざまな分野で科学技術が発展・進歩している。自然科学・科学技術がどのような社会背景の中で進展し、科学教育に影響を与えてきたか、科学技術と科学教育の関わりから、俯瞰して解説を行う。

【理科教材開発論研究】

理科授業では、自然科学の概念理解のために様々な教材が開発、利用されている。それぞれの自然科学分野における教材開発の歴史を辿りながら、また、児童・生徒の科学概念の状態を踏まえながら、教材開発に必要な目的、方略、実践について、具体的にトピックを選択しながら、議論を深める。

4. 主要な研究業績

- 1) 「協働学習を導入した中学校理科カリキュラムの開発—対面的—積極的相互作用の活性化による効果を中心にして—」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』. 71, 125-133. (2022) (共著)
- 2) 「エネルギーミックスを扱ったシミュレーション活動教材の開発—中学校理科「科学技術と人間」での授業実践を通して—」『愛知教育大学研究報告教育科学編』. 69, 153-161. (2020) (共著)
- 3) 「中学校理科においてキャリア教育の視点を取り入れた リーフレット教材の開発と授業実践」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』. 4, 153-159. (2019) (共著)
- 4) 「小学校理科「植物の発芽、成長、結実」におけるファストプランツを用いた授業実践とその効果」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』. 4, 97-104. (2019) (共著)

5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本生物教育学会理事・副会長 (2016. 1. ～現在)
- 2) 一般社団法人 SDGs コミュニティ理事 (2019. 4. ～現在)
- 3) 名古屋市環境審議会委員 (2019. 4. ～現在)
- 4) 愛知県教育委員会科学の甲子園ジュニア大会委員長 (2023～現在)

寺 本 圭 輔

所属 愛知教育大学 教育学部 保健体育講座
職位・学位 教授・博士（人間環境学）
博士課程分野 創造系教科学
博士課程担当科目 教科開発学実践論・保健体育内容論研究
研究テーマ 健康科学、発育発達、水泳



1. これまでの教育・研究について

私の研究分野は運動生理学及び水泳である。運動生理学的研究では、主に小児期の発育発達と生活習慣、身体調整力（脳・神経系機能）などをテーマとして研究を行っている。また、近年では発展途上国（カンボジア）の小児の発育調査や身体測定の普及にも取り組んでいる。水泳研究では、学校水泳や初心者の教授法や教材開発をテーマとして研究を行っている。

2. 博士課程における教育・研究について

子どもたちの体力低下やその下げ止まり、メタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームの低年齢化は既知であるが、時代に即した適応ではないのか？とも考える。子どもたちの健全発育としての適切な動きやその巧みさとそれに関わる要因、悪とするならどのように学校教育や日常生活で改善できるのか、考えていきたい。また、水泳＝泳法として行われる水泳教育の弊害によって多くの水泳嫌いを招いている。水泳教育は本来どうあるべきか、考えていきたい。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

授業参加者・担当教員が様々な専門領域を持っている中で自分の研究テーマを発表することは、多くの新たな気づきが得られる機会となると考える。当たり前と考えていたことが覆されたり、自分の専門領域のみでは大きな壁であったことが学際的視点により大きく進むこともある。本授業がそのきっかけとなればと考えている。

【保健体育内容論研究】

保健体育・健康科学に関する課題を運動生理学及びバイオメカニクスの観点から提起し、議論していきたい。特に、子どもたちの発育や動きの現状、それを改善する策を教科開発学の観点から授業参加者で考えたい。また、水泳のみならずそれぞれの本来の運動についての系統的学びと学校教育の現状と課題についても議論したい。

4. 主要な研究業績

1) 著書

「水泳＝泳法」ではない水泳教育-水中環境における系統的学びの展開-。教科開発学を創る，第3集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2021。

自分の命は自分で守るための学習-水辺での「安全確保につながる運動」の意義-。教科開発学を創る，第4集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2022。

2) 論文

- ・短期間の中強度トレーニングが内臓脂肪蓄積及び筋内脂肪に及ぼす影響。人間と生活環境，28（1），2021。
- ・休日における日本人幼児のエネルギーバランスと生活習慣および親の食意識の関連性。学校保健研究，64，248-258，2022。
- ・Physical Growth of Primary School Children in Cambodia. Int. J. School Health，8（1），18-27，2021。
- ・A Cross-Sectional Study for a Reference Model of Body Composition in Japanese Children Aged 3 to 10 Years. Int. J. School Health，9(1)，2-12，2022。
- ・Body Composition due to Deference in Residential Area and School Meals Provision in Cambodian Children. Int. J. School Health，9(2)，113-122，2022。
- ・Determining total energy expenditure in 3-6-year-old Japanese pre-school children using the doubly labeled water method. Journal of Physiological Anthropology，41(1):28，2022。

5. 主要な社会活動業績

愛知県健康推進学校審査委員、三重県水泳連盟医科学委員会委員長

鈴木 英 樹

所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（スポーツ科学）
博士課程分野 創造科学系
担当科目 教育評価実証方法論
体育教材開発論研究
研究テーマ 運動生理学，筋生理，走運動分析



1. これまでの教育研究について

保健体育の教員として主に運動生理学に関連した授業と研究を行ってきました。研究は主に骨格筋の可塑性に関する研究を行っています。発育発達時の骨格筋の変化をはじめ，瞬発性・持久性運動に対する骨格筋の適応変化，不活動に伴う筋萎縮の研究を行ってきました。現在は，筋萎縮からの回復に着目した研究を行っています。一方で，数年前からは，子どもの走能力を高めるための有効な指導方法を検討するために，動作解析法を用いた研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

教材開発にあたり，子どもの実態を理解することは重要であると考えられます。専門である生理学的・運動生理学的見地から子どもを理解するために，学術論文や研究報告等のデータを用いて概説する計画である。特に発育期を中心に，身体的な変化や運動に対する適応変化について理解を深めて欲しいと考えている。

3. 担当講義について

「教育評価実証方法論」：

子どもの発育・発達における身体的・機能的変化について，過去の研究報告のデータ等を参考に概説すると共にともに，受講者の研究課題に関連した内容について評価の観点からも議論する予定である。

「体育教材開発論研究」：

運動の実施が子どもをはじめとしたヒトの形態的，機能的特性に及ぼす影響について過去の論文や研究報告等を参考に，運動に対する適応変化を概説する。

4. 主要な研究業績

<骨格筋に関する研究>

Suzuki H, Tsujimoto H, Shirato K, Mitsuhashi R, Sato S, Tachiyashiki K, Imaizumi K: Clenbuterol attenuates immobilization-induced atrophy of type II fibers in the fast-twitch extensor digitorum longus but not in the slow-twitch soleus muscle. *Global Journal of Human Anatomy and Physiology Research*, Vol1, pp10-17, 2014

Suzuki H, Kitaura T: Attenuating effects of clenbuterol, β_2 -agonist, on immobilization-induced atrophy of rat hindlimb muscle fibers. *Journal of Physical Fitness and Sports Medicine*, Vol4(5), pp363-367, 2015.

Suzuki H, Yoshikawa Y, Tsujimoto H, Kitaura T, Muraoka I: Clenbuterol accelerates recovery after immobilization-induced atrophy of rat hindlimb muscle. *Acta Histochemica*, Vol122, 151453, 2020.

<走運動に関する研究>

中野弘幸，鈴木英樹：短距離走における回復期の評価方法に関する研究 愛知教育大学保健体育講座研究紀要 第42巻 25-29，2018.

中野弘幸，山本慎太郎，縄田亮太，鈴木英樹：小学生の体育授業における短距離走指導に関する研究 愛知教育大学研究報告，第68輯，47-50，2019.

中野弘幸，大松由季，黒須雅弘，鈴木英樹：幼児を対象とした短距離走指導の影響 -腕振り，ピッチ，ストライドに着目して-，愛知教育大学研究報告，第70輯，41-45，2021.

5. 主要な社会活動業績

日本体力医学会評議員

豊田市立豊南中学校，学校アドバイザー

山田 浩平

所属 愛知教育大学教育学部養護教育講座
職位・学位 准教授 博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 保健科教育論研究、教育評価実証方法論
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 学校保健学、健康教育学、保健科教育学



1. これまでの教育研究について

生活者の自発的な健康行動の獲得というテーマのもと、対象者の Quality of Life（生活の質）の向上に焦点をあてた行動変容の研究を続けてきています。特に、児童・生徒・学生に視点をあて、現在、学校現場で注目されている生活習慣改善に対する意志決定や問題解決能力の育成、対人葛藤場面における対人関係能力との関わり、さらには保健授業のための指導資料や学習法、教材開発などに着目した研究をしてきました。これらの研究を背景にして、養護教諭や保健体育科教員を目指す学生たちの現代的健康課題に対応した学校健康教育の方法を具体的に教示しています。

2. 博士課程における教育研究について

発育発達期にある児童・生徒等の学校生活が楽しく健康に送れるように、また生涯にわたって健康に過ごせるように、学校ではさまざまな活動を行っています。これらの活動は、保健教育と保健管理に分けられ、両領域の円滑な運営を図るための保健組織活動があります。具体的には、特別活動等における保健の指導、健康観察や健康診断などの活動が挙げられます。ここでは保健教育に視点をあて、保健教育の目標、内容、方法、評価方法について研究を進めています。

3. 担当講義について

【教育評価実践方法論】学校教育における児童生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは教科開発の観点から非常に重要です。ここでは、学校で行われる健康教育（保健教育）に対する評価方法を取り上げ、その概要を解説します。

【保健科教育論研究】保健教育には、限られた時間数の中で子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけるという目標があります。そのため、まず保健教育が何を目指すのかを解説した後に、学習内容や方法について演習を含めて解説します。

4. 主要な研究業績

<著書>

- 1) 教科開発学を創る第4集：第7章「健康の概念と健康教育(p130-142)」, 愛知教育大学出版会, 2023
- 2) 学校保健：第1章第5節「児童・生徒の健康状態(p41-54)」, 第2章第1～5節「学校における保健教育(p55-106)」, 第5章第6節「学校保健と地域との連携(p251-261)」, 大学教育出版, 2021
- 3) 保健科教育学の探究：第2部第3章3節「実践研究の事例(p317-322)」, 大修館書店, 2021
- 4) 学校保健ハンドブック：第2章第2節「学習指導要領に基づく保健の指導(p66-70)」, ぎょうせい, 2019

<学術論文>

- 1) 保健科教育法における模擬授業の効果, 東海学校保健学研究, 46巻1号, 5-16, 2022
- 2) 一般教諭と養護教諭のがん教育に対する意識の比較, 愛知教育大学研究報告, 教育科学編, 72輯, 20-25, 2022
- 3) Effective Teaching - Learning Process for Training Life Skills, Official Journal of School Health, Vol.9, 45-58, 2016
- 4) 対人葛藤場面での断り行動に対する自己効力感と社会的スキル及びブューモア対処との関わり, 学校保健研究, 第54巻3号, 203-210, 2015 (2015年度日本学校保健学会奨励賞受賞)

5. 主要な社会活動業績

国立教育政策研究所教育課程研究センター(学習指導要領作成に関わる専門委員)、愛知県健康推進校審査委員、日本オリンピック委員会(医・科学スタッフ)、日本学校保健学会代議員、日本保健科教育学会理事

村 越 真

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 教授 博士 (心理学)
博士課程分野 教育環境学
担当科目 学校危機管理論研究、教育フィールド調査論、教科開発学セミナー I・II
研究テーマ リスク認知、学校の危機管理、リスクマネジメント、空間認知、安全教育、



1. 研究ハイライト

①不確実性の高い環境の中で、人はどう賢く問題解決をしているのか？

②主体的、対話的な安全・防災教育の探求

③リスクの高い環境でのリスクの捉えとリスクマネジメントの知恵（実践知）の探究

上記3テーマがここ20年間の研究の柱である。①は主としてナビゲーション・空間認知のテーマで、成果としては、(村越、1991、1995；Murakoshi、1990、1994、Murakoshi、1997；村越、2004等)がある。2000年以後は、②③を主たるテーマとして、子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか、そこにどのような安全上の課題があるのか(村越、2004、2006、2008)、危険を回避するスキルを育成する上で有効な教育方法はどのようなものかを実践・実験の両面から検討した(2011、2015；村越・小山・河合、2016、村越、2020)。また、自然体験・アウトドアスポーツでの事故の実態、活動者の危険認知や対処能力についての研究も行った(村越、2010、2013、2016；村越ら、2014)。2016年からは、自然環境の中でリスクに気づき対処する認知プロセスの実証研究を進め、高齢者はリスク特定能力が低下することを示唆する結果を得た(村越、2017)。また、過酷な自然環境のリスクに対する知識や実践知の研究を行っている(満下・村越、2019等)。国立登山研修所の専門調査委員や講師として、これらの成果を山岳遭難防止の研修等にも活用してきた。

2. 今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果は、①村越真・満下健太(2020)過酷な自然環境でのリスクマネジメントの実践知. 認知科学、27(1),23-43、②満下健太・村越真(2020)リスクに見出される教育的意義:3相因子分析法による小学校の体育的活動に対するリスク認知と教育的意義の関連の検討.体育学研究、28(1), p. 13-21、Mitsushita, Murakoshi, & Koyama (2022) How are various natural disasters cognitively represented?: A psychometric study of natural disaster risk perception applying three-mode principal component analysis. Natural hazards, 116, 977-1000.がある。①では、南極観測隊の安全管理隊員への聞き取りから質的研究法によってリスクの特性に応じたマネジメント方略の実践知を明らかにした。②では3相因子分析の手法によって、リスクに教育的意義が見いだされる可能性を定量的に示した。さらに③では②の手法を応用し、人が自然災害をどのように認知しているかと、それが対処欲求にどう影響しているかを明らかにした。

2019～2021年の南極地域観測において、日本の南極観測で正式に採用される初の人文社会科学研究「リスク対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発」の研究代表者を務めた。また、幼少期の遊びや児童期の自然体験も「不確実性」という点では南極の過酷さと変わらない。見かけ上の過酷さの違いを超えた挑戦的活動におけるリスクマネジメントの統一的な原理の発見・構築に向けて、科研費助成金による学校での安全教育の構築に取り組んでいる。これらの成果は、リスク社会と呼ばれる現代におけるパーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発につながることも期待される。

村 山 功

所属 静岡大学 学術院教育学領域
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育工学論研究
研究テーマ 認知心理学、学習科学



1. これまでの教育研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力・学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。その成果の一部を『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』として公表し、また2019年3月3日の教科開発学研究会において「全国学力・学習状況調査に見る中学校理科授業の実態」として発表しました。

また、新学習指導要領に対応した授業づくりについても研究を進めており、途中段階ではありますが「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて —新学習指導要領における『主体性』を中心に—」にまとめました。現在はもう少し理論的な問題に取り組んでおり、主体的な学習に対して「ハンズ・オン」や「インタラクティブな学習環境」という観点から、真正な学習に対して「数学的活動」という観点から、アプローチしようとしています。

コロナウイルス対応のためにe-learning化を始めて、その都度改善に努めています。LSMのインタビューが英語化できるため外国籍の院生には受講しやすいという発見がありました。

2. 博士課程における教育研究について

主指導教員として、院生が博士論文を書くことができるよう、計画的に働きかけていきます。特に、学術誌へ論文を掲載できるよう研究を支援していきます。昨年度から引き続き、教育工学論研究のe-learning化に取り組みます。これまでは受講生のネットワーク環境を考慮して動画の使用を抑制してきました。昨年度は動画教材化を行う予定でしたが、作業負担が大きくて断念しました。一方、学習の質保証のため、確認テストを入れるなどの改善を進めています。

3. 担当講義について

【教育工学論研究】

「理論に基づいて教育プログラムを作る方法」というキャッチフレーズのもと、教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インストラクショナル・デザイン(ID)に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインストラクションの部分が不十分なため、この部分を学習科学の知見で補完しています。今後は、評価についても充実させていくつもりです。

4. 主要な研究業績 (2019.4~)

- 1) 「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて —新学習指導要領における『主体性』を中心に—」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No. 30, 194-201, 2020/03/31.
- 2) 「静岡県における「ICT活用指導力」の動向: 校種全体及び校種ごとの特徴」, 村山功・中村真二, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 33, 161-170, 2023/03/10.
- 3) 「全国学力・学習状況調査の結果に基づく学力向上: 学校や教育委員会による分析方法の提案」(実践報告), 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 34, 244-249, 2024/03/11.
- 4) 「第4章 教育目標をどう表すか —コンピテンスとパフォーマンス—」, 村山功, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第5集』愛知教育大学出版会, 72-84, 2024/03/15.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡県学力向上推進協議会長
- 2) 公益社団法人全国学校図書館協議会理事
- 3) 裾野市教育振興基本計画検討委員長

鎌塚 優子



所属 静岡大学教育学部養護教育専攻
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学実践論, 養護実践教育学研究
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 学校保健学, 養護実践教育学, 健康相談・健康相談活動

1. これまでの教育研究について

23年間の養護教諭としての教育実践を基盤とし、主に養護教諭でなければ得られない独自の視点について「心の問題への気づき」という観点で探究してきました。世界に類をみない教育職である養護教諭の専門性とは何かを近接研究分野・領域と連携、協働し、かつさまざまな研究方法を模索することで、より創造的、発展的な研究結果を導き出していくことを重視しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では、学校保健、養護教諭の教育実践研究について、未だ発展途上にある養護教諭に関わる学問構築に寄与する研究を行いたいと思います。養護教諭の専門性とは何か、養護とは何かについて、歴史的背景を踏まえ、現在の養護実践、今後予測される養護実践のあり方について探求していきます。また学校保健の視点から子供たちのさまざまな心身の健康課題解決のために、実践的観点を理論から考察し、今後の学校保健のあり方について考えて行きたいと思います。

3. 担当講義について

【養護実践教育学】養護の歴史や制度、養護の捉え方・養護教諭の実践、養護に関する近接領域の研究などに関する研究成果や文献をもとに、養護の目的・機能・方法についての文献を分析し議論を通じて理論構築を図ります。また養護実践、養護教育のあり方や方向性、学問構築について討議し、更に、養護教育のあり方と現職養護教諭の研修課題についてについて分析し考察します。

4. 主な研究業績

著書

- 1) 鎌塚優子 (2023) 第1章学問としての健康相談活動, 第3節 健康相談活動の原理と哲学, 1) 教育学の基盤となる学問やその考え方(1)健康相談活動と教育学, (2)健康相談活動の原理と哲学, 第2章 健康相談活動の理論・健康相談活動の方法, 3) 発達障害 5 多職種・他機関連携, 5) 心理社会発達の要因と健康相談活動 (1)アセスメントを支える近接学問領域の理解, (2)指標、アセスメントシート等の活用による資質・能力向上効果, 第3章 養護教諭に求められる資質・能力, 第2節 これからの健康相談活動学, 日本健康相談活動学会編, 健康相談活動学—実践から理論そして学問へ—, ぎょうせい, 17-18, 64-69, 71-72, 110-114, 163-167
- 2) 鎌塚優子 (2024) インクルーシブ教育を通じて養護教諭の専門性とは何かを問う, 亀崎路子編, 養護教諭のためのヘルシースクールハンドブッカー—これからの養護教諭に必要なこと—, 杏林大学保健学部教職課程運営委員会, 199-202
- 3) 鎌塚優子 (2024) 第9章学校保健A 学校保健の基本, B 学校保健における課題への対策 4 学校保健活動の展開と養護教諭の職務, 標準保健師講座 3 対象別公衆衛生看護活動, 医学書院, 248-259, 270-279

論文

- 1) 中村美智太郎, 鎌塚優子, 稲葉英彦, 竹内伸一 (2023) ケースメソッド教育は学校教育におけるリーダーシップの探究にどう貢献するか, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), 74, 176-191
- 2) 岡田祐子, 鎌塚優子 (2024) 社会的実践力を高めるための健康行動スキルの育成をめざした保健教育の実践—小学校4年生での体の成長の単元に着目して—, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 34, 325-330
- 3) 大久保律子, 鎌塚優子, 吉澤勝治 (2024) 養護教諭の専門力向上のための職務評価の検討, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 34, 89-98
- 4) 三宅昂子, 鎌塚優子 (2024) 児童に心理的な要因があると養護教諭が判断する際の思考の概念化, 教科開発学論集, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻, 12, 23-35

4. 主な社会的活動業績

日本養護教諭養成大学協議会 副会長 (2024年度～現在), 日本健康相談活動学会 理事 (2018年度～現在)・日本健康相談活動学会編集委員会委員 (2004年度～現在), 日本学校保健学会 評議員 (2019年度～現在) 4) 東海学校保健学会 理事・評議員 (2013～現在)

香野 毅

所属 静岡大学教育学部特別支援教育専攻
職位・学位 教授 博士（心理）
博士課程分野 教育環境学担当科目
教科開発学原論研究テーマ 特別支援教育 心理支援 動作法 子育て支援



1. これまでの教育研究について

特別支援教育専攻の教員として、障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、主として心理学の立場から取り組んできました。障害種別としては、肢体不自由、知的障害、ASDをはじめとする発達障害、いわゆる情緒障害などが対象となりますが、障害種に特化した支援というよりも、生活や心理面の支援を前面に出すことで、あらゆる人を対象にできると考えています。支援の窓口としては「身体」や「動作」を得意としています。また家族支援や地域との連携などについて実践的な研究を進めてきました。

大学では、学部では肢体不自由児の心理や教育を、大学院では発達障害児の理解と対応を中心に授業を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、エビデンスのある方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。加えて、それを支える仕組みや制度、人的環境といった面からも、学校や支援の場をいかに機能させていくかについて考えてみたいと考えます。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

研究を進めるにあたっては先行研究のレビューが必要です。中心的な概念、近接領域での取り組み、研究の方法などの範囲において、参考になることが多いはずですが、また研究倫理の点からも欠かせません。この授業では、自分の研究を例にしながら、先行研究の整理を手伝えればと思います。

【特別支援教育研究】

障害のある人への指導支援の種々の方法や技法について深めていくとともに、その背景や構成等について理解を深めていきます。また学校や家庭といった関係機関がいかに機能していくのかについても考えてみたいと思います。

4. 主要な研究業績

- 1) 「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」 発達教育 2014年5月 Vol. 33 No. 5 pp. 4-11
- 2) 「発達障害のある子どもの姿勢と動き」 教育と医学 2015年3月 No. 741 pp. 58-64
- 3) 「肢体不自由者の持つニーズの年齢段階による変化 —保護者への質問紙と聞き取りによる調査から—」 特殊教育学研究 第54巻2号 2016年7月 pp. 77-86
- 4) 「学齢児を持つ保護者の相談ニーズに関する調査研究」 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2017年3月 第26号 pp. 1-7 香野 毅・大石啓文・田代 篤・坂間多加志
- 5) 「障害のある子どもたちの新たな学びの場としての放課後等デイサービス —連携と専門性という課題に焦点をあてた調査と実践事例—」 教科開発学論集 2021年3月 第9号
- 6) 「肢体不自由者を中心とした障害者臨床・療育におけるアセスメント」 2020年5月 静岡学術出版
- 7) 「動作訓練の技術とこころ —障害のある人の生活に寄りそう心理リハビリテーション—」 2022年5月 遠見書房 全221頁

5. 主要な社会活動業績

- 1) 小中高等学校、特別支援学校、幼保こども園 等研修講師 多数
- 2) NPO 法人しずおか福祉の街づくり 理事

塩田真吾

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育プログラム開発論，情報教育学研究
研究テーマ 教育工学，情報教育



1. これまでの教育研究について

主に情報教育の中の ICT 活用やプログラミング，情報モラル，情報セキュリティなどの教育内容・教材論，教育方法について，実践的に研究を進めています。特に，情報モラルの分野では，どうすれば自分のこととして考えられるかという「自覚」をテーマに研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

情報教育をはじめとする現代的教育課題について，教科を超えた横断的な視点から研究を進めています。博士課程では，情報教育に関して教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「教育プログラム開発論」では，インストラクショナル・デザインについて扱い，博士論文で行う実験授業の効果的・効率的な実施について検討します。

「情報教育学研究」では，ICT 教育，情報モラル教育の学習内容構造，教育方法について包括的な理解を図るとともに，授業開発及び評価の方法論について扱います。

4. 主な研究業績（2020年4月～）

- ・塩田真吾・橋爪美咲・香野毅編著（2020）『特別な支援を要する子どものためのネット・スキル・トレーニングー子どもの情報モラルを育むためにー』静岡学術出版
- ・満下健太・酒井郷平・西尾勇気・半田剛一・塩田真吾（2020）「子どもの情報機器活用に関わるトラブルのリスクアセスメント」日本教育工学会論文誌 44 巻 1 号, pp. 75-84
- ・酒井郷平・塩田真吾（2021）「災害時における SNS 上での誤情報・虚偽情報を見極める中学生向け教材の開発と評価」, 日本安全教育学会「安全教育学研究: 東日本大震災 10 周年特集号」, pp. 85-97
- ・安永太地・満下健太・上田大介・塩田真吾（2022）「トップアスリートを対象としたスポーツ・インテグリティ態度の実態と要因の分析」日本教育工学会論文誌 46 巻 2 号, pp. 275-288
- ・満下健太・安永太地・酒井郷平・塩田真吾（2022）「情報モラルの知識がトラブル経験頻度に及ぼす影響」, 日本教育工学会論文誌 46 巻(Suppl.), pp. 61-64
- ・福井隆介・安永太地・塩田真吾（2023）「効果的な ICT 活用を目指した授業デザイン支援ツールの開発ー教育目標分類学を援用した学習活動の目標の明確化を通してー」, コンピュータ利用教育学会「コンピュータ&エデュケーション」Vol. 55, pp. 56-61

5. 主な社会的活動（現在）

- ・文部科学省「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」技術審査委員会技術審査専門員
- ・文部科学省「情報モラル教育推進事業」検討委員会 副座長
- ・文部科学省「ICT 活用教育アドバイザー」
- ・静岡県教育委員会「学力向上推進協議会」委員
- ・静岡県中山間地域の小規模校における ICT 活用推進事業検討会議 委員
- ・静岡市遠隔教育システム導入実証研究事業 委員 など

中村 美智太郎

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
博士課程担当科目 教育プログラム開発論，人間形成論研究
研究テーマ 教育思想，情報倫理，道徳教育，キャリア教育



1. これまでの教育・研究について

倫理的なものとの美的なものとの接合領域への関心から研究しています。最近では、情報倫理・生命倫理・スポーツ倫理といったいわゆる応用倫理や、またマイノリティ・遊び（遊戯）・リスク・安全・市民性・討議方法等についても検討しています。このベースには、近代ドイツ教育思想についての関心があります。18世紀を中心とした特にドイツの教育思想の文脈での主な研究対象は、美的教育思想を展開した Fr・シラーです。彼の思想の起源を明らかにしつつ、現代までの展開を跡付けるべく、研究を進めています。

2. 博士課程における教育・研究について

情報倫理・道徳教育・キャリア教育が抱える現代的な諸課題を射程に入れつつ、学校を中心とした教育機関での学びにおいて、私たちはどのように人間形成を行うのかをテーマに研究しています。「学校とはなにか」「学びとはなにか」「教育とはなにか」といった根本的な、かつ一義的な解のない問いに対して応答しようと試みています。

3. 担当講義について

【教育プログラム開発論】特にキャリア教育や道徳教育の視点に立って理論・歴史と実践を往還しながら、教育プログラムの開発方法・検証等についての検討を行います。

【人間形成論研究】人間がいかにして人間となるのか、教育はそこにどのように関与する（してきた）のかという問いに、主に西洋近現代における教育思想や倫理学の知見を軸に応答していきます。

4. 最近の主な研究業績

- ・中村美智太郎・鎌塚優子・稲葉英彦・竹内伸一（2023）「ケースメソッド教育は、学校教育におけるリーダーシップの探究にどう貢献するか」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第74号，pp.176-191。
- ・酒井郷平・田中奈津子・高瀬和也・中村美智太郎（2022）「学級の『1人1台端末』環境における教員のルールづくりの傾向と要因の分析」『コンピュータ&エデュケーション』vol.53，pp.52-57。
- ・中村美智太郎（2021）「情報圏における道徳的行為者と道徳的コミュニケーション—情報倫理のアプローチに基づいて」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第72号，pp.183-194。
- ・中村美智太郎（2020）「情報環境における道徳的行為者の『責任』と『答責性』」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第52号，pp.43-55。
- ・中村美智太郎（2019）『『遊戯』の領域と『忘我』—シラー『美的教育書簡』における美的差異の問題』、『唯物論』第93号，pp.84-98。
- ・中村美智太郎（2018）「連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座—再帰的近代化と道徳のリスクの問題」、『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第69号，pp.149-161。
- ・鎌塚優子・竹内伸一・中村美智太郎共編著（2023）『討論して学ぶ探究的道徳ケースブック』静岡学術出版。
- ・藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾共編著（2023）『防災教育とICT』静岡学術出版。
- ・堂園俊彦・角田ますみ・北西史直・中村美智太郎共編著（2023）『在宅ケアの悩みごと解決マップ—ケースで現場の問題「見える化」します』医歯薬出版
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一共編著（2022）『探究的な学び×ケースメソッド—教育イノベーターのための新しい授業チャレンジ』学事出版。
- ・武井敦史編著・中村美智太郎他共著（2021）『地場教育—此处から未来へ』静岡新聞社。
- ・藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾・満下健太・安永太地共編著（2021）『自律的思考を促すスポーツ・インテグリティ教育—理論と実践の構築を目指して』静岡学術出版。
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一・岡田加奈子共編著（2018）『とことん考え話し合う道徳—ケースメソッド教育実践入門』学事出版。

5. 主要な社会活動業績

学校図書教科書編集委員（「小学校・中学校道徳」），御前崎市スクラム運営委員会委員，静岡大学教育学部附属島田中学校研究評議員，文部科学省中央教育審議会専門委員 他

渋江かさね

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学実践論
研究テーマ 成人教育、生涯学習、社会教育、教師教育



1. これまでの教育研究について

社会の様々な分野で成人の教育や学習支援に携わる人である成人教育者（adult educator）の能力開発（development）について、北アメリカで展開された成人教育理論と実践を往還させて検討してきました。日本に関する研究としては、2020年度から社会教育主事講習等規程が一部改正され社会教育士が登場する中で、社会教育主事の役割の再定位を進めるための研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

教師または対人専門職を成人学習者ととらえた上で、自身や他者の成長に関し「生涯学習者としての教師」「省察的实践」「協働探究」の観点から、理論的・実践的に検討を進めることを行っていきます。

3. 担当講義について

4. 主要な研究業績

- ・渋江かさね・越村康英「社会教育士の称号を有する教員の養成に向けた基礎的研究——都道府県・指定都市教育委員会へのアンケート調査を通して」『日本教育大学協会研究年報』41、2023年、27-38頁。
- ・越村康英・渋江かさね「社会教育主事の在り方をめぐる今日的論点——社会教育主事講習等規程の一部改正(2018)前後の政策的議論の分析を通じて」『社会教育職員研究』29、2022年、31-42頁。
- ・渋江かさね「社会的包摂への『寄与』や『実現』のための社会教育をめぐる課題——中央教育審議会生涯学習分科会での議論を手がかりとして」『静岡大学教育実践総合センター紀要』32、2022年、218-226頁。

5. 主要な社会活動業績

- ・静岡県私立学校審議会委員
- ・静岡県立青少年教育施設指定管理者外部評価委員長
- ・静岡県立御殿場南高等学校学校運営協議会委員
- ・令和5年度社会教育主事講習 [B]「社会教育演習」（静岡会場）演習指導者（主催：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）
- ・令和5年度社会教育実践研修講師（主催：静岡県教育委員会社会教育課）

坂口京子

所属 静岡大学教育学部国語教育講座
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 国語教育論研究、教科開発学原論
研究テーマ 国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育



1. これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、言語力や思考力（中でも選択力）の育成を視点として、国語教科書や先進的実践の調査・分析を行なっています。

2. 博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいきます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の3点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

【教科開発学原論】

担当者のこれまでの研究について教科開発学の立場から再考し、それをもとに具体的な議論を進めます。教育の現実の捉え、研究領域と研究方法の妥当性、論構築の論理性について論議しつつ、教科開発学の内実と方法を追究します。

4. 主要な研究業績（2021～）

- 1) 「中学校国語科授業の発言・記録に見る比喩表現の検討:言語力の汎用性と固有性を観点として」『静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇』55号、2023
- 2) 「言語力育成の観点から見る中学校理科授業の考察—ファシリテーターによる対話と板書の分析を通して」『静岡大学教育実践総合センター紀要』33号、2023
- 3) 「批判する力を育成する中学校国語科の授業づくり:教材「握手」の学習過程に注目して」『静岡大学教育実践総合センター紀要』32号、2022
- 4) 「イスマニング・シュタイナー学校における言語力育成の実践」『静岡大学教育実践総合センター紀要』31号、2021

5. 主要な社会活動業績

- 1) 浜松市教育研究会主催研修会 講演「国語科における「自己調整」と学習構想の工夫」(2023.8.1)
- 2) 教科書の効果的な活用による授業力アップ講座 第1回国語オンラインセミナーin静岡(2022.11)
- 3) 静岡県教育研究会 国語教育研究部夏季研究大会「言葉と遊び・言葉を考える国語科の授業づくり」(2022.8)

中村 ともえ



所属 静岡大学教育学部国語教育講座
職位・学位 准教授・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系科学
担当科目 文学教材論研究 教科開発学原論
研究テーマ 日本近現代文学

1. これまでの教育研究について

日本の近現代文学、特に1920～1960年代の小説を対象として研究を行ってきました。谷崎潤一郎の作品を軸に、小説が他の領域、たとえば美術や演劇、映画など芸術諸ジャンルと結ぶ関係を、作品の分析・解釈にもとづき考察してきました。主なテーマは、①小説の中の絵画、②小説の演劇化・映画化で、近年は、③小説家と1930年代の建築論の接点にも関心を持っています。また、④古典文学の翻訳（現代語訳）・翻案の研究にも、継続して取り組んでいます。

静岡大学の教育学部及び教職大学院では、国語の教科書に採録されている（されてきた）近現代の文学者の作品を授業やゼミで多く取り上げ、学生・院生たちと読んできました。授業やゼミでは、本文の表現を踏まえ、具体的な指摘を重ねて分析・解釈を行うこと、それらを言語化して共有し、議論することを重視しています。文学作品を読むことは個人的な行為のようですが、教室で行うかどうか、誰かが目の前にいるかどうかにかかわらず、作品は人と読むものだと思っています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程の教育においても、文学作品を人とともに読むことを重視したいと考えています。作品を分析し解釈すること、自分が考えたことを言語化し共有すること、そうした具体的な作業を重ねることで、歴史的な文脈への接続、また他教科・他領域との問題意識の共有など、よりひろい視野での研究が可能になると考えます。

3. 担当講義について

【文学教材論研究】

中・高等学校の国語教科書に採録されている（されてきた）日本の近現代の文学作品の読解を行います。教科書に収録されているのは作品の一部である場合も多く、作品の総体、あるいはその周辺の文脈を補った上で、背景を踏まえつつ、分析と解釈を行っていきます。読解の上でポイントとなる箇所や表現を見出し、そのポイントに導く段階的な発問や活動を設定することができるようになることを目標とします。教科書各社の手引きや指導書の検討も行います。小説を中心に、詩歌、随筆、評論も扱う予定です。

4. 主要な研究業績

【近年の主要なもの】

- ・中村ともえ『谷崎潤一郎論 近代小説の条件』2019年5月、青簡舎
- ・中村ともえ「ヒロインの死を悼むのは誰か 樋口一葉作『にごりえ』とその脚色」（上田学・小川佐和子編『新派映画の系譜学—クロスメディアとしての〈新派〉』2023年3月、森話社）
- ・中村ともえ「小説と芸能の昭和—谷崎潤一郎から川口松太郎へ」（『国語と国文学』100巻3号（特集＝芸能）、2023年3月）

【教育に関連するもの】

- ・中村ともえ「正岡子規「瓶にさす歌」の鑑賞」（『国語と国文学』92巻11号（特集＝教育と研究）、2015年11月）
- ・松本怜・杉山晃弘・中村ともえ「中学校国語教科書「坊っちゃん」の授業実践—思考を深める「手立て」の提案」（『静岡大学教育実践総合センター紀要』31号、2021年3月）

5. 主要な社会活動業績

【現在】三省堂国語教科書編集委員、日本学術会議連携委員、昭和文学会幹事

小 南 陽 亮

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 理学博士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 生物教育内容論研究、教科開発学実践論、教科開発学セミナー
研究テーマ 身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展



1. これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は、気候変動と同様に、深刻な地球環境問題として国際的に認識されています。日本においても、生物多様性条約に基づいて、政府は生物多様性国家戦略、自治体は生物多様性地域戦略を策定し、その保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、生物多様性にふれる行動、生物多様性を守る行動、生物多様性を伝える行動を体感することが重要となっています。そのためには、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが必要です。このようなことを背景として、長年にわたって続けてきた森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材の開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

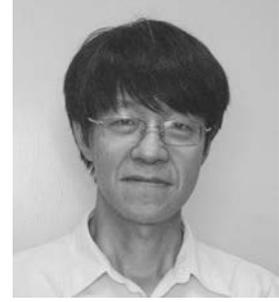
生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

- 1) 里山において簡易な樹木センサスが作業量や方法の点では学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性とは何か、生物多様性はなぜ劣化しているのか、生物多様性はなぜ保全する必要があるのかを学習することができることを示しました。
- 2) 学校教育で観察の対象となってきた生物は植物と昆虫がほとんどでしたが、身近な環境に多様な種が生息しているという点では、鳥類も観察したい生物です。そこで、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、中学校・高校の探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。また、その観察によって、生態系における相互作用網の一端を知ることができ、生物同士のむすびつきを学習するきっかけになりうることを提言しました。

3. 主要な研究業績と活動 (2023.4 ~)

- 1) 浜松トップガン教育システム課外講座「南アルプスの自然を探究するオンライン教材を体験しよう」
(2023.12.6)

熊倉啓之



所属 静岡大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 理学修士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 数学教育論研究
研究テーマ 教材開発論, 小・中・高接続カリキュラム論

1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、算数・数学科教育法等担当教員として、数学教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、数学を学ぶ意義を実感させる指導法、数学的思考力・表現力を育成するための教材開発、小・中・高の接続カリキュラム、フィンランドと日本の数学教育との国際比較について、研究を深めています。また、最近では、長年にわたって教育課題とされている「小中高を一貫する割合指導の体系的カリキュラム開発」に関する研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、指導の対象である「数学」の本質や歴史を踏まえた上で、近年注目されている数学的リテラシーについて考察を加え、数学的リテラシーを育成するための指導の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【数学教育論研究】

本授業では、算数・数学科の指導内容について、1)小・中・高の算数・数学科のカリキュラム、2) 数学的な思考力・表現力の育成に焦点を当てた教材・指導法、3) 数学を学ぶ意義を実感させる教材・指導法、の3点を中心に分析・考察します。

4. 主要な研究業績 (2022. 4～)

- 1) 「Identifying Japanese students' core spatial reasoning skills by solving 3D geometry problems : An exploration」Asian Journal for Mathematics Education, Vol.1, 1-18, 2022, Taro Fujita, Yutaka Kondo, Hiroyuki Kumakura, Shinichi Miawaki, Susumu Kunimune, and Kojiro Shojima.
- 2) 「割合と比の関係に焦点を当てた割合指導の在り方」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.33, 2023.3, pp.101-108, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎.
- 3) 「データの活用領域における批判的思考を促す問題の分析-中学校数学教科書の新旧比較から-」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.33, 2023.3, pp.118-125, 峰野宏祐・松元新一郎・熊倉啓之・石綿健一郎・笹瀬大輔・高山新悟・富田真永・西川洋一郎.
- 4) 「空間図形の問題に関する中学生の説明の特徴-空間における2線分の位置関係に関する説明の分析-」日本数学教育学会誌, 105 巻9号, 2023.9, pp.2-10, 近藤裕・熊倉啓之・藤田太郎・宮脇真一・國宗進.
- 5) 「小中高を一貫する割合指導の体系的カリキュラムとその具体」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.34, 2024.3, pp.183-192, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎・近藤裕・早川健.

5. 主要な社会活動業績 (2022. 4～)

- 1) 静岡県高等学校数学教育研究会講師 (2022.6)
- 2) 石川県教科指導リーダー養成・数学的活動の充実をめざす授業づくり研修講師 (2022.9)
- 3) 鳥取県教職員研修講座 (高等学校数学) 講師 (2022.10)
- 4) 静岡県高等学校数学教育研究会研修会講師 (2023.6)
- 5) 日本数学教育学会第105回全国算数・数学教育研究 (青森) 大会講習会講師 (2023.8)
- 6) 石川県教科指導リーダー養成・数学的活動の充実をめざす授業づくり研修講師 (2023.9)
- 7) 日本数学教育学会第56回秋期研究大会実行委員長 (2023.11)

郡 司 賀 透

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（教育学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 理科教育論研究 教科開発学原論 教育フィールド調査論
研究テーマ 理科カリキュラム基礎論 理科カリキュラム史研究
理科カリキュラムにおける工業に関する教育内容・教材論



1. これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、戦後日本の高等学校化学教科書における化学工業教材史です。関連して二つ目は、主として1950年代における日本の経済成長と教育の関係を、理科教育内容・教材論の水準で研究を進めておりその特質を明らかにしようとしています。三つ目が科学的探究及びエンジニアリングデザインプロセスを活用した理科授業・教材研究になります。

2. 博士課程における教育研究について

教科開発学の視点から、専門領域である「理科」を基盤にしつつも、領域の枠に拘泥することなく、児童・生徒をとりまく環境を絶えず意識しながら、現代の学校教育に諸問題に対応する研究を進めています。理科の特定の教育内容・教材の歴史の変遷について、教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「理科教育論研究」では、教科開発学の核心をなす理科カリキュラム開発について、理科の目的論・目標論、理科の学習内容構造、子どもの自然理解の実態、理科教授論及び、科学と社会との関連について包括的な理解を図るとともに、理科における教科開発力の育成を目指します。

「教育フィールド調査論」では、量的及び質的分析の基礎を学んだ後、受講者の研究テーマに即した分析手法について、議論を通して検討します。

4. 主な研究業績（2018年4月～）

- ・郡司賀透 『理科教育における工業的教材の意義と変遷』 風間書房 2019年2月 全252ページ
- ・郡司賀透・鬼丸颯都・梶山涼矢・井出祐介・高橋政宏 「中学校理科授業における生徒の自己統制感に関する実践研究」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 2020年3月 30号 pp.254-261
- ・郡司賀透 「小学校理科のカリキュラム構成とその動向」 片平克弘・木下博義 『初等理科教育』 協同出版 2021年12月 pp.26-29
- ・郡司賀透 「日常生活と理科の関係」及び「地域性を活かした教材開発」 山本容子・松浦拓也 協同出版 2021年12月 pp.21-22 及び pp.254-257
- ・露木隆・郡司賀透・岩山勉 「電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発：導電性粘土を用いた指導プログラムによる素朴概念の修正」 『理科教育学研究』 第63巻 第1号 2022年7月 pp.127-138
- ・山内慎也・郡司賀透・飯田寛志・後藤顕一 「中学校理科の考察における科学的な表現の育成に関する一考察：相互評価活動下において考察記述の定型化指導を組み込む学習活動を通して」 『理科教育学研究』 第63巻 第2号 2022年11月 pp.1-16
- ・神谷昭吾・平澤傑・郡司賀透・延原尊美 「評価指標を用いた「主体的に学習に取り組む態度」の評価：中学校1年生光の性質の単元を通して」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 33号 2023年3月 pp.275-280
- ・郡司賀透 「理科カリキュラム史研究の現状と今後の可能性」 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻 『教科開発学を創る』 愛知教育大学出版会 第5集 2024年3月 pp.176-190

5. 主な社会的活動（現在）

日本理科教育学会（理事・評議員）、日本エネルギー環境教育学会（編集委員）、株式会社アイエイアイミニロボ事業推進室プログラミング教育アドバイザー等々

松 永 泰 弘

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 博士（工学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育内容論 教科開発学セミナー
研究テーマ 動くおもちゃものづくり・あそび・探究，月面上であそぶおもちゃ，
現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動，
学校・園と家庭の学びが継続する探究の深化，
Unity in Diversity, Play/Inquiry-Based Learning



1. これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも，機械領域の教材開発を行う。主な教材として，形状記憶合金・蒸気・ソレノイド・スターリングエンジンカー，受動歩行模型，機械式振子・天賦時計，*Automata・Marionette*を4つの柱とし，様々な動くおもちゃものづくり教材を開発する。動作原理を探究，新しい道具に挑戦し，ものづくりに熱中するこどもたちの姿，家族や友達に動作原理を説明し製作したものを自慢する姿，継続により，困難に立ち向かう姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。

2. 博士課程における教育研究について

学習集団における *Unity in Diversity, Play/Inquiry-Based Learning*，学校・園と家庭の学びが継続する探究の深化について取り組む。動くおもちゃものづくり・あそび・探究教材の開発を行う。現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動教材の開発を行う。授業実践を通して，教材の特徴，こどもの変容を明らかにする。

3. 担当講義について

【技術教育内容論】 動くおもちゃものづくり・あそび・探究教材の特徴，授業実践の評価を議論する。

4. 主要な研究業績

- ・数学的ものづくり活動における相貫体教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp. 269-277 (2023)
- ・棒の曲げ振動の先端で回転しながら揺れるおもちゃものづくり教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp. 279-287 (2023)
- ・ゼンマイ式オルゴールの動力で動くオートマタ教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp. 289-298 (2023)
- ・中学校技術分野における機構製作による学習効果の検証，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第3号，pp. 215-223 (2023)
- ・現実事象と数学的抽象化を往還する数学的探究活動”塩山”，静岡大学教育学部研究報告，人文・社会・自然科学篇，74，pp. 46-60 (2023)
- ・小学校低学年の遊びを中心とした偏心軸の車輪で動くおもちゃ探究教材を用いた授業実践，静岡大学教育学部研究報告，教科教育学篇，55，pp. 88-101 (2023)
- ・ *Play/Inquiry-Based Learning Using Pendulum Toys in Steam Classes, FINE ART, DESIGN, AND TECHNOLOGY EDUCATION* 2023, Vol. 3, pp. 187-195 (2022)

5. 主要な社会活動業績

- 1) 科学技術高校，浜松工業高校 SSH，こどもクリエイティブタウン「ま・あ・る」評価委員
- 2) 科学研究費助成 2021-2023，日教弘助成 2022
- 3) フジテレビ「世界の何だコレ！？ミステリー」

杉山康司

所属 静岡大学グローバル共創科学部
職位・学位 教授 博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学原論、体育・課外活動教材論研究
研究テーマ 運動生理学、体力科学、トレーニング科学



1. これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちながら活動しております。R5 年度からグローバル共創科学部に配置替えとなりましたが大きなテーマは変わらず行っています。ただ、さらに広い視野を持って共創学的な研究に取り組もうとしております。

2. 博士課程における教育研究について

生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究、特に取り組んできた運動生理学は客観的データの取得を主とした自然科学系の分野であり、学校教育における教科教育の授業研究そのものを支える研究の一つです。教科教育は基礎研究、つまり運動生理学等の教科専門の知見を土台に築かれているといっても過言ではない重要な位置づけであります。博士課程では保健体育において教科専門の知や手法を直接的に教科教育に活かす新たな教科開発学への挑戦が必要であると考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかななどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。教科開発学実践論は受講生の皆様に取り組んでいる博論の進捗状況を拝見させていただくと同時に途中経過や克服課題について意見交換をする場です。他教科との共通点や相違点、他教科の教師も知るべき保健体育の知識から受講生の皆様の研究課題について意見や助言を述べたいと思います。

【体育・課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容を基に受講生の皆様が直面している研究課題と照らし合わせながら、さらに一歩深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスとの研究手法についての共通点や相違点について意見を交わし、実際の研究データに触れながらの論文抄読から、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野からみた創造教科学を考えていきます。

4. 主要な研究業績 (2013.4 ～)

「Relationships between physical fitness and body mass index in 11- and 12- year-old New Zealand and Japanese school children」: 教科開発学論集 2013 1 195-206, [Sugiyama K](#) and Michael J. Hamlin、保健体育教材としてのポスチュアウォーキングの可能性～エキスパートポスチュアウォーカーの筋活動およびビギナーが示す運動強度から～」ウォーキング研究, 2016, 20, 21-27, [杉山康司](#) 他、「Blow Rifle: A Healthy New Sport」Sport Exerc Med Open J. 2017; 3(2): 46-52. [Sugiyama K](#) 他、「ノルディックウォーキング、ランニングにするとどうなる?～ノルディックランニングの生理学的応答～」ウォーキング研究 21, 2018, 17-25、[杉山康司](#)、他など

5. 主要な社会活動業績

日本体力医学会会員（評議員 平成 14 年 10 月～現在）、日本スポーツ少年団指導育成部会部長、静岡県教育委員会スポーツ推進審議会委員、他

紅 林 秀 治



所属 静岡大学大学院教育学領域 技術教育系列
職位・学位 教授 博士 (学校教育学)
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育教材論研究
研究テーマ 技術教育 設計教育 教材開発論

1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程に関する研究を深めています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察します。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

4. 主要な研究業績 (2022. 4 ～)

- (1) 小学校プログラミング教育のための立体LEDキューブ制御教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, 第64巻第1号, pp. 19-29, 2022年, 杉山優貴・大村基将・青木麟太郎・紅林秀治
- (2) Amount of energy consumption during physical activity is a key element in the analysis of neurogenesis in the adult mouse hippocampus, Biwako Journal of Rehabilitation and Health Sciences, Vol. 1 (2022), pp.41-49, Shuji Kurebayashi・Taro Koike・Tetsuji Mori・Hisao Yamada
- (3) 中学校技術・家庭科(技術分野)におけるARを活用した銅鏡製作の授業, 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第54号(2022. 12) pp. 66 - 8, 青木麟太郎・室伏春樹・紅林秀治
- (4) 中学生ロボットコンテストにおける問題解決過程と教育効果の検討, 教科開発学論集 第11号(2023. 3), pp. 101-1014, 室伏春樹・紅林秀治
- (5) 水中掃除ロボット教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, 第65巻, 第1号, 2023年, pp. 43-51, 池谷 慎吾・青木 麟太郎・大村 基将・紅林 秀治
- (6) 工業高校における表面筋電位を用いた計測・制御教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, 第65巻, 第1号, 2023年, pp. 63-72, 脇谷 至恩・大村 基将・青木 麟太郎・紅林 秀治
- (7) 教材用水中探索ロボットの開発, 日本産業技術教育学会実践事例集「テクノロジーとエンジニアリングの教室」第2巻 2023年, pp. 59-68, 柳田 修那・大村 基将・渡邊 啓介・宇都宮 洪志・青木 麟太郎・紅林 秀治

5. 主要な社会活動業績 (2022. 4～)

- (1) 教育研究会(藤枝市, 焼津市, 三島市) 講師
- (2) 静岡県教職員組合 教育研究集会 技術科教育分科会 講師
- (3) 静岡県総合教育センター主催研修 講師
- (4) 藤枝市ロボコン教室 講師

村上陽子

所属 静岡大学教育学部家政教育講座
職位・学位 教授 博士 (学術)
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 家庭科教材論研究
研究テーマ 食文化, 食品物性学, 食品色彩学, 食品科学, ものづくり, 教科連携



1. これまでの教育研究について

食品学・栄養学・食品衛生学・家庭科教育法等の担当教員として、食育や家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が食嗜好性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が食嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調製方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。最近では、小・中学校における給食指導や食に関する指導などについても研究を行っています。これら研究を通して得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科における食育、および、ものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科における新しい教材を提案しています。

2. 博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的手法・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学や栄養学、食品衛生学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を目指しています。教科連携について、食育など生活に関わる現代的課題やものづくりを核とした教科連携モデルの考案・授業実践を考えています。

3. 担当講義について

【家庭科教材論研究】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察し、新たな教材づくりを検討します。

4. 主要な研究業績 (2022-23)

【論文・学会発表・著書】

- 1) 若者世代における人生儀礼および年中行事の現状と課題：認知度と経験率，静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇），55, 35-48, 村上陽子，高橋沙南，鳥居優理香，信國瑞希（2023）
- 2) 若者世代における人生儀礼の現状と課題：産育儀礼に着目して，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），74, 73-92, 村上陽子，信國瑞希，鳥居優理香，高橋沙南（2023）
- 3) 大学生における上司の節句に対する認知と行動：祝い方・行事食・願いに着目して，静岡大学教育実践総合センター紀要，34, 75-88, 村上陽子，信國瑞希（2024）
- 4) 高校生における体験活動と理論を結びつけた食文化に関する実践：伝統の継承と創造を目指して，○高橋沙南，村上陽子，令和5年度日本教育大学協会研究集会，2023年10月8日（山形大学）
- 5) 村上陽子（2022）「第3編 調理・加工食品と糖質，第2章 原料としての糖・甘味料，第1節 和三盆糖」『糖質・甘味のおいしさ評価と健康・調理・加工』（山野善正 監修），エヌティーエス，pp. 223-236（2022）
- 6) 村上陽子（2023）「第6章 日本の食文化 嗜好品の文化」，『食育の百科事典』（日本食育学会編集），丸善出版

5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本教育大学協会全国家庭科部門運営委員（2022～2023）
- 2) 静岡県中学生創造ものづくり教育フェア（お弁当部門）審査委員長，2023年10月30日（静岡市立東中学校）
- 3) 全日本中学校技術・家庭科研究大会助言者
- 4) 附属静岡小学校共同研究者

VII. 諸 資 料

※：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目
 環：教育環境系分野科目、人：人文社会系教科学分野科目
 自：自然系教科学分野科目、創：創造系教科学分野科目

案

前期：愛知教育大学

4月2日	4月8日	4月9日	4月15日	4月16日	4月22日	4月23日	4月29日	4月30日	5月3日	5月4日	5月5日	5月6日	5月7日	5月13日	5月14日	5月20日	5月21日	5月27日	5月28日	6月3日	6月4日	6月10日	6月11日	6月17日	6月18日	6月24日	6月25日	7月1日	7月2日	7月8日	7月9日	7月15日	7月17日	7月22日	7月23日	7月29日	7月30日	8月5日	8月6日	8月11日	8月12日	8月13日	8月19日	8月20日	8月26日	8月27日					
日	土	日	土	日	土	日	土祝	日	水祝	木祝	金祝	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
A期間 基礎科目（6週）														B期間 分野科目（開講8週）														C期間 補講および集中講義、セミナー																							
※基・教科開発学原論①（愛教大） ※基・教科開発学原論②（愛教大） ※基・教科開発学原論③（静大） ※基・教科開発学原論④（静大） ※基・文化資源活用論① ※基・文化資源活用論② ※基・文化資源活用論③ ※基・文化資源活用論④ 合同ガイダンス（会場・両大学）														土曜① 日曜① 土曜② 日曜② 土曜③ 日曜③ 土曜④ 日曜④ 博士論文最終試験（会場・静大） オープンキャンパス オープンキャンパス														教科開発学研究会（会場・愛教大） 応・教科開発学セミナーⅢ（会場・愛教大）																							

4月2日	4月8日	4月9日	4月15日	4月16日	4月22日	4月23日	4月29日	4月30日	5月3日	5月4日	5月5日	5月6日	5月7日	5月13日	5月14日	5月20日	5月21日	5月27日	5月28日	6月3日	6月4日	6月10日	6月11日	6月17日	6月18日	6月24日	6月25日	7月1日	7月2日	7月8日	7月9日	7月15日	7月17日	7月22日	7月23日	7月29日	7月30日	8月5日	8月6日	8月11日	8月12日	8月13日	8月19日	8月20日	8月26日	8月27日					
月	土	日	土	日	土	日	土祝	日	水祝	木祝	金祝	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
A期間 基礎科目（6週）														B期間 分野科目（開講8週）														C期間 補講および集中講義、セミナー																							
※基・教科開発学原論①（愛教大） ※基・教科開発学原論②（愛教大） ※基・文化資源活用論① ※基・文化資源活用論② 合同ガイダンス（会場・両大学）														基・教育フィールド調査論 自・郡司 創・伊藤／紅林／杉山 創・伊藤 創・伊藤／村上 自・郡司 創・伊藤／村上 自・郡司 創・紅林／杉山 自・郡司 創・紅林／杉山 博士論文最終試験（会場・静大）														教科開発学研究会（会場・愛教大） 応・教科開発学セミナーⅢ（会場・愛教大）																							

注・開講の原則

- ① 授業は原則として1日4コマで開講する。そのため、1単位は2日、2単位は4日間の授業開講が必要である
- ② 基礎科目はA週またはD週で集中授業として開講するC週、F週で開講することも可能
- ③ 分野科目は原則としてB週とE週で開講する
 開講する曜日は、土・日曜日及び祝日のいずれかとし、第1週目開始か、第2週目開始を選択する
- ④ C週とF週は補講期間であるが、基礎科目、あるいは分野科目の集中授業を置くこともできる
- ⑤ 教科開発学セミナーⅠおよびⅡはF週で開講し、セミナーⅢはC週で開講する

令和5年度 共同教科開発学専攻 履修登録集計

更新日

10/11

科目区分	授業科目名	単位数	担当教員	開講大学	開講時期	履修者数 合計	愛教大		静大		初回教室	
							学籍番号	氏名	学籍番号	氏名	愛教大	静大
必修	教科開発学原論	2	中野 真志 野平 慎二 田口 達也 梅田 恭子 坂口 京子 香野 毅 丹沢 哲郎 村山 功	共同開講	A期間	9	223D001 後藤 由美 223D002 鈴木 一成 223D003 孔 令杰 223D004 中野 弘幸 223D005 IM RANY	30240003 鈴木 智久 30340001 可知 穂高 30340002 山内 慎也 30340003 高宮 佳祐	4/8 Teams 4/15 Teams	4/23 オンデマンド 4/30 オンデマンド		
	教科開発学実践論	1	竹川 慎哉 寺本 圭輔 野崎 浩成 杉山 康司 鎌塚 優子 中村 ともえ 洪江 かさね 黒川みどり 村上 陽子 松永 泰弘	共同開講	D期間	9	223D001 後藤 由美 223D002 鈴木 一成 223D004 中野 弘幸 223D005 IM RANY	30340001 可知 穂高 30340003 高宮 佳祐 30340002 山内 慎也	オンライン			
専攻基礎科目 選択	文化資源活用論	1	伊藤 貴啓 近藤 裕幸 宮村 悠介	愛教大	A期間	5	220D002 行田 臣 221D001 安藤 久美子 223D002 鈴木 一成 223D003 孔 令杰 223D005 IM RANY			4/9 教育未来館3C 4/16 zoom 4/16 教育・人文棟502		
	科学技術活用論	1	飯島 康之 小谷 健司 大鹿 聖公	愛教大	D期間	4	219D001 片岡 佑衣 219D007 武市 裕子 223D003 孔 令杰 223D005 IM RANY					
	教育評価実証方法論	1	石田 靖彦 鈴木 裕子 鈴木 英樹 山田 浩平	愛教大	D期間	3	223D001 後藤 由美 223D002 鈴木 一成	30340002 山内 慎也	オンライン			
	教育プログラム開発論	1	塩田 真吾 中村 美智太郎	静大	A期間	2		30240004 樋口 大輔 30340001 可知 穂高				
	表現・鑑賞論	1	伊藤 文彦 長谷川 慎	静大	D期間	1		30340003 高宮 佳祐				
	教育フィールド調査論	1	村越 真 郡司 賀透	静大	A期間	7	221D001 安藤 久美子 222D001 木田 千晶 223D001 後藤 由美 223D002 鈴木 一成	30340003 高宮 佳祐 30340002 山内 慎也 30340001 可知 穂高				
	教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦 小南 陽亮	静大	E期間 変形	5	220D002 行田 臣	30340003 高宮 佳祐 30340001 可知 穂高 30340002 山内 慎也 30240003 鈴木 智久				
分野科目 教育環境学	遊び文化環境論研究	2	石川 恭	愛教大	E期間 日曜	5	220D002 行田 臣 222D001 木田 千晶 222D004 劉 宇超 223D002 鈴木 一成	30340001 可知 穂高 30040004 岡村 明夢	11/12 zoom			
	学校適応論研究	2	石田 靖彦	愛教大	E期間 日曜	2	219D001 片岡 佑衣	30240002 井上 健人				
	教育哲学・思想論研究	2	野平 慎二	愛教大	E期間 日曜	1	223D001 後藤 由美					
	教育方法・内容論研究	2	竹川 慎哉	愛教大	E期間 日曜	1	222D002 諏訪園 純					
	教授学習論研究	2	野崎 浩成	愛教大	B期間 土曜	6	222D002 諏訪園 純 222D004 劉 宇超 223D002 鈴木 一成 223D003 孔 令杰	30240001 美那川 雄一				
	幼児教育・保育内容論	2	鈴木 裕子	愛教大	B期間 日曜	3	223D001 後藤 由美	30240002 井上 健人 30240004 樋口 大輔				
	ICT教育研究	2	梅田 恭子	愛教大	E期間 土曜	2	222D003 THY SAVRN 223D005 IM RANY					

令和5年度 共同教科開発学専攻 履修登録集計

更新日

10/11

科目区分	授業科目名	単位数	担当教員	開講大学	開講時期	履修者数		愛教大 履修者		静大 履修者		初回教室	
						合計	学籍番号	氏名	学籍番号	氏名	愛教大	静大	
分野科目 人文社会系 教育学	学校危機管理論研究	2	村越 真	静大	E期間 土曜	1			30340001 可知 穂高 30040004 岡村 明夢				
	教育学論研究	2	村山 功	静大	E期間 土曜	1			30240001 美那川 雄一				
	養護実践教育学論研究	2	鎌塚 優子	静大	E期間 日曜								
	特別支援教育学研究	2	香野 毅	静大									
	情報教育学研究	2	塩田 真吾	静大		2			30340001 可知 穂高 30240003 鈴木 智久				
	第二言語教育論研究	2	田口 達也	愛教大	E期間 日曜	2	223D003	孔 令杰	30240003 鈴木 智久				
	社会科教育論研究	2	近藤 裕幸	愛教大	B期間 土曜	0							
	倫理教材論研究	2	宮村 悠介	愛教大	B期間 日曜	0							
	地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	愛教大	E期間 日曜	0							
	国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	愛教大	E期間 土曜	1	223D004	中野 弘幸					
	生活科教育内容論研究	2	中野 真志	愛教大	E期間 土曜	3	222D001 木田 千晶 223D001 後藤 由美 223D003 孔 令杰						
	外国語教育論研究	2	白畑 知彦	静大									
	歴史教材論研究	2	黒川みどり	静大	B期間 日曜								
国語教育論研究	2	坂口 京子	静大	B期間 日曜									

令和5年度 共同教科開発学専攻 履修登録集計

更新日

10/11

科目区分	授業科目名	単位数	担当教員	開講大学	開講時期	履修者数		愛教大 履修者		静大 履修者		初回教室	
						合計	学籍番号	氏名	学籍番号	氏名	愛教大	静大	
分野科目	自然系教科学	数学教材論研究	飯島 康之	愛教大	B期間 土曜	1	223D005	IM RANY					
		物理教材論研究	岩山 勉	愛教大	E期間 日曜	1	223D005	IM RANY					
		数学教育内容論研究	小谷 健司	愛教大	B期間 日曜								
	創造系教科学	理科教材開発論研究	大鹿 聖公	愛教大	B期間 日曜	1	223D005	IM RANY					
		数学教育論研究	熊倉 啓之	静大	E期間 日曜								
		生物教育内容論研究	小南 陽亮	静大	E期間 土曜	1			30340002	山内 慎也			
		理科教育論研究	郡司 賀透	静大	B期間 日曜	1			30340002	山内 慎也			
分野科目	創造系教科学	保健科教育論研究	山田 浩平	愛教大	B期間 日曜	2	223D002 223D003	鈴木 一成 孔 令杰					
		保健体育内容論研究	寺本 圭輔	愛教大	E期間 土曜	2	223D002	鈴木 一成	30340003	高宮 佳祐			
		体育教材開発論研究	鈴木 英樹	愛教大	B期間 土曜	2	223D004	中野 弘幸	30340003	高宮 佳祐			
		美術教材論研究	伊藤 文彦	静大	B期間 土曜								
		技術教育内容論研究	松永 泰弘	静大	B期間 日曜	1	222D004	劉 宇超					
		技術教育教材論研究	紅林 秀治	静大	B期間 土曜								
		体育・課外活動教材論研究	杉山 康司	静大	B期間 土曜	0							
家庭科教材論研究	村上 陽子	静大	B期間 土曜										
応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ 令和6年2月18日(日・祝) 会場:静岡大学	全教員	共同開講	F期間	9	223D004 223D005 223D002 223D003 223D001	中野弘幸 IM RANY 鈴木一成 孔 令杰 後藤 由美	30340001 30340002 30340003	可知 穂高 山内 慎也 高宮 佳祐			
		教科開発学セミナーⅡ 令和6年2月17日(土) 会場:静岡大学	全教員	共同開講	F期間	11	219D001 222D001 222D002 222D003 222D003	片岡佑衣 木田千晶 諏訪園 純 Thy Savrin THY SAVRIN	30240001 30240003 30240004	美那川雄一 鈴木智久 樋口大輔			
	選択	教科開発学セミナーⅢ 令和5年8月27日(日) 会場:愛知教育大学	全教員	共同開講	C期間	3			30140003 30140004 30540004 30940003	室伏 春樹 菊本 智之 杉山 元洋 塩澤 友樹			

【 論 文 】

- 機械翻訳(MT)の過程と翻訳ストラテジーの分析 …………… 稲葉みどり
—大学生を対象とした調査を基に—
- 理科における科学的な表現の育成を目指す考察指導の可能性 …………… 山内慎也
—相互評価活動と考察記述の定型化指導の研究動向・授業実践に着目して— 郡司賀透
- 児童に心理的な要因があると養護教諭が判断する際の思考の概念化 …………… 三宅昂子
鎌塚優子
- 知的障害のある児童の美術作品等の視覚認知に関する研究 …………… 高橋智子
—視線測定を用いた考察— 杉山康司
永井 彰
- ライフキャリアの視点からみた高校生の
「情報社会を生きる」ことに関するイメージの調査・分析 …………… 可知穂高
—「進学校」と「進路多様校」の比較を通して— 塩田真吾
- 歌唱表現の創意工夫に関する指導についての一考察 …………… 河合紳和
—指揮による表現を用いて表現意図を明確化する試行授業を通して—
- Comparison of Factors Causing Overpassivisation of
Unaccusative Verbs by Japanese Learners of English …………… 岡村明夢
白畑知彦

【 付 録 】

- 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻紀要発行要項
『教科開発学論集』投稿要領

令和3年度～令和5年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その1

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)
 後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目				令和3年度 集計		令和4年度 集計		令和5年度 集計	
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期 間	受講者	曜日・時限・期 間	受講者	曜日・時限・期 間	受講者
基礎科目	必修科目 教科開発学原論	a 2	石川 恭 野平 慎二 野中 真志 梅田 基子 田口 達也 坂口 京子 香野 毅 丹沢 哲郎 村山 功	A期間 4/10(土)・ 4/17(土)・ 4/24(土)・ 5/1(土) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名 静岡大D2 1名	A期間 4/9(土)・ 4/16(土)・ 4/23(土)・ 4/30(土)	愛教大D1 4名 愛教大D2 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/8(土)・ 4/15(土)・ 4/23(土)・ 4/30(土)	愛教大D1 5名 静岡大D1 3名 静岡大D2 1名
		a 1	竹川 慎哉 寺本 圭輔 野崎 浩成 杉山 康司 紅林 秀治 鎌塚 優子 中村ともえ 濱江かすみ 黒川みどり 村上 陽子 松永 泰弘	D期間 10/2(土)・ 10/3(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名 静岡大D2 1名	D期間 10/1(土)・ 10/2(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 愛教大D3 1名 静岡大D1 4名 静岡大D3 1名	D期間 9/30(土)・ 10/1(日)	愛教大D1 4名 静岡大D1 3名
応用科目	必修科目 教科開発学セミナーⅠ	b 2	全教員	F期間 2/12(土)・ 2/13(日)		F期間 2/19(日)	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名	F期間 2/18(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 3名
		b 2	全教員	F期間 2/12(土)・ 2/13(日)		F期間 2/12(日)	愛教大D2 3名 静岡大D2 4名 静岡大D3 2名	F期間 2/17(土)	愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D2 3名
	選択科目 教科開発学セミナーⅢ	b 2	全教員	C期間 8/22(日)		C期間 8/21(日)	愛教大D3 1名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	C期間 8/20(日)	静岡大D3 4名

令和3年度～令和5年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その2

愛知教育大学開講科目				令和3年度 集計		令和4年度 集計		令和5年度 集計			
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者		
基礎科目	選択科目	文化資源活用論	a 1	野地 恒有 伊藤 貴啓 丹藤 博文	A期間 4/11(日)・ 5/18(日)		A期間 4/10(日)・ 4/17(日)	愛教大D1 3名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名	A期間 4/9(日)・ 4/16(日)	愛教大D1 3名 愛教大D3 2名	
		科学技術活用論	a 1	岩山 勉 稲毛 正彦 飯島 康之	D期間 10/16(土)・ 10/17(日)		D期間 10/15(土)・ 10/16(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 3名	D期間 9/30(土)・ 10/1(日)	愛教大D1 2名 愛教大D3 2名	
		教育評価実証方法論	a 1	古田 真司 石田 靖彦	D期間 10/9(土)・ 10/10(日)	愛教大D1 4名 愛教大D2 2名 静岡大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	D期間 10/8(土)・ 10/9(日)	愛教大D1 4名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 3名 静岡大D3 3名	D期間 10/14(土)・ 10/15(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	
教育環境学	分野科目(選択科目)	人文社会系 自然科学 創造系	遊び文化環境論研究	a 2	石川 恭	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 2名	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 愛教大D3 2名 静岡大D1 1名 静岡大D3 1名
			学校適応論研究	a 2	石田 靖彦	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 1名 静岡大D3 1名	E期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D3 1名	E期間 土曜日・ 第1週目	愛教大D3 1名 静岡大D2 1名
			教育哲学・思想論研究	a 2	野平 慎二	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 3名	B期間 日曜日・ 第2週目	静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名
			保育・幼児教育学研究	a 2	新井 美保子	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 第2週目	愛教大D2 1名		
			教育方法・内容論研究	a 2	竹川 慎哉	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D2 2名	E期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名 静岡大D3 1名	E期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 1名
			教授学習論研究	a 2	野崎 浩成	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D2 1名	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 2名 愛教大D2 2名 静岡大D2 1名
			幼児教育・保育内容論	a 2	鈴木 裕子	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名	E期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名
			ICT教育研究	a 2	梅田 恭子	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 第2週目	愛教大D2 1名	E期間 日曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名
			第二言語教育論研究	a 2	田口 達也			E期間 日曜日	愛教大D1 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名
			社会科教育論研究	a 2	近藤 裕幸			B期間 土曜日		B期間 土曜日	
			倫理教材論研究	a 2	宮村 悠介			E期間 土曜日		B期間 日曜日	
			地理学教材論研究	a 2	伊藤 貴啓	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 第2週目		B期間 日曜日・ 第2週目	
			国語科教育教材論研究	a 2	丹藤 博文	E期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名	B期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名
			国語科教育内容論研究	a 2	奥田 浩司			B期間 土曜日			
生活科教育内容論研究	a 2	中野 真志	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 第1週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	E期間 土曜日・ 第1週目	愛教大D1 2名 静岡大D2 1名			
自然科学	数学教材論研究	a 2	飯島 康之	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 第1週目	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名		
	物理教材論研究	a 2	岩山 勉			E期間 日曜日	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 1名		
	理科教育内容論研究	a 2	稲毛 正彦	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名				
	数学教育内容論研究	a 2	小谷 健司	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 日曜日 第2週目		E期間 日曜日 第2週目			
	理科教材開発論研究	a 2	大鹿 聖公	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名	B期間 日曜日・ 第1週目	愛教大D1 1名		
創造系	保健科教育論研究	a 2	山田 浩平			B期間 土曜日・ 第3週目		E期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 2名		
	保健体育内容論研究	a 2	寺本 圭輔			B期間 土曜日・ 第3週目	愛教大D1 1名	B期間 土曜日・ 第3週目	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名		
	体育教材開発論研究	a 2	鈴木 英樹			B期間 土曜日・ 第3週目		B期間 土曜日・ 第4週目	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名		

令和3年度～令和5年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その3

静岡大学開講科目				令和3年度 集計		令和4年度 集計		令和5年度 集計		
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	
基礎科目	選択科目	教育プログラム開発論	a 1	塩田 真吾 中村 美智太郎	A期間 5/8(土)・ 5/9(土)	愛教大D1 2名 静岡大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	A期間 5/14(土)・ 5/15(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 静岡大D1 2名 静岡大D3 1名	A期間 5/13(土)・ 5/14(日)	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名
		表現・鑑賞論	a 1	伊藤 文彦 長谷川 慎	D期間	静岡大D1 1名	D期間 10/15(土) 10/22(土)		D期間 10/14(土) 10/21(土)	静岡大D1 1名
		教育フィールド調査論	a 1	村越 真	A期間 4/18(日)・ 5/25(日)	静岡大D1 4名	A期間 4/17(日)・ 5/24(日)	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名 静岡大D3 1名	A期間 4/29(日)・ 5/13(日)	愛教大D1 2名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 3名
		教育プレゼンテーション論	a 1	白畑 知彦 小南 陽亮	E期間 変形・ 11/13(土)・ 1/8(土)	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D1 1名	E期間 変形・ 11/12(土)・ 1/7(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 3名	E期間 変形・ 11/11(土)・ 1/6(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 3名 静岡大D1 1名
分野科目(選択科目)	教育環境学	学校危機管理論研究	a 2	村越 真	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 2名 静岡大D2 2名	E期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日・ 第2週	静岡大D1 1名 静岡大D3 1名
		教育工学論研究	a 2	村山 功	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 3名 静岡大D2 3名	E期間 日曜日・ 第2週目	愛教大D1 2名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	E期間 日曜日・ 第2週目	静岡大D2 1名
		養護実践教育学論研究	a 2	鎌塚 優子	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	B期間 土曜日・ 隔週	
		特別支援教育学研究	a 2	香野 毅	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 日曜日	愛教大D2 1名 静岡大D2 1名	E期間 日曜日・ 隔週	
		情報教育研究	a 2	塩田 真吾				静岡大D1 1名 愛教大D2 1名		静岡大D1 1名 静岡大D2 1名
分野科目(選択科目)	人文社会科学	外国語教育論研究	a 2	白畑 知彦	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 第1週目	静岡大D1 2名	B期間 土曜日・ 第1週目	
		歴史教材論研究	a 2	黒川 みどり	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 第1週目		B期間 土曜日・ 第1週目	
		国語教育論研究	a 2	坂口 京子	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D3 1名	E期間 土曜日・ 第1週目	
	自然科学	数学教育論研究	a 2	熊倉 啓之	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名	E期間 日曜日・ 第1週目		E期間 日曜日・ 第1週目	
		生物教育内容論研究	a 2	小南 陽亮	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 第1週目		E期間 土曜日・ 第1週目	静岡大D1 1名
		理科教育論研究	a 2	郡司 賀透	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日・ 第1週目		B期間 土曜日・ 第1週目	静岡大D1 1名
	創造系教育学	美術教材論研究	a 2	伊藤 文彦	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 第2週目		B期間 土曜日・ 第2週目	
		体育教育論研究	a 2	新保 淳	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 静岡大D1 2名	B期間 土曜日・ 第2週目			
		技術教育内容論研究	a 2	松永 泰弘	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 第3週目	静岡大D2 1名	B期間 土曜日・ 第3週目	愛教大D2 1名
		技術教育教材論研究	a 2	紅林 秀治	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 第2週目	静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 第2週目	
体育・課外活動教材論研究		a 2	杉山 康司	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 日曜日・ 第1週目	静岡大D2 1名	B期間 日曜日・ 第1週目		
家庭科教材論研究	a 2	村上 陽子	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D3 1名	B期間 土曜日・ 第1週目		B期間 土曜日・ 第1週目			

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
(後期3年博士課程)
共同教科開発学専攻 2023年度報告書
ROAD 第12号

印刷：令和7年3月31日
発行：国立大学法人愛知教育大学
国立大学法人静岡大学
編集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
ISSN 2187-7319

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科(後期3年博士課程)共同教科開発学専攻 2023年度報告書

[ROAD]

ROAD

第12号 令和6年3月発行